拜舞、於二後廂中一拜舞訖退出、于時天皇下二倚子御座一、御二平敷御座一、更令二内侍召一還皇太弟一、還參著座、南第三廂間置二一枚面一、西頃之掌侍倚子取二御祿一、御衣一襲、青色長御衣、蘇芳陽下襲、綾表、御袴、今御袴阿古女等、白綾細長一襲等也、攝政取二御祿一授二於大夫卿一、其中以二紺單御衣一奉レ掛二御頸一、又步進二南廂一再拜舞踏、退出儀式行列如レ初、便參二皇太后宮一、是御在所、殿東妻也、又再拜舞踏依二母后御氣色一、入二御簾中一、有二御祿一、女裝束一襲、以二單御衣一奉レ掛二御頸一、再拜舞踏又如レ初、此間作法神妙、上下見者感涙難レ禁、推而可レ察、次大夫以下進以上給二祿各有一レ差、大夫白大褶一襲、擧士亮大進等各紅袴一腸之、北上西面再拜舞踏、皇太弟御二本殿一、公卿以下有二饗饌一也、

〔台記〕久壽二年十月五日己卯、傳聞東宮〇二條自二鳥羽南殿一行啓同田中殿、先例召二在禪閤之眞信公青絲毛一、今度被レ用二在院之青絲毛一云々、件車故待賢門院爲二中宮一常出入之時、白河院被レ送云々、太子御裝束闕腋袍、螺鈿劒、絲鞋云々、近後一條院爲二太子一拜觀日之例也、見レ爲善記之由、亮親朝臣所レ談也、

〔渡邊舊記〕享保十三年六月二十三日、今晚御拜。覲。御所（中御門）へ御成（櫻町）玄刻、還御子半刻、拜覲之義、數百年御中絕之。御。沙汰。今度御再。興。誠以恐悦御事也、御衣紋高倉殿御參、於二清涼殿御作法一有レ之由、坊官不レ殘御參、地下之輩不及二參勤一、

〔公卿補任 中御門〕享保十三年六月二十三日、皇太子〇櫻町御拜覲、

〔資方朝臣記〕享保十三年六月二十三日、東宮拜覲也、今夜亥刻計也、東宮傅〔綠香公〕令レ候二議定所庇圓座一給、南面東宮出御于議定所艮方之御座、次東宮大夫〔實憲〕取二御劒一〔欵、御劒欵〕、次傅〔卷〕御簾、次東宮出御、經二布障子高遣戸ノ邊ヲ一御通ヲ有レ之、傅以下供奉、脂燭之輩、布障子ノ前ノ妻戸之內取二脂燭一、長橋ノ邊西ノ妻戸ノ邊迄也、入二御于鬼間一、〔御休所〕垂レ簾也、傅被レ候二鬼間ノ孫庇一、北面也、此間主上出二御于晝御座一、御帳臺無二几帳一、立二御倚子一、無二晝御座之疊一、垂レ簾之內左右有二菊燈臺一、簾外同前、次頭辨候二御簾欵一、次傅目、左少辨稚房從二御目一、傅仰二左中辨宣誠可一レ來由、宣誠相從、次孫庇ノ邊ニ御出之道ノ搆ヲ被レ命、次從二簾中一卷レ簾、太子御出、傅以下供奉、太子令レ著二晝御座簾外之疊一給、大夫取レ祿行二于鬼間孫庇之程、亮跪取レ祿了〔掛二左肩一、挾右脇一、左ヲ爲レ上、右ヲ爲レ下、〕復座、〔長橋〕次御拜、傅候二御後一、次令レ出二晝御座一給、二枚杉戸ノ方ヲ御出、取二脂燭一了、次令レ入二議定所一了、脂燭殿上人範篤朝臣、輝季朝臣、保房、房季、丹波尙秀、各東帶奉行光綱也、

〔後矩記〕文化六年三月十四日甲戌、早朝出納來面、昨夕之趣委細演說、卽內豎、戶屋主有之、晝之次名一紙返却、此通諸司參勤被二仰出一間、來月七日已刻可二相催一旨申渡、〔最早別段以二切紙一不二申送一旨申聞、內豎可レ爲二一人一事意味委細申含、內藏權頭承知、卽示談之上、下行員數令二治定一如左、

御拜覲御下行

五斗　出納　一人
三斗　小舍人　一人
二斗　戶屋主　一人

皇太子拜覲儀

刻限皇太子出御在所、令二參御殿一給、

傅取二御裾一、學士二人、亮二人、大夫二人、左右相分前行、〔上藏在左〕大進少進等候二御後一、或傍親公卿在二御供一、

天皇出御

豫御帳中立二御倚子一、〔撤二晝御座一〕

皇太子進二孫庇一、當二御前西面一拜舞、

此間傅大夫留二簀子一、亮以下候二便所一、

次拜舞訖、暫令レ候二昆明池障子後一給、

次入御

此間撤二御帳中御倚子一、更供二尋常御座一、弘廂北第一間敷二東京錦茵一、爲二皇太子御座一、孫庇敷二圓座一枚一、爲二關白座一、

三斗　內豎　一人
三斗　所衆　一人
壹斗五升　仕人　一人〇中略

天皇出御畫御座
次以掌侍召皇太子
皇太子參進御前
次典侍持御衣奉皇太子
皇太子進孫廂拜舞（如初）
次入御

皇太子還御之便、令參二間廂一拜母后給、訖還御（傳以下奉二相從一如レ初）

〔實久卿記〕天保十一年三月二十六日丁巳、今日東宮（孝明）拜覲也、辰終刻許、自昭陽舍東宮出御、坊官供奉、於清涼殿廣廂御拜舞云云、

太子監國

〔令義解（六儀制）〕凡車駕巡幸及還、百官五位以上辭迎、留守者不レ在二辭迎之限一、（謂執掌之長官留守者也、假令監國之太子、若執レ契之公卿之類、）

〔令義解（七公式）〕勅旨式、（略）（中皇太子監國亦准二此式一、以レ令代レ勅、）

〔令集解（三十公式）〕勅旨式、（略）（中）穴云、宰相以上留守之時、不レ用二式耳一、跡云、問、監國未レ知二无皇太子一、差二宰相以上一令二留守一者何行爲、答、不レ合二行事一也、以レ令代レ勅、謂不レ得レ行二詔書耳一、問、皇太子留守條師記云、雖レ給二鈴契一不レ可レ給二內印一、又不レ在二御所事一、餘公事不レ可レ行者、未レ知依二此式一可レ行二令旨一此何色事、答言云云不二明決一耳、

〔令義解（七公式）〕便奏式、（略）（中其皇太子監國（謂天子巡幸、太子留守、是爲二監國一、）亦准二此式一、以二奏勅一代二啓令一、

〔令義解（七公式）〕凡車駕巡幸京師、留守官給二鈴契一、（謂留守官者、皇太子若不レ在者、餘官留守者亦是也、（中略）其依二上條一、太子監國之日、唯得レ用二勅旨及便奏一、以外大事、不レ得レ行、）

〔續日本紀（三十桓武）〕延曆四年九月丙辰、車駕至自二平城一（略）（中至二於行幸平城一、太子（早良）及右大臣藤原朝臣是公、中納言種繼等並爲二留守一、

〔水鏡（下桓武）〕延曆三年十一月十一日戊申、長岡の京にうつり給ふ、同四年八月にならの京へ行幸侍りき、長岡の京には、中納言種繼留守にて候しを、みかどの御おとゝの早良の親王東宮としておはせしが、人をつかはしていころさしめ給ひてき、ことのおこりは、みかどつねにこゝかしこに行幸し給ひて、世のまつり事を東宮にのみあづけたてまつりしかば、天應二年に佐伯今毛人といひし人を宰相になさせ給ひたりしに、この種繼、佐伯の氏のかゝることはいまだ侍らずと御門に申しかば、宰相をとり給ひしを、東宮よにくちをしき事におぼして、種繼をたまはらんと申しを、みかどむつかり給ひて、さらに聞給はずして、このゝち東宮にまつり事をあづけたてまつり給ふ事なくなりにしを、やすからずおぼして、そのひまをとしごろうかゞひたまひつるに、よきをりふしにて、かくゑたまひつる也、

〔職原抄（上）〕攝政、（略）（中）推古天皇朝、皇太子厩戸皇子（推古姪也）攝政、齊明天皇御宇、皇太子中大兄皇子（天智）又攝政、

太子攝政

〔日本書紀（二十用明）〕元年正月壬子朔、立二穴穗部間人皇女一爲二皇后一、是生二四男一、其一曰二厩戸皇子一、（更名耳聰聖德、或名豐聰耳法大王、或云法主王、此之皇子、初居二上宮一、後移二斑鳩一、於二豐御食炊屋姬天皇一（推古）世、位居東宮、摠攝萬機、行二天皇事一、語見二豐御食炊屋姬天皇紀一、

〔日本書紀（二十推古）〕元年四月己卯、立二厩戸豐聰耳皇子一爲二皇太子一、仍錄二攝政一、以二萬機悉委焉一、

〔神皇正統記（推古）〕厩戸皇子を皇太子とし、萬機の政をまかせ給ふ、攝政と申き、太子の監國と云事もあれど、それはゑばらくの事なり、是はひとへに天下を治め給ひけり、

〔聖德太子傳曆（上）〕推古天皇元年四月、天皇初聞二群臣奏一勅曰、吾女人也、性不レ解レ物、萬機日埴、國務滋多、宜二天下之事皆啓一太子一、卽日立二太子一爲二皇太子一、（仍錄二攝政一）萬機悉委焉、太子受二儲君一、固辭再三曰、臣天

性薄愚志耽玄極遊魂彼岸銷意道場過去之世身歷數十遷化漢土僅爲王族錬法通覺期到淨土而今叨領儲君委以萬機神器難滿實祚易頽伏惟陛下紹徽號居紫極御八州以仁壽之化撫三才以柔和之猷海表隨化率土因蹤嘉瑞頻來豐穰相係伏願陛下擇賢良以輔治用善哲以撫民則萬國歡心四海平安臣出家入道爲度外者興隆佛教紹耀玄風天皇不聽勅曰阿兒勿遵汝爲耳目姥非阿兒何由治國太子不敢固辭天下之人民聞而大悦如遭慈父愛母（本願縁起云臣忝裏儲君位再三固辭出家入道爲之度外者興隆佛教紹耀玄風天皇不聽勅曰阿兒勿遵汝爲耳目姥憲章爲王法之規摸流布諸惡莫作敎爲佛法之棟梁）

〔皇年代略記天智〕孝徳天皇大化元年乙巳六月立太子辛酉年七月齊明崩以來皇太子厚至孝不稱即位壬戌以來於岡本宮攝政五箇年八年己巳正月戊子即位

〔神皇正統記齊明〕皇太子と申は中大兄皇子〇天智の御事なり孝徳の御代より太子に立給ふ此御時は攝政し給ふと見えたり

〔革命勘文〕天智天皇者息長足日廣額天皇〇舒明之太子也讓位於母天豐財重日足姫天皇〇皇極及舅天萬豐日天皇〇孝徳二十一年間猶爲太子攝萬機

〇按ズルニ職原抄神皇正統記等ハ皇太子ノ攝政ヲ以テ齊明天皇ノ朝ニ繫ケ革命勘文ハ皇極天皇即位ヨリ齊明天皇崩御マデノ間二十一年間トス而シテ皇年代略記ニハ齊明天皇崩御ヨリ天智天皇即位マデノ間トセリ但シ天智天皇ハ齊明天皇ノ崩後六年ヲ間テ、其ノ七年正月戊子ニ即位セラレタレバ皇年代略記ノ攝政ヲ五ケ年トシ即位ヲ八年正月トセルハ共ニ誤ナリ

〔日本書紀二十天武九〕十年二月甲子是日立草壁皇子尊爲皇太子因以令攝萬機

〔續日本紀八元正〕養老三年六月丁卯皇太子〇聖武始聽朝政焉

〇按ズルニ皇太子始聽朝政トアルハ攝政トハ異ナレドモ類ヲ以テ此ニ附載ス

古立太子不必一人

〔古事記中景行〕凡此大帶日子天皇〇景行之御子等所錄廿一王不入記五十九王幷八十王之中若帶日子命〇成務與倭建命亦五百木之入日子命此三王負太子之名

〔古事記傳二十六〕三王負太子之名とは是上代の常なり抑上ッ御代々々に日嗣御子と申せるは皇子たちの中に取分て尊崇めて殊なるさまに定め賜へる物にて其は必しも一柱には限らず或は二柱三柱も坐しことなり〔まづは皇后の御腹の御兄なる由ある皇子たちなり〕かくて御位は必其日嗣御子の中なるぞ繼坐ける〇略いで其證を具に云むには先葺不合命の御子たち四柱の中に五瀬命と若御毛沼命神武天皇と二柱太子に坐けむこと又神武天皇の太子は神八井耳命と神沼河耳命綏靖天皇と二柱にて坐しこと其に彼御段に委く辨へたるが如し次に書紀崇神卷に四十八年豐城命と活目命垂仁天皇と二柱の內を御夢に因て嗣に定賜へるも元來此二柱太子に坐るが故なり次に垂仁卷に卅年天皇詔五十瓊敷命大足彦尊曰汝等云々とある此も此二柱太子に坐しが故なり〔若然らずばいかでか此二柱に限りて此詔あらむ五十瓊敷命の御墓諸陵式に載て後まで祭賜ふをも思ふべし〕次に應神卷に四十年天皇召大山守命大鷦鷯尊問之曰云々とある是又此二柱も宇遲稚郎子と共に三柱元より太子に坐が故なり故其より前二十八年の處にも太子菟道稚郎子と記され仁德卷には初天皇生日木菟入于產殿云々則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯皇子と見え此記明宮段にも太子大雀命姓氏錄雀部朝臣條にも應神御世皇太子大鷦鷯尊とあり此ら皆上代よりの傳言の隨に記せる文なり又宇遲稚郎子の帝位を固く大雀命に讓避賜ひしも大雀命は御兄にて共に太子に坐が故なるをや

〔日本書紀十應神二十八年九月高麗王遣使朝貢〇略時太子菟道稚郎子讀其表怒之責高麗之使

〔日本書紀十仁德〕元年正月己卯大鷦鷯尊卽天皇位〇中略初天皇生日〇中略則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯皇子

皇子爲太子

〔新撰姓氏錄左京皇別上〕崔部朝臣、〇中略應神御世、代於皇太子大鷦鷯尊、繫木綿襷掌膳、因賜名曰大崔臣、

〔日本書紀三神武〕四十有二年正月甲寅、立皇子神渟名川耳尊〇綏靖爲皇太子、

〔日本書紀四綏靖〕二十五年正月戊子、立皇子磯城津彦玉手看尊〇安寧爲皇太子、

〔日本書紀五崇神〕四十八年正月戊子、天皇勅豐城命活目尊〇垂仁曰、汝等二子、慈愛共齊、不知易爲嗣、各宜夢、朕以夢占之、二皇子於是被命、淨沐而祈、寐各得夢也、會明兄豐城命以夢辭奏于天皇曰、自登御諸山、向東而八廻弄槍、八廻擊刀、弟活目尊以夢辭奏言、自登御諸山之嶺、繩纏四方、逐食粟雀、則天皇相夢謂二子曰、兄則一片向東、當治東國、弟是悉臨四方、宜繼朕位、四月丙寅、立活目尊〇垂仁爲皇太子、以豐城命令治東國、

〔古事記中仲哀〕坐穴門之豐浦宮、及築紫訶志比宮、治天下也、此天皇、〇中略又娶息長帶比賣命、〇功神是大后生御子品夜和氣命、次大鞆和氣命、亦名品陀和氣命、二柱此太子〇應神之御名、所以負大鞆和氣命者、初所生時、如鞆宍生御腕、故著其御名、是以知坐腹中定國也、

〔日本書紀十應神〕四十年正月戊申、天皇召大山守命、大鷦鷯尊問之曰、汝等者愛子耶、對言甚愛也、亦問之長與少孰尤焉、大山守命對言、不逮子長子、於是天皇有不悅之色、時大鷦鷯尊預察天皇之色、以對言、長者多經寒暑、既爲成人、更無悒矣、唯少子者、未知其成不、是以少子甚憐之、天皇大悅曰、汝言寔合朕之心、是時天皇常有立菟道稚郎子爲太子之情、然欲和二皇子之意、故發是問、是以不悅大山守命之對言也、甲子立菟道稚郎子爲太子、仍令掌山川林野、以大鷦鷯尊爲太子輔、令知國事、

〔日本書紀十一履中〕十五年正月甲午、立皇子瑞中倉太珠敷尊〇敏達爲皇太子、

〔日本書紀十二天武〕十年二月甲子、是日立草壁皇子尊爲皇太子、

〔日本書紀三持統〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔日本書紀三持統〕十年七月庚戌、後皇子尊〇高市薨、

〔續日本紀三光仁〕按草壁薨後、高市立爲太子、仍稱後皇子尊、

〔續日本紀三光仁〕寶龜四年正月戊寅、立中務卿四品諱〇武桓爲皇太子、

〔水鏡下光仁〕寶龜四年正月十四日に、山部親王の中務卿と申ておはせし、東宮にたち給ふ、〇中略大臣以下御門に申ていはく、まうけの君はゑばしもおはせずしてあるべき事ならず、すみやかにたて奉り給へと申しかば、御門たれをか立べきとの給はせしかば、百川すゝみて、第一御子山部親王をたて申給ふべしと申き、〇中略濱成申ていはく、山部親王は御母いやしくおはすいかでか位につき給はんと申しかば、御門なことにさる事也、酒人内親王をたて申さんとのたまひき、濱成又申ていはく、第二御子葦田親王御母いやしからず、此親王こそたち給ふべけれと申しを、百川目をいからかし、大刀をひきくつろぎて、濱成をのりていはく、位につき給ふ人、さらに母のいやしきたふときをえらぶべからず、山部親王は御心めでたく、世の人も皆ゑたがひたてまつる心あり、濱成申事道理にあらず、我命をもをしみ侍らず、又二心なし、只はやくみかどの御ことわりをかうぶり侍らんとせめ申しかば、みかどともかくものたまはで、立てり給ひにき、百川此事をうけたまはりきらむとて、はをくひゑばりて、少しもねぶらずして、四十餘日たてりき、みかど百川が心のつよくゆるがざる事を御覽して、さらばとく山部親王の立べきにこそと、ゑぶ〳〵に仰出し給ひしを、御ことばいまだをはらざりしに、庭におりて手を打よろこぶ聲、おびたゞしく高くして、人々皆おどろきさわぎ、百川やがてつかさづかさをめして、山部親王の御許へたてまつりて、太子にたてまつりにき、

〔三代實錄五光孝〕仁和三年八月二十六日丁卯、天皇聖體乖豫、是日立第七皇子諱〇宇多爲皇太子、

〔日本紀略一醍醐〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、

〔扶桑略紀二十三條〕延久元年四月二十八日甲子、以今上第一皇子貞仁親王〇白河立皇太子、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年八月二日、於中宮御方、被定立儲君雜事、其所事兼日被仰合人々、大進時繼書定文、公卿大夫已下參仕云云、四日、自今日依立太子御祈修五壇法、六日、今日立坊御所御裝束始也、八日、頭中將師繼朝臣參向右大臣亭、〇實經藤原召仰立太子事、十日、今上第一皇子、久仁後深草有立太子事、申刻被始行節會云云、畢於御前被行坊官除目、坊官等於弓場殿申慶、又參本宮申慶、公卿相引參本宮、事畢自內裏被獻御劔、壺切紛失之間、被渡他御劔、勅使頭中將師繼朝臣賜祿、再拜退出、

〔吉續記〕文永五年八月一日、來廿五日、可有立坊云云、可悦可悦、俄有沙汰被仰合關東之處、可然之由申御返事故歟、本所頭辨藏人方左佐奉行云云、一向爲院〇後嵯峨御沙汰、四日、今夜立太子定親朝定文奏聞、自仙洞參執筆權中納言云云、可尋記、廿五日甲辰、今日立太子〇宇多也、藏人方光朝俄奉行云云、本所藏人佐親朝奉行、予御膳勅使兼日被相催之間申領狀、扶所勞申斜參內、節會已被始、

〔帝王編年記二十七伏見〕正應二年四月廿五日、立太子節會、第一皇子胤仁親王〇後伏見

〔神皇正統記後醍醐〕又の年戊寅の春二月、〇略中陸奥の御子〇後村上又東へむかはしめ給ふべき定あり、〇略中親王は儲の君にたゝせ給ふべきむね申さかせ給ふ、道の程もかたじけなかるべし、〇略中七月の末つかた、伊勢に越させ給ひて、神宮に事のよしを啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、ともづなをとかれしに、十日比のことにや、上總の地ちかくより、空のけしきおぼろ〳〵しく、海上あらくなりしかば、又伊豆の崎といふ方にたゞよはれ侍りしに、いとゞ波風おびたゞしくなりて、あまたの船行かたしらず侍りけるに御子の御船はさはりなく、伊勢の海につかせ給ふ、〇中略方々にたゞよひし中に、此二つの舟おなじ風にて東西に吹わけらる、末の世にはめづらかなるためしにぞ侍るべき、儲の君にさだまらせ給ひて例なきひなの御住居もいかゞとおぼえし

に、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし、後に芳野へ入せまし〳〵て、御目の前にて天位をつがせ給ひしかば、いとゞ思ひあはせられてたふとくも侍るかな、

皇孫爲太子

〔秀長卿記〕應安四年三月廿三日丁未、今日有御讓位事、今上二宮、後諱緒仁〇先當日有御元服事、宣命、緒仁親王乎今日新加元服氏、皇太子止定賜比天、此天日嗣乎授賜布、〇節略

〇按ズルニ、歷代皇紀同日ノ條ニ、無立太子儀ノ文、

〔武德編年集成四十八〕慶長五年十二月十二日、當今〇後陽成第二ノ皇子、政仁親王〇後水尾儲王ニ定メラル、御母近衞殿信尹公ノ女也、當今御愛君ニテ、最初皇太子タルベキ所、菊亭右大臣晴季公、德善院玄以ト肯議シ、大閤秀吉ヘ告ゲ、第一ノ皇子良仁親王母ハ中山大納言親總卿ノ女ヲ皇太子ニ立ラル、元ヨリ此事叡慮ニ應ゼザル故、頃日近臣ヲ以テ、神君〇家康ヘ密詔アリ、神君曰、凡子ヲ知ル事父ニ如ハナシ、臣モ亦男子多シト雖ドモ、繼嗣タル事臣ガ心ニ在ルノミ、第一第二ノ皇子ノ內、皇太子タラン事、孰レ成トモ叡慮ニ任セラルベシ、殊ニ政仁親王、母君貴キ上ハ、猶更然ルベシト奏セラレケレバ、大ニ叡感有テ、此御沙汰ニ及ブト云云、

〇按ズルニ、皇子ヲ太子トセラレシ例ハ、此他ニモ猶多ケレド略ス、

〔續日本紀一文武〕高天原廣野姬天皇〇持統十一年、立爲皇太子、

〔日本書紀通證三十五〕私記引王子枝別記曰、文武天皇、〇略中持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午、立爲皇太子、今按壬午十六日、蓋脫文也、

〔神皇正統記持統〕草壁の皇子は太子に立給しが、世をはやくし給ふに依て、其御子輕王を皇太子とす、文武になしまゐらす、

〔懷風藻〕葛野王

王子者淡海帝之孫、大友太子之長子也、〇略中器範宏邈、風鑒秀遠、材稱棟幹、地兼帝戚、少而好學、博

皇弟爲太子

渉經史、頗愛屬文、兼能書畫、淨御原帝〇天武嫡孫、授淨大肆、拜治部卿、高市皇子薨後、皇太后〇持統引王公卿士於禁中、謀立日嗣、時群臣各挾私好、衆議紛紛、王子進奏曰、我國家爲法也、神代以來、子孫相承、以襲天位、若兄弟相及、則亂從此興、仰論天心、誰能敢測、然以人事推之、聖嗣自然定矣、此外誰敢間然乎、弓削皇子在座、欲有言、王子叱之乃止、皇太后嘉其一言定國、殊閑授正四位、拜式部卿、時年卅七、

〔扶桑略記六元明〕和銅七年六月廿八日庚辰、以豐櫻彦親王〇聖武天皇也、立皇太子、于時年十四歲、令加元服、是

〇按ズルニ、聖武天皇ハ文武天皇ノ皇子ニシテ、元明天皇ノ皇孫ナリ、

〔日本紀略一醍醐〕延長元年〇延喜二十三年四月廿九日癸酉、詔以故文獻彦太子息慶賴王爲皇太子、年三

〇按ズルニ、文獻彦太子ハ醍醐天皇ノ第二ノ皇子保明親王ノ諡號ナリ、

〔神皇正統記朱雀〕御兄保明の太子證を文彦と申す早世、其御子慶賴の太子も打つゞきかくれましゝかば、保明一腹の御弟にてたちたまふ、

〔吉口傳〕以宮子立坊末代不可有事

一品被相語云、保明太子者醍醐天皇第二皇子也、〇略中延長元年三月廿一日薨、廿一歲證曰文彦、此時保明御子以慶賴延長元年四月廿九日立皇太子、三歲同三年六月十八日薨、五歲此時醍醐天皇勅定云、保明太子早世、遺愛之餘以彼子立坊之處、又早世、以宮子立坊之條末代不可有事也云云、仍此後一切無其例也、凡桓武以後、慶賴之外中絶人立坊之條未聞其例者也、

〇按ズルニ、後陽成天皇ノ如キモ亦皇孫ナレドモ、立太子ノコトナカリシユヱ、此條ニ載セズ、

〔日本書紀十二履中〕二年正月己酉、立瑞齒別皇子、〇正反爲儲君、

〔水鏡上反正〕仁德天皇第四御子、履中天皇の御をとゝ也、〇略中履中天皇の御子おはせしかども、こ

皇弟爲太弟

のみかどを東宮には立てたてまつらせ給ひしなり、

〔續日本紀三十桓武六〕天應元年四月壬辰、立皇弟早良親王爲皇太子、

〔康道公記〕寛永二十年十月三日、今日避位〇正明傳皇太子、〇光後明

〇按ズルニ、後光明天皇ハ明正天皇ノ御異母弟ナリ、

〔忠利宿禰記〕寛文三年正月廿六日乙未、今日被行御讓位〇西後院節會、〇略中御讓位次第、〇略中次藏人來仰云、以識仁親王、〇元靈爲皇太子、卽讓位、

〇按ズルニ、靈元天皇ハ後西院天皇ノ御異母弟ナリ、

〔日本書紀二十七天智〕八年十月庚申、遣東宮大皇弟於藤原内大臣家、

〔日本書紀二十八天武〕天命開別天皇〇天同母弟也、〇略中天命開別天皇元年、立爲東宮、

〔日本書紀二十八天武〕天淳中原瀛眞人天皇、〇天武

皇太子ノ兩稱ヲ互ニ用キシガ如シ、

〇按ズルニ、扶桑略記天智天皇七年二月ノ條ニ、以大海人皇子立皇太子ト見エテ、當時皇太弟、

〔日本紀略平城〕大同元年五月壬午、詔彈正尹某嵯峨定賜皇太弟、

〔神皇正統記嵯峨〕桓武第二の子平城同母の弟なり、太弟に立給へりしが、己丑のとし卽位、〇略中桓武の帝鍾愛無雙の御子になんおはしける、儲君に居給ひけるも、父の帝繼體のために願命しけるにこそ、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁元年〇大同五年九月庚戌、是日〇略中立中務卿諱〇淳和爲皇太弟、詔曰、現神云云、

〔神皇正統記朱雀〕天皇御子ましまさず、一腹の御弟太宰の帥の親王〇村上を太弟に立て、天位をゆづりて尊號あり、

〔皇年代略記村上〕天慶七年四月廿二日甲子、立皇太弟、十九、元三品太宰帥、朱雀無男子、以舍弟爲子

立之、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年九月一日丙戌、立二先皇第五皇子守平親王一〇圓融爲一皇太弟一、年九即任二坊官一、

〔神皇正統記圓融〕圓融院、諱は守平、村上第五の御子、冷泉同母の弟なり、

○按ズルニ、日本紀略安和二年八月十三日ノ條ニハ、天皇讓二位於皇太子一〇圓トアリ、

〔御堂關白記〕寛仁元年八月九日甲戌、以二三宮一〇皇子後三條敦良立二皇太弟一、

〔神皇正統記後一條〕東宮〇敦明しりぞき給ひしかば、此天皇同母の御弟、敦良親王〇後朱雀立給ひき、

〔帝王編年記十八後三條〕寛德二年正月十六日癸酉、立爲二皇太弟一、

〔神皇正統記後三條〕朱雀の御素意にて、太弟に立給ひき、又三條の御末をもうけ給へり、むかしもかゝるためし侍りき、兩流を內外にうけ給ひて、繼體の主となりまし〳〵き、

〔百練抄五白河〕延久四年十二月八日、是日立二實仁親王一爲二皇太弟一、

○按ズルニ、實仁親王ハ、後三條天皇ノ皇子ニシテ、白河天皇ノ御異母弟ナリ、

〔皇年代略記近衛〕保延五年八月十七日、爲二皇太弟一、一崇德〇近衛異母兄雖二皇子一坐、依二上皇御氣色一立之、

〔續世繼ニ八重の潮路〕今の女院〇鳥羽后美福門院得子時めかせ給ひて、近衛のみかど生奉せたまへる、東宮にたてまつりて位讓り奉せ給ふ、〇中略みかどの御やしなひ古例なきとて、皇太弟とぞ宣命には載られ侍りける、

○按ズルニ、近衛天皇ハ、最初皇太子ニ立チ給ヒシガ、永治元年十二月、崇德天皇御讓位ノ時、爲二羽法皇ノ御意ヲ以テ一、更ニ皇太弟ト改テ受禪セシメ給ヒシガ如シ、ナホ讓位篇皇太弟受禪ノ條參看スベシ、

〔神皇正統記土御門〕天下を治め給ふ事十二年、太弟〇順德にゆづりて、尊號例のごとし、

〔皇年代略記順德〕正治二年四月十五日庚子、立二太弟一、四皇兄爲太子

皇姪爲太子

〔皇年代略記龜山〕正嘉二年八月七日、立二皇太弟一、十後深草〇龜山同母兄雖レ有二繼嗣一爲二上皇勅一立之、

〔皇年代略記崇光〕貞和四年十月廿七日、以二花園院第二皇子直仁親王一爲二光嚴院御養子一爲二皇太弟一、

○按ズルニ、崇光天皇ハ光嚴天皇ノ皇子ナリ、

〔日本書紀十五仁賢〕億計天皇、〇仁賢弘計天皇〇顯宗同母兄也、白髮天皇〇清寧二年四月、立二億計天皇一爲二皇太子一、五年白髮天皇崩、天皇〇仁賢以二天下一讓二弘計天皇一、

〔日本書紀七成務〕四十八年三月庚辰朔、立二甥足仲彦尊〇仲哀一爲二皇太子一、

〔神皇正統記仲哀〕仲哀天皇は、日本武尊第二の子、景行の御孫なり、〇中略太祖神武より第十二代景行までは、代のまゝに繼體し給ふ、日本武尊世をはやくし給ひしにより、成務是を繼給ふ、此天皇を太子としてゆづりなし〳〵しより、代を世とかはれるはじめなり、

〔日本書紀二十推古〕元年四月己卯、立二厩戸豐聰耳皇子一爲二皇太子一、

○按ズルニ、厩戸皇子ハ、推古天皇ノ皇兄用明天皇ノ皇子ナリ、

〔續日本紀九元正〕神龜元年二月甲午、天皇禪二位於皇太子一、〇聖武

○按ズルニ、皇太子卽チ聖武天皇ハ、元正天皇ノ御同母弟ナル文武天皇ノ皇子ナリ、

〔日本紀略嵯峨〕大同四年四月己丑、立二高岳親王一爲二皇太子一、

〔紹運要略〕高岳親王、平城子、後號二眞如親王一、大同四年四月日立坊、

○按ズルニ、皇太子ノ御父平城天皇ハ、嵯峨天皇ノ御同母兄ナリ、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年四月壬寅、〇中略立二侍從從四位下恒世王一〇淳和皇子爲二皇太子一、太子上表固辭、仍立二正良親王一〇仁明爲二皇太子一、癸卯、太上皇〇嵯峨遣權中納言藤原朝臣三守、令二賚一辭皇太子書一上、今上、〇中略卽令二三守奉一返、甲辰、上表太上皇曰、臣諱淳和言、伏奉二昨詔一、不レ許レ立二正良一爲二皇太子一云云、先是皇太子移二權中納言藤原朝臣三守宅一、卽差二三守等一迎之、兵衞陣列御車前後至二待賢門一、更御二輦入一坊、

○按ズルニ、皇太子正良親王ハ、淳和天皇ノ御異母兄ナル嵯峨天皇ノ皇子ナリ、

〔日本紀略六圓融〕安和二年八月十三日戊子、立二先帝○冷泉第一皇子師貞親王一為二皇太子一、年二在一條

〔神皇正統記圓融〕圓融院、諱ハ守平、村上第五の御子、冷泉院同母の弟なり、

〔公卿補任花園〕文保二年二月廿六日庚午、踐祚新帝○後醍醐

三月九日庚寅、邦良親王為二皇太子一、

○按ズルニ、邦良親王ハ、後醍醐天皇ノ御異母兄ナル後二條天皇ノ皇子ナリ、

〔神皇正統記後醍醐〕後二條世をはやくしまし〳〵て、父の上皇○宇多なげかせ給ひし中にも、よろづ此君○後醍醐にぞ委附し申させ給ひける、やがて儲君のさだめありしに、後二條の一の御子邦良の親王居給ふべきかと聞えしに、おぼしめす故ありて、此親王を太子にたて給ふ、彼の一の御子をさなくましませば、御子の儀にて傳へさせ給べし、若邦良の親王早世の御事あらば、此御すゑ繼體たるべしとぞ定るしおかせ給しかば〳〵ける、彼親王鶴膝の御病ありて、おやうくおぼしめしける故なるべし、○中かゝりし程に後宇多院かくれさせ給ひて、いつしか東宮○邦良の御方にさぶらふ人々そば〳〵に聞えしが、關東に使節をつかはされ、天位をあらそふまでの御中らひに成にき、あづまにも東宮の御事をひきたて申す輩ありて、御いさゝかほりのはじめとなりぬ、元亨甲子の九月のすゑつかた漸事あらはれにしかども、大方は事なくてやみぬ、其後ほどなく東宮かくれ給ふ、神慮にもかなはず、祖皇の御いましめにもたがはせ給ひけりとぞおぼえし、

〔歷代皇紀光明〕皇太子益仁親王、○崇光院○嚴日立親王、後日改名興仁、

○按ズルニ、益仁親王ハ、光明天皇ノ御同母兄ナル光嚴天皇ノ皇子ナリ、

従兄弟為太子

〔公卿補任後櫻町〕明和五年二月十七日立太子、○後桃園

○按ズルニ、後桃園天皇ハ、後櫻町天皇ノ御異母弟ナル桃園天皇ノ皇子ナリ、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年二月丁亥、立二恒貞親王一為二皇太子一、詔曰、天皇我詔旨良萬止勅御命乎、親王等諸臣等百官人等天下公民衆聞食止宣、朕以二拙弱一氏掛畏支倭根子天皇我朝廷乃厚慈乎蒙天皇太子止成禮利因畏萬利貴比晝夜止无之、然乎慮外爾日嗣乎授賜布、依天不堪流狀乎再比三比畏利申賜戸止容賜波須今思行佐久厚恩乎蒙人波必敬倍支理利有、故是以正嗣止有戸支恒貞親王乎皇太子止定賜布、故此之狀乎悟天百官乃人等仕奉止宣布天皇我御命乎衆聞食止宣、○中略後太上天皇○淳和遺權中納言從三位藤原朝臣吉野、奉二書天皇一辭立二皇太子一曰、暴親今日詔再立二愚子恒貞一為二皇太子一、叡旨謬隆、盛典曲施、夫洊雷位重、承二祧事一尊、非二德不一昇、非賢何守、恒貞年實蒙幼、器非二夙惠一、安可二妄鍾一大禮、猥主七鬯、肅奉二周邊一、內知云冥、請停二嚴命一、更擇二賢才一、在於二重情一、寔知二免喙一、縱使天綸不駐、上令必行、則失二萬國以貞之望一、虧二三辰曰敬之職一、三月戊子朔、天皇緣後太上天皇辭立太子、奉答表曰、臣某言、伏願詔旨曰、恒貞年實蒙幼、器非二夙惠一、安可二妄鍾一大禮、猥主七鬯、夫輕者重之端、小者大之本、故魏宮岐嶷、非二老大之情一、晉儲神姿、是幼稚之謂、然則聰惠在レ性、不二限年齡一、伏稽二前言一、既有二故實一、臣頻表懷抱、心事共違、家資之慙渝誰為助、伏願假彼重明一照曚昧一、資二其寬博一、備二遺忘一、臣之至愚、聖衷所レ驗、雖レ云二無德庶幾有一レ隣、冀垂二矜憐一、賜二綏憤一、至誠不レ飾、至敬無レ文、伏表二丹愿一、無レ地取レ喻、後太上天皇復奉二書曰一、內揆已審、請易二太子一、冲鑒未レ廻、憂心如レ灼、易曰、主器莫レ若二長子一、禮曰、登儉受レ爵、以二上嗣一、斯皆温文既習、致敬克躋、然後正二位前星一、贊二業東序一者也、今恒貞漢莊難擬、周儲不レ追、將何以禋二光聖明一、助二聰天扈一、而恩哀遙屆、血謝不レ成、獨雖レ非レ宜、與談孰許、恐龍樓之守、爰墜、庖俎之譏有レ聞、望昭二丹鮮一、必收二紫渙一、山朝事隔二無可一レ開言、父子體同、理當二分疏一、異二於婺不一恤緯、戸不レ越レ樽之義一、是以重復鋪陳、佇蒙二矜聽一、天皇不レ許、奉レ還二其書一、

〔水鏡仁下明〕東宮○恒貞と申は、淳和天皇の御子なり、みかど○仁明には御いとこにておはしまし、

也、

○按ズルニ、仁明天皇ノ御父嵯峨天皇ト、皇太子恒貞親王ノ御父淳和天皇トハ、異母ノ御兄弟ナリ、

〔扶桑略記二十七〕永觀二年八月廿七日甲辰、天皇○中略禪位於皇太子師貞親王、○花山同日懷仁親王○一條立皇太子、

〔榮花物語二花山〕時々の事どもはかなく過もて行て、七月○永觀二年すゑひも近くなれば、これを若宮○一條に見せばやと宣はすれど、おとゞ○藤原兼家少しふさはぬ樣にて過させ給に、たび〳〵なゐらせ給へとうちよりめしおれど、みだりかせなどさま〴〵のおぼんさはりどもを申させ給ひつゝまゐらせ給はぬを、すゑひちかくなりて、きりにまゐらせ給へれば、いとこまやかに御ものがたりありて、くらゐにつきてことし十六年になりぬ○中略東宮○花山位につき給なば、わかみやをこそは、春宮にはすゑめとおもふに、いのりところ〴〵によくせさせて、おもひのごとくわべくいのらすべし、おろかならぬこゝろのうちを、ゑらで、たれも〳〵こゝろよからぬけしきのあるいとくちをしきことなり、あまたあるをだに、人はこをばいみじきものにこそおもふなれ、ましていかでかおろかにおもはんなど、よろづあるべきことゞもおぼせらるる、うけたまはりてかしこまりてまかで給て、にようごの○一條母后詮子にものさゝめき申させ給て、おぼんとなぶらめしよせて、こよみ御らんじて、ところ〴〵におぼんいのりつかひどもたちさわぐを、かう〳〵との給はせねど、とのゝ中の人々けしきを見ておもへるさま、いふもおろかにめでたし、このいへのこのきんだち、いみじうえもいはぬ御けしきどもなり、○中略おとゞのおぼんこゝろのうち、はれ〴〵しうてまじらはせ給、かくて八月になりぬれば、廿七日御讓位とてのゝしる、其日になりぬれば、みかど○融圓はおりさせ給ひぬ、とうぐう○花山はくらゐにつかせ給ぬ、東宮には梅つぼのわかみや○一條ゐさせ給ぬ、いへばおろかにめでたし、世はかうこそはとみえきこえたり、

○按ズルニ、花山天皇ノ御父冷泉天皇ト、皇太子○即チ一條天皇ノ御父圓融天皇トハ、異母ノ御兄弟ナリ、

〔日本紀略九後篇〕寛和二年七月十六日壬午、冷泉院第二○第二下恐脫二皇子二字一居貞親王、○三條中略、今日立二親王一爲二皇太子一、

○按ズルニ、一條天皇ノ御父圓融天皇ト、皇太子○即チ三條天皇ノ御父冷泉天皇トハ、同母ノ御兄弟ナリ、

〔一代要記十四後宇多〕頭書　太子熙仁親王、○伏見

後深草第二子、母玄輝門院、建治元年十一月五日爲二皇太子一、

〔神皇正統記伏見〕後嵯峨の御門、繼體をば龜山とおぼえしを龜山弟順の儀をおぼしめしけるにや、此君○伏見を御猶子にして東宮にすゑ給ぬ、○中略關東の輩も龜山の正統をうけ給へる事はゑり侍りしかど、近頃となりて世をうたがはしく思ひければにや、兩皇○後深草、龜山、の御流れをかはるゞ〳〵すゑ申さんと、相はからひけりとなん、

○按ズルニ、後宇多天皇ノ御父龜山天皇ト、皇太子○即チ伏見天皇ノ御父後深草天皇トハ、同母ノ御兄弟ナリ、又兩統更立ノコトハ、踐祚篇兩統更立條ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、

〔日本書紀十五顯宗〕白髮天皇○清寧二年十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於二赤石郡一親辨新嘗供物、適會縮見屯倉首縱賞新室、以夜繼晝、爾乃天皇謂二兄億計王一曰、避二亂於斯一年踰數紀、顯名著貴方屬今宵、億計王惻然歎曰、其自導揚見害、孰與全身免厄也歟、天皇曰、吾是去來穗別天皇○履中之孫、而困事於人、飼牧牛馬、豈若顯名被害也歟、遂與億計王相抱涕泣、不能自禁、億計王曰、然則非弟

再從兄弟爲太子

誰能激揚大節、可以顯著天皇固辭曰、僕不才、豈敢宣揚德業、億計王曰、弟英才賢德、爰無以過、如是相讓再三、而果使天皇自許稱逃、俱就室外居乎下風、○中略億計王起舞既了、天皇次起、自整衣帶、爲室壽、○中略壽畢乃赴節歌曰、伊儺武斯廬、弭簸沂比野儺擬、寐逗愈凱歷、儺弭企於已陀智、曾能泥播宇世儒、小楯謂之曰、可怜、願復聞之、天皇遂作殊舞、詰之曰、倭者彼彼茅原、淺茅原、弟日僕是也、小楯由是深奇異焉、更使唱之、天皇詰之曰、石上振之神楯、伐本截末、於市邊宮治天下、天萬國萬押磐尊御裔僕是也、小楯大驚、離席帳然再拜、承事供給、率屬欽伏、於是悉發郡民、造宮不日、權奉安置、乃詣京都、求迎二王、白髮天皇聞嘉咨歎曰、朕無子也、可以爲嗣、與大臣大連定策禁中、仍使播磨國司來目部小楯持節、將左右舍人、至赤石奉迎、白髮天皇三年正月、天皇隨億計王到攝津國使臣連持節、以王青蓋車迎入宮中、四月立億計王○顯宗爲皇太子、立天皇○仁賢爲皇子、

○按ズルニ、仁賢天皇ハ、清寧天皇ノ再從弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

仁德—履中—市邊押磐皇子—仁賢
　　—允恭—雄略—清寧

〔日本紀略十三後一條〕長和五年正月廿九日甲戌、立先皇○三條第一皇子式部卿敦明親王○小一條院爲皇太子、宣制畢、大臣以下諸衞等奉劒璽等、

○按ズルニ、敦明親王ハ後一條天皇ノ再從兄ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

冷泉—三條—敦明
村上—圓融—一條—後一條

〔一代要記十五後伏見〕太子邦治親王

〔皇年代略記後二條〕諱邦治、後宇多第一皇子、○中略永仁六年八月十日立太子、

〔神皇正統記後醍醐〕龜山後宇多世をしろしめさずなりにしを、たひ〳〵關東に仰給ひしかば、天

命の理りかたじけなくおそれ思ひければにや、俄に立太子のさた有しに、龜山は此君○後醍醐をすゑたてまつらんと思しめして、八幡宮に告文ををさめ給ひしかど、一の御子さしたるゆゑなくてすてられがたき御事なりければ、後二條ぞ居給へりし、

〔一代要記十五後二條〕太子富仁親王

〔皇年代略記花園〕諱富仁、伏見院第二皇子、後伏見院御猶子、○中略正安三年八月廿四日立太子、

〔一代要記十五花園〕太子尊治親王

〔皇年代略記後醍醐〕諱尊治、後宇多第二皇子、○中略德治三年九月十九日立太子、廿一後二條院有事、邦良皇子幼年仍法皇被仰關東有沙汰、

〔皇年代略記光明〕建武三年十一月十四日、以先帝○後醍醐皇子成良親王爲皇太子、

○按ズルニ、後二條天皇ノ後伏見天皇ニ於ケル、花園天皇ニ於ケル、後醍醐天皇ノ花園天皇ニ於ケル、共ニ再從兄弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、而シテ成良親王ノ光明天皇ニ於ケルハ、三從兄弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

後嵯峨—後深草—伏見—後伏見—光明
　　—龜山—後宇多—後二條
　　　　—後醍醐—成良

〔百練抄四後三條〕寬弘八年六月十三日受禪、是日立敦成親王○後一條爲皇太子、四歲、一條院二男、

〔權記〕寛弘八年五月廿七日庚子、雖有所勞無便籠居、相扶參內、有召候御前、仰云、可讓位之由一定已成、一親王〇敦康事可如何哉、即奏云、此皇子事所思食歎尤可然、抑忠仁公〇藤原寛大長者也、昔水尾天皇〇清和者、文德天皇第四子也、天皇愛姬紀氏所產第一皇子、〇惟喬依其母愛亦被優寵、帝有以正嫡令嗣皇統之志、然而第四皇子〇惟仁以外祖父忠仁公朝家重臣之故、遂得爲儲貳、今左大臣〇藤原道長者、亦當今重臣、外戚其人也、以外孫第二皇子、〇一條後定應欲爲儲宮、尤可然也、今聖上〇一條雖欲以嫡爲儲、丞相未必早承引、當有御惱之時代忽變、事若啾々、如不得弓矢之者、於議無益、徒不可令勞神襟、仁和先帝〇光孝依有皇運雖及老年、遂登帝位、恒貞親王始備儲貳、終被棄置、前代得失略以如此、如此大事、只任宗廟社稷之神、非敢人力之所及者也、但故皇后宮〇敦康母后定子外戚高氏〇高階成忠之先、依齋宮之事、爲其後胤之者、皆以不和也、今爲皇子非無所怖、能可被祈謝大神、猶有愛憐之御意、給年官年爵幷年給受領之吏等、令一兩宮臣得恪勤之便、是上計也者、是亦自去春來、每有雍容所被仰、亦所上奏之旨耳、卽重勅曰、汝以此旨仰左大臣哉如何、卽奏曰、左右可隨仰、但如此之事、以御意旨面可賜仰事歟因有天許、未參御前之間、於大盤所邊、女房等有悲泣之聲、驚問兵衛典侍云、御惱雖非殊重、忽可有時代之變云云、仍女官悲歎也、此間主上出御晝御座、蒙仰、仰以有難忍之事等、今朝左大臣參東宮、〇三條被申御讓位案內云云、此事自昨所發也云云、〇略節

〔榮花物語九 浦々〕かくて御かど、〇一條いかでおりさせ給なんとのみおぼしのたまはすれど、〇略中いまはかくてをりゐなむとおぼすを、さるべきさまにおきて給へとおぼせらるれば、殿〇藤原道長うけたまはらせ給て、東宮に御たいめんこそは例の事なれとて、思しおきてさせ給程に、春宮には一宮〇敦康をとこそおぼしめすらめと、中宮の御心のうちにもおぼしおきてさせ給へるに、うへおはしまして、東宮の御たいめいそがせ給に、世人いかなべいことにかとゆかしう申思ふに、一宮の御かたさまの人々、わか宮〇後一條かくてたのもしういみじき御なかよりひかり出させ給へる、いとわづらはしう、さやうにこそはとおもひきこえさせたり、〇略中東宮行啓あり、〇略中みすどしに御たいめありて、あるべき事どもも申させ給、〇略中位もゆづりきこえさせ侍りぬれば、東宮にはわか宮をなん物すべうはべる、だうりのまゝならば、そちのみや〇敦康をこそはと思ひ侍れど、はかゞ〳〵しきうしろみなどもはべらねばなむ、〇略中などさまゞ〳〵あはれに申させ給ふ、

○按ズルニ、後一條天皇ハ、三條天皇ノ從姪ニシテ、太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

再從姪爲太子

三從兄弟之子爲太子

村上
- 冷泉―三條
- 圓融―一條―後一條

〔皇年代略記 後醍醐〕嘉曆元年七月廿四日、後伏見院皇子量仁親王〇光嚴爲立太子、

〔皇年代略記 光嚴〕元弘元年十一月八日、立故皇太子邦長親王子康仁爲太子、

○按ズルニ、光嚴天皇ハ後醍醐天皇ノ三從兄弟邦良親王ノ御子ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

後嵯峨
- 後深草―伏見―後伏見―光嚴
- 龜山―後宇多
  - 後二條―邦良―康仁
  - 後醍醐

叔父爲太子

族叔祖父爲太子

〔百練抄七 六條〕仁安元年十月十日、以憲仁親王〇高倉爲皇太子、

○按ズルニ、高倉天皇ハ、二條天皇ノ御異母弟ニシテ、六條天皇ノ叔父ナリ、

〔續日本紀十九 孝謙〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇〇聖武崩於寢殿、遺詔以中務卿從四位上道祖王爲皇太子、

〔續日本紀二十 孝謙〕天平寶字元年四月辛巳、是日遣內舍人藤原朝臣薩雄中衛二十人、迎大炊王立爲皇

太子、

○按ズルニ、道祖大炊ノ兩王ハ、共ニ孝謙天皇ノ族叔祖父ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

天武
- 草壁——文武——聖武——孝謙
- 舍人——大炊○淳仁
- 新田部——道祖

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年八月四日癸巳、高野天皇○稱德崩、群臣受遺、卽日立諱○光仁爲皇太子、

〔皇年代略記光仁〕諱白壁、號日本根子天宗高紹、天智孫、田原施基皇子第六子、○中略神護景雲四年八月一日癸巳、大臣已下議定策禁中、爲皇太子、六十二、稱德无繼嗣、病急、仍群臣議立之、

○按ズルニ、光仁天皇ハ稱德天皇ノ再族伯祖父ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ

天智——施基——光仁

舒明
- 天武——草壁——文武——聖武——稱德
- 天武——草壁——文武——聖武——孝謙○謙——爲皇太子、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年正月壬午、立阿倍內親王爲皇太子、

〔日本書紀十應神〕天皇以皇后討新羅之年、歲次庚辰冬十二月、生於筑紫之蚊田、○略○中皇太后攝政之三年立爲皇太子、時年三

〔續日本紀十聖武〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、十一月己亥、天皇御中宮、太政官及八省各上表、奉賀皇子誕育、幷獻玩好物、○中略詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年九月丙午、皇太子薨、

〔大鏡一清和〕このみかどは、嘉祥三年三月廿五日、母かたの御おほぢおはきおとゝの小一條のいへにて父みかどの位につかせたまひて五日といふ日、生れ給へり、○中略やがて生れたまへる歲の十一月廿日東宮にたち給ひて、天安二年八月廿七日、御歲九歲にて位につかせ給ふ也、

〔大鏡一陽成〕このみかど貞觀十一年二月一日、二歲にて東宮にたゝせ給ひて、同十八年十一月十一日につかせ給ふ、

〔日本紀略一醍醐〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、○中略太子年二、

○按ズルニ、崇象親王ハ、後ニ御名ヲ保明ト改メラル、

〔榮花物語一月宴〕天曆四年五月廿四日に、九條殿の女御男みこ○泉冷うみ奉り給つ、○中略はかなう御いかなどもすぐもていきて、むまれ給て三月といふに、七月廿三日に東宮にたゝせ給ひぬ、

〔百練抄五堀河〕康和五年八月十七日、立第一親王宗仁○鳥羽爲皇太子、一歲、去正月降誕、一歲立坊、清和冷泉二代之例也、

○按ズルニ、聖武天皇ノ皇子ノ如キ、亦一歲立坊ノ例ナリ、然レドモ立坊後間モナク薨去アリシユエ、コゝニハ數ヘザルモノナラン、

〔皇代記近衛〕保延五年五月十八日丁酉、酉時降誕、八月十七日甲子、立爲太子、一歲

〔皇年代略記安德〕治承二年戊戌十一月十二日誕生、十二月十五日甲辰立太子、一

〔玉海〕治承二年十一月廿八日丁亥、早旦頭中將定能來云、去夜亥終許自院○後白河有急召、卽以馳參、時忠卿候御前、仰云、立坊事二歲三歲共以其例不快、今年被遂行如何、且被仰關白可有其沙汰之由、只今參內早可奏聞者、卽參內奏聞之處、可仰關白云云、向彼亭仰此狀、被申云、如被仰下二三歲共不吉、

被ㇾ待ニ四歳一頗似ニ延怠一歳内頗雖ニ卒爾一何不ㇾ被ニ遂行一哉、然者今年何事候乎者、歸參奏達了、後參院申ニ此之由一、仰云、早可ㇾ有ニ沙汰之由重可ㇾ奏ニ内者、定能申云、奉行職事可ㇾ被ニ定仰一歟云云、仰云、汝早可ㇾ行云云、事已爲ニ大事一、重代之輩、奉行宜歟之由雖ㇾ達ニ天聽一、已無ニ勅許一、只今參内可ㇾ奏、去夜院宣云云、即馳參内了、入道相國一昨夕俄上洛依ニ此事一云云、廿九日戊子、〇中略又人人十二月其例不快、（貞仁太子（白河皇太弟）延久四年十二月八日立、此外無ㇾ例、）仍可ㇾ被ニ待四歳之由有ニ豫議一云云、愚案四歳立坊不ㇾ可ㇾ然、但吉事爲ㇾ先、近日就中末代之政毎事急速也、至ニ此事一強不ㇾ可ㇾ待ニ四歳一歟、月之吉凶強之沙汰也、只歳内被ㇾ行之條可ㇾ叶ニ亂世之政一者歟、十二月十五日甲辰、此日有ニ册命立太子事一、（十二月立坊、實仁太子之外無此例、然而二歳三歳立坊、又以不吉被ㇾ待ニ四歳一者歟ㇾ延意ニ謂ニ之輕重一歳重月輕、内ㇾ之歳、内所ㇾ被ニ急行一云云、依ニ康和五年鳥羽院一歳立之、盡安太不ニ甘心一、）仁安元年當今六歳立之等佳例有ニ沙汰一云云、

〔增鏡一おどろの下〕建保二年十月十日、一の御子〇仲恭むまれ給へり、〇中略十一月廿一日やがてみこになしたてまつり給て、おなじき廿六日坊にゐ給ふ、いまだ御いかだにきこしめさぬに、いと王親ちはやき御もてなしめづらかなり、心もとなくおぼされければなるべし、

〔增鏡三藤衣〕ことしもはかなくくれて貞永元年になりぬ、〇中略こぞの二月后の宮の御はらに一の御子〇四條いでき給へりしかば、やがて、〇十月二十八日太子にたゝせ給しぞかしれいの人のくちさがなさは、かの承久の廢帝〇仲恭のむまれさせ給ふとひとしく坊にゐ給へりしは、いとふようなりしをなどいふめり、

〔明月記〕寛喜三年二月廿二日己卯仰云、東宮不ㇾ坐給之時、不ㇾ立ㇾ坊而直踐祚親王、崇德院、六條院、土御門院皆不吉、於ニ堀河院者一、實仁東宮依ニ坐給一無ニ御立坊一、不ㇾ似ニ當時歟一、一歳立坊之内、清和鳥羽院春誕生、秋冬立給吉例也、雖ニ一歳一不ㇾ過ニ五十日百日一立給、（冷泉、安德、先帝（仲恭））又不吉歟、仍今年秋冬猶可ㇾ有ニ立坊〇四條一歟由存之、中云、此條尤可ㇾ然歟、但縡案猶國家之煩歟、

〔皇年代略記後深草〕寛元元年六月十日誕生、同廿六日、爲ニ親王一、八月十日、立ニ太子一、

年長爲ニ太子一

〔皇年代略記反正〕仁德四十年降誕、履中二年正月己酉立ニ太子一、五十

〔皇胤紹運錄〕武烈天皇　允恭三十九年誕生、仁賢七年正月立ニ太子一、四十五

〔皇胤紹運錄〕安閑天皇　雄略十年誕生、

〔日本書紀繼體〕七年十二月戊子、詔曰、〇中略於ニ萬國一〇中宣處ニ春宮一、助ニ朕施仁一、翼ニ吾補闕一、

〇按ズルニ、安閑天皇ハ、雄略天皇十年ノ降誕ナレバ、繼體天皇七年ハ、御年四十八歳ナリ、皇胤紹運錄、皇年代略記等ニ、安閑天皇ノ立太子ヲ繼體天皇ノ二十年トセルハ誤ナリ、

〔皇年代略記天武〕推古卅一年癸未降誕、天智七年二月戊寅爲ニ皇太弟一、

〇按ズルニ、天武天皇ハ、推古天皇三十一年ノ降誕ナレバ、天智天皇七年ハ、御年四十六歳ナリ、

〔皇胤紹運錄〕光仁天皇　和銅二己酉誕生、〇中略

〔神皇正統記光仁〕稱德かくれましゝかば、大臣以下皇胤の中をえらび申けるに、おの〳〵異議ありしかど、參議百川と云し人、此天皇〇光仁に心ざし奉て、はかりごとをめぐらして定申てき、〇中略先皇太子にたち則受禪、御年六十二

〔皇年代略記桓武〕天平九年丁丑降誕、〇中略

〔台記〕久壽二年九月二十三日丁卯、今上第一皇子〇二條ニ先被下ニ親王宣旨一、次立爲ニ太子一、〇中略今朝太子渡ニ御鳥羽南殿（法皇（後白河）美福門院、夜前渡御、）節會了、關白已下參ニ彼殿一云云、太子御ニ洛外一未聞ニ先例一、上下傾奇、

〔日本書紀十五賢〕白髮天皇〇清寧二年四月、遂立ニ億計天皇一、〇仁賢爲ニ皇太子一、五年白髮天皇崩、天皇〇仁賢以ニ天下一讓ニ弘計天皇一、〇顯宗爲ニ皇太子一如故、

〔日本書紀二十舒明〕十三年十月丁酉、天皇崩ニ于百濟宮一、丙午、殯ニ於宮北一、是謂ニ百濟大殯一、是時東宮開別皇子、〇天智年十六而誄之、

爲ニ親王卽日爲ニ太子一

數朝爲ニ太子一

先帝崩後爲太子

〔日本書紀二十皇極〕四年六月庚戌、讓位於輕皇子、〇德立中大兄〇天智爲皇太子、

〔革命勘文〕天智天皇者、息長足日廣額天皇舒明天皇之太子也、讓位於母天豐財重日足姬天皇、〇皇極及舅天萬豐日天皇孝德天皇廿一年間、猶爲太子、攝萬機、

〔皇年代略記天智〕推古天皇廿二年甲戌降誕、孝德天皇大化元年乙巳六月立太子、二代太子也

〔日本書紀二十天武〕九年二月甲子、是日立草壁皇子尊爲皇太子、

〔日本書紀三十持統〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔皇胤紹運錄〕草壁皇子號日並知皇子、淨廣一位、天武十二年立太子、而當皇帝登遐之時、母后持統踐祚、仍不行冊立、天武、持統東宮、朱鳥四年四月薨、追號長岡天皇、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年九月庚辰、天皇禪位于氷高內親王、詔曰、〇中略以此神器欲讓皇太子、〇聖武而年齒幼稚未離深宮、〇中略今傳皇帝位於內親王、公卿百寮宜悉祇奉以稱朕意焉、

〔續日本紀九元正〕神龜元年二月甲午、天皇禪位於皇太子、〇聖武

〔水鏡中元正〕元明天皇位をさり給ひし時、聖武天皇を東宮と申しかば、位をつぎ給ふべかりしかども、そのとしぞ御元服し給ひて、御年十四になり給ひしに、なほいまだいとけなくおはしまさむとて、此御門は御をばにて讓をえたまひしなり、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年〇神護景雲四年八月癸巳、天皇崩于西宮寢殿、春秋五十三、左大臣從一位藤原朝臣永手、右大臣正二位吉備朝臣眞備、參議兵部卿從三位藤原朝臣宿奈麻呂、參議民部卿從三位藤原朝臣縄麻呂、參議式部卿從三位石上朝臣宅嗣、近衞大將從三位藤原朝臣藏下麻呂等定策禁中、立諱〇光仁爲皇太子、左大臣從一位藤原朝臣永手受遺宣曰、今詔久、事卒爾有依天、諸臣等議天、白壁王波、諸王乃中爾年齒毛長奈利、又先帝乃功毛在故爾太子止定天奏波、奏流麻爾麻宣〇宣恐誤給布勅久止宣、

〔神皇正統記光仁〕稱德かくれましゝかば、大臣以下皇胤の中をえらび申けるに、おの〳〵異議あ

りしかど、參議百川と云し人、此天皇に心ざし奉てばかりごとをめぐらして定申てき、

古事類苑

帝王部二十三

皇太子下　皇太子妃併入

儲君　一三六五
前朝爲儲君後朝爲太子　一三七一
欲爲太子而相爭　同
辭而不爲太子　一三七七
太子辭儲位　同
太子辭而不卽帝位　一三八三
太子暴逆自取敗亡　一三八五
廢太子　一三八六
雜載　一三九三
○　一四〇四
皇太子妃

古事類苑

帝王部二十三

皇太子下

皇太子妃伊入

〔基量卿記〕天和二年三月廿五日、入夜有召參內、仰云、儲君事、第五宮、（東山）申御門亞相息女、大納言典侍局御腹也、女御立后事、鷹司前殿下、○房輔二條殿下、○光平等五百石加增、右今度傳奏上洛之刻、從武家被申上也、御機嫌不斜、於御前被下天酒、珍重云々、廿七日、儲君へ伺公之輩被仰出、

正親町中納言　川鰭前宰相　梅園右兵衛督　池尻宮內大輔　園中將　花山院中將　難波侍從　四辻侍從　土御門兵部少輔

右儲君へ可致伺公、御移徙之後詰番可致也、其迄ハ折々御見舞可申上也、

近臣被仰出衆　西洞院宰相中將　今城中將

從今日可爲近臣由被仰出、右年寄衆へ書付被申渡、其後儲君伺公之輩、爲御迎參儲君各供奉、宮方御參內、從女御方御參、御輿、常之板輿、青侍十人計、諸家儲君參佐野修理大夫候御後、常之衆迄也、佐野修理大夫候御後、元同出御、御茵疊上、宮御方御右之方ニ御座、童御座也、御裝束殿ツラ、疊ノ下ニ御著座也、童有一獻、鶴吸物各給也、參衆之雲客役送、戌剋儲君御方還御、日比ニ階町博貴軒ニ御座、元廣義門院旧御殿、先年被新造也、予候供奉、其後儲君御方ニ而有御祝强飯御酒等也、今日從宮御方御樽肴御進上由也、近臣之輩、各獻上御肴鮒三十枚珍重々々、君臣繁榮、千秋萬歲、今日盡切御劒被進、以密儀、土御門兵部少輔令持參也、廿八日、今日儲君へ諸家各參賀、但儲君伺候之輩ハ持參銀劒云々、各無御對面、卅日、儲君へ獻上御肴鯛十松木亞相へ附ニ

消息、此義從大樹御祝義不被申上以前、諸家御祝義獻上事可爲無用由、稻葉丹後守申之、然ども予義格別之間、難波へ令相談尤之由也、依之今日進上了、六月十八日、○中略儲君御在所事、舊院御殿可然由從關東被申、依來二十七日可有御移徙云々、經營以外事也、廿日、依召參內、仰云、當今御移徙之後、從舊院後水尾禁中近臣輩へ被仰出御諚書有之樣々思召也、若留書等有之候はゞ可獻上由也、則退下、窺家公御記之內、引勘之所見之間、近臣中御諚書一通、幷寬文三年御膳方役人之誓狀等進上、則持參於小御所拜天顏、別而御機嫌之由仰也、猶此類若所見候はゞ可獻上由仰也、廿三日、依當番參內、終日儲君渡御之儀御沙汰也、廿四日、依召參內、儲君廿七日下御殿へ渡御治定之間、其刻各致伺候、諸事內外之儀可被申沙汰宮御方御由緒之者無之候間、渡御以後、折々可致伺公由於御前仰也、

園前大納言　柳原大納言　難波中納言　愛宕宰相　予也、各畏入了、

今日公卿雲客供奉之儀被仰出也、公卿五人、殿上人十人、儲君へ伺公之非藏人、松本信濃介、松室壹岐守、松室大和介、佐々下總、松室若狹、松室遠江介被仰付也、廿六日、明日舊院御殿へ儲君渡御、方角惡敷之間、唯今二階町、故新廣義門院御殿ニ御座今夜密々池尻前中納言亭へ御渡、明早天可有渡御由治定也、今晚渡御密儀也、然ども供奉之儀有之予參著、儲君常御板輿也、禁中仕丁奉昇也、六人、申下刻御出、先武家輿力同心拂御先、同心二十人、與力一兩人歟、次烏飼十人計、次取次五六人、各袴肩衣、次雲客群行不守次第、三室戶右兵衞權佐、持明院中將、押小路中將、難波中將、同少將新藏人、土御門兵部少輔、伏原大藏卿、今城中將、池尻宮內大輔、次御輿、公卿群行御輿之左右、園大納言、三條大納言、葉室大納言、正親町中納言、愛宕宰相千種宰相、川鯰宰相、梅園三位、柳原大納言、高辻中納言、予等也、各狩衣大ぶと也、不及淺沓、次諸家靑侍、次ニ佐野修理太夫伺公也、珍重、其後各參內、珍重申入退下、廿七日、今日黎明參池尻亭、供奉之輩漸參集之節也、予內々蒙仰之間、柳原大納言、難波中納言、三室戶持明院等同道參

舊殿、於番衆所各給饗、暫時有召各御對面、著御童裝束夏之御袍二藍白御袴也供奉之輩各廣御所、其後御見舞之輩者、各依御由緒於御小座敷御對面也、其後退下參內、珍重申入、及暮近有御酒、各沈醉無正體事也、珍重々々、八月四日、今日儲君御治定爲御祝義從武家使進上、由良信濃守、予儲君へ可參由仰之間令參了、從禁中參集、柳原、高辻、愛宕、予、三室戶、押小路、持明院等也、九月廿三日、依召參儲君今日攝家中、其外內々之公卿雲客、未拜尊顏之輩可有御對面可參云々、予、愛宕、柳原、持明院中將等、爲御肝煎可參由從禁中被仰之間參了、是每度如是之刻、依有御由緒如此也、未刻儲君出御於廣御所御童裝束殿下小直衣烏帽子次左大臣、直衣冠前關白、去冠內大臣、同上近衞大納言、同上九條大納言、持衣兩傳奏申次之體也、其後被申御咄各退下、攝家中御對面之時御茵計也撤厚帖、殿下以下被候下段、御殿狹少之間、上段へ不被召候由、花山院各へ被申也、其後被退下、次內々公卿雲客御禮、次儲君非藏人申御禮、內々公卿等ハ無申次、如何々々、雲客之中可勤事也、其後予等給夕饗退下了、廿四日、參儲君、親王、門跡、外樣諸家、非藏人等御禮、次法親王、大覺寺宮、妙法院宮、一條院宮、實相院若宮、毘沙門堂宮、曼珠院宮御禮、右之衆御禮之刻ハ御茵計也、攝家中昨日御禮之刻尤其通也、其後敷浮疊二帖、其上設御茵、外樣公卿、雲客御禮、於公卿昇長押、雲客簀子也、非藏人等於落緣申御禮、昨日今日、頭中將頭辨等昇長押申御禮、其後予輩給饗退出了、十二月二日、今日儲皇親王宣下也、三日、今日親王可有入內也、十日、今日親王立坊事、諸家へ以番頭被仰出、來年二月中可有御沙汰也、爲珍重參儲君禁中、

○按ズルニ、儲君ノ字ハ、履中紀二年正月ノ條ニ、始メテ見エタレドモ、直ニ皇太子ヲ指シタルモノニテ、後世ノ儲君トハ、其義自異ナレリ、

〔季連宿禰記〕天和三年二月八日辛巳、今日辰刻於左府御亭有立太子○山東召仰、

〔通誠公記〕寶永四年三月廿二日乙亥、今日長宮御方、中御門○春秋七歲、當今東山皇子、母儀大典侍局、前權中納言藤原隆慶卿女、新被定儲君、四日、儲君當時御殿者、從先年被假用林丘寺宮里坊、仙洞南門前東方此所甚狹少也、本所造畢之間、有

栖川殿亭（内裏子丑方也）可ㇾ爲ニ假殿ニ、有栖川殿者可ㇾ被ㇾ借ニ用關白（○鷹司兼熙）京極亭ニ、就ニ此儀ニ雙方可ㇾ加ニ修理ニ、其間者有栖川殿、暫可ㇾ被ㇾ移ニ居女御里亭（女御本殿向也）之事、被ニ仰下ニ、柳原前大納言、高野前中納言等奉ㇾ之、召ニ關白家ニ、有栖川家之諸大夫於ニ便所ニ傳仰、各被ㇾ申ニ領狀ニ、八日、今日議奏等召ニ御前ニ、柳原前大納言、高野前中納言兼候、儲君御殿、可ㇾ有ニ造營ニ於ニ凝花洞ニ被ㇾ思召ニ、內々被ㇾ仰ニ入院ニ、令ニ武家兩傳奏ニ被ㇾ仰ニ聞於ニ武家ニ也、各其旨可ニ存知ニ之由被ㇾ仰、十八日、今日辰時、儲君御方、遷ニ御于假殿ニ、（有栖川亭）廿九日、今日巳刻、儲君立親王宣下也、

〔百一錄〕寶永四年三月廿三日、增宮御方（○中御門、通誠公可ㇾ爲ニ儲君ニ之由、諸家中へ被ニ仰渡ニ、家公番奉行被ニ仰出ニ儲君御方附堂上九人被ニ仰出ニ、藤浪三位、廿露寺辨、千種中將、五辻彈正、近習被ニ仰付ニ、岩倉三品、北小路中書儲君御方云々、廿七日、儲君增宮御方御參內、供奉堂上十人計、衣冠步儀、山口安房守最後供奉、未刻過還御、四月廿九日、儲君御方有ニ親王宣下ニ、上卿二條內大臣、勅別當德大寺大納言、奉行頭中將、五月廿五日、上使畠山下總守上著、被ニ立ニ儲君ニ御賀儀也、廿七日、上使參內、從ニ大樹ニ（○德川綱吉）御樽三荷、御肴三種、綿三百把、從ニ大納言御方ニ同二百把、御臺所縮綿十卷、准后白銀二百枚、御樽肴三荷三種、從ニ亞相公ニ同百枚、御臺御方縮綿十卷、大准后銀百枚、御樽肴同斷、五十枚、亞相公十卷、御臺仙院縮綿二十卷、從ニ亞相公ニ羽二重十疋、從ニ御臺御方ニ縮綿十卷、女院御所同上、歟、聊有ニ差異ニ失念了、

〔通誠公記〕寶永五年二月十六日、今日巳時以ニ慶仁親王（○中御門）ニ被ニ立ニ皇太子ニ節會也（○略）○中壺切御劍、以ニ內侍從ニ鬼間簾中ニ被ニ出之ニ、隆典朝臣、進ニ簾下ニ賜之、持ニ參本宮ニ、廿四日、東宮行啓始也、

〔議奏日次案〕享保五年十月三日丙申、兼而以ニ叡慮院宣ニ、關東へ被ニ仰遣ニ之、當冬若宮御方、立親王宣下之事、被ニ任ニ思召ニ之旨、自ニ關東ニ言上之由、權大納言（通躬）中山大納言等披露之、十六日己酉、關白（○九條輔實）參入召ニ御前ニ、儲君御方、立親王宣下、來月四日御治定也、十一月四日丁卯、儲君（御名字昭仁○櫻町）立親王宣下也、

〔羽倉考一〕立太子東宮宣下

儲君宣下ハ、初ヨリ嗣位タルベシト、明ナル皇子ト同ジカラズ、當今（○櫻町）モ立太子ノ前年、寶永四年三月廿二日儲君宣下、東山院モ立太子ノ前年、天和二年三月廿五日儲君宣下アリ、但靈元院ハ明曆四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院當今ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下ナカリシナルベシ、

〔議奏日次案〕享保十三年二月三日甲申、關白（○近衛家久）參入召ニ御前ニ、當六月立坊御治定之旨、被ニ仰下ニ諸臣、五月廿二日壬申、就ニ立坊ニ自ニ來廿七日ニ七ケ日、七社（伊勢、石清水、賀茂下上、松尾、平野、稻荷、春日、）七ケ寺（延曆寺、園城寺、東大寺、興福寺、東寺、廣隆寺、仁和寺、）御祈之事、被ニ仰出于御祈奉行秀定、附ニ內侍所ニ獻之、十一日庚寅、以ニ職事秀定ニ、六月四日癸未、七社七ケ寺御祈之解狀卷數等、奉行內侍從ニ鬼間簾中ニ被ニ出之ニ、隆兼朝臣進ニ簾下ニ給之、持ニ參本宮ニ、

〔賴言卿記〕延享三年正月廿一日丁巳、申刻過、茶地宮（○桃園）御繼體御治定候、近々可ㇾ有ニ親王宣下之由被ニ申渡ニ了、

茶地宮、從ニ今日ニ被ニ稱ニ儲君ニ之旨、帥中納言被ニ申渡ニ候、仍申入候也、

正月廿一日　通枝

三月十六日壬子、儲君（御名、字遐仁○桃園）立親王宣下也、

〔賴言卿記〕延享四年三月五日乙未、立坊來十六日御治定、十六日丙午、遐仁親王可ㇾ爲ニ皇太子ニ仰宣命之事、大內記家長朝臣作進、

〔議奏日次案〕文化四年六月廿六日丁酉、關白〇鷹司政熙參入、被レ窺二天氣一、皇子寬宮可レ有二立親王一、深叡慮之旨、被レ仰二下將軍家之事一、於二小御所下段一、關白召二正由宿禰武士、忍侍從一被レ仰レ之、武家傳奏廣橋前大納言、千種前中納言、被レ候レ座、七月十八日戊午、關白參入、被レ窺二天氣一、召二御前一、辰半刻正由宿禰忍侍從參入、於二小御所下段一、關白令レ謁給、去六月廿六日、寬宮可レ有二立親王一、被レ仰二進于將軍家一申勅答、武家傳奏廣橋前大納言、千種前中納言等召二御前一、常御所傍問關白被二傳仰一、御繼體之事、厚叡慮有レ之處、自二仙洞〇後櫻町一御懇篤被二仰進一、自二中宮一光格后欣子內親王亦敢被二仰上一、依レ之今度寬宮爲二中宮御實子一被レ定二儲君一、來九月立親王御治定之事、九月廿二日辛酉、儲君御名字惠仁〇仁孝親王宣下也、

〔北藏人日記〕文化六年二月五日、立太子〇仁孝

〔言成卿記〕天保六年六月廿一日、回文自レ久我一到來、其寫如左、

熙宮〇孝明追々御生長、自レ今日一被レ定二儲君一、來八九月之間、立親王宣下御治定、尤准后御方御養子、御實子御同樣、被レ仰出一候事、熙宮自レ今被レ稱二儲君一候事、御次第可レ爲二准后御方御次一事、儲君江言上之儀、於二禁中一言上可レ然之事、今明日中御所々々、准后御方、儲君等へ參賀可レ然候事、

右之通傳奏議奏列座、大宮權大夫被二申渡一候、仍早々申入候也、

六月廿一日　基豐

七月廿二日、今日儲君、准后御方江、飛香舍也、御移徙被レ爲レ在、九月十八日、今日儲君立親王宣下、予依二家司一、已刻參二東帶一參二本宮一、〇略、廻文到來、親王御名字統仁、於佐右御治定候事、儲君御次第可レ爲二准后上一候、尤節朔以下、儲君江言上之事、可レ爲二是迄之通一之事、右之通大宮權大夫被二申渡一、

〔實久卿記〕天保十一年正月廿八日己未、巳終刻參二殿下一、〇鷹司政通立太子日時御治定慶賀申入、三月十四日乙巳、今日立太子〇孝明也、

前朝爲儲君後朝爲太子

〔皇胤紹運錄〕後桃園院　寶曆九年正月十日立太子、十一

〔賴言卿記〕寶曆九年正月十八日庚子、巳刻參內、〇略申申刻退出、女院、女御、儲君殿下、前殿下參賀了、

五月十五日甲午、今日儲君御名字英仁、後桃園〇春秋二歲、立親王宣下也、〇略自今日御次第、親王准后ト被立了、

〔知音卿記〕明和五年二月十九日戊寅、今日立太子節會、英仁親王、先帝桃園第一皇子、御母准后女御、

○按ズルニ、後桃園天皇ハ、桃園天皇ノ寶曆九年ニ、儲君ニ立チ給ヒシガ、桃園天皇大漸ノ時ナホ幼冲ナリシカバ、後櫻町天皇皇位ヲ繼承シ給ヒ、其明和五年更ニ皇太子ニ立チ給ヒタリ、

欲爲太子而相爭

〔續日本紀ニ十稱德〕天平寶字元年四月辛巳、天皇召二群臣一問曰、當レ立二誰王一以爲二皇嗣一、右大臣藤原朝臣豐成、中務卿藤原朝臣永手等言曰、道祖王兄鹽燒王可レ立也、攝津大夫文室眞人珍努、左大辨大伴宿禰古麻呂等言曰、池田王可レ立也、大納言藤原朝臣仲麻呂言曰、知二臣者莫一レ若レ君、知二子者莫一レ若レ父、唯奉二天意所一レ擇者耳、勅曰、宗室中舍人新田部兩親王是尤長也、因レ茲前者立二道祖王一、而不レ順二勅敎一、遂縱二淫志一、然則可レ擇二舍人親王子中一、然船王者閨房不レ修、池田王雖レ未レ長壯一、不レ聞二過惡一、欲レ立二此王一、於二諸卿意一如何、於是右大臣已下奏曰、唯勅命是聽、先是大納言仲麻呂、招二大炊王一居二於田村第一、是日遣二內舍人藤原朝臣薩雄、中衛二十人一、迎二大炊王一、立爲二皇太子一、七月己酉、〇略中內相仲麻呂侍レ御在所一、召二鹽燒王、安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂五人一、傳二太后詔宣一曰、鹽燒等五人乎人告二謀反一、汝等爲レ吾近人、一毛吾乎可レ怨事者不レ所レ念、汝等乎皇朝者己己太久高治賜乎、何乎怨志岐所止志加氏加然將レ爲不レ有加止奈母所念、是以汝等罪者免賜、今往前然莫レ爲止宣、詔訖五人退出南門外、稽首謝恩、庚戌、詔更遣中納言藤原朝臣永手等一、窮二問東人等一、款云、每事實也、無異斐太都語去六月中期會謀事三度、始於二奈良麻呂家一、次於二圖書藏邊庭一、後於二太政官院庭一、其衆者安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂、多治比禮麻呂、大伴池主、多治比鷹主、大伴兄人、自餘衆者、闇裏不

見其面庭中禮拜天地四方、其飲鹽汁誓曰、將以七月二日闇頭發兵、圍內相宅殺却、即圍大殿、退皇太子、次傾皇太后宮而取鈴璽、即召右大臣將使號令、然後廢帝、簡四王中、立以爲君、於是追被告人等隨來悉禁著各置別處、一一勘問、

〔水鏡下淳仁〕天平勝寶九年四月に、大臣以下を召て、東宮にはたれをかたてたてまつるべきとさだめ申べきよしおほせ事あり、〇中略かくてのち、この東宮にえらびすてられたまひつる王たち、又心ざしある人々、あまたよりあひて、みかど〇文徳位につかせ給ひて、五日といふはんとすといふ事、おのづからもれきこえしかば、なかまろ內にまゐりてこのよしを申しかばさま〴〵のつみをおこなはれき、

〔大鏡一清和〕つぎのみかど清和天皇と申ける、〇中略日生れ給へりけんこそ、いかにをりさへはなやかにめでたかりけんとおぼえ侍れ、これたかの御子の東宮あらそひし給へりけんも、この御事とこそおぼゆれ、

〔大鏡裏書〕四品惟高親王東宮諍事

文徳天皇第一皇子、母從四位下紀靜子、正四位下名虎女、嘉祥三年十一月廿五日戊戌、惟仁親王〇清和爲皇太子、誕生之後九箇月也、先是有童謠云、大枝於超天奔超天騰加利躍土利超天我耶護毛留田仁耶搜阿佐食母志岐耶雌雄伊志岐耶、識者以爲、大枝謂大兄也、是時文徳天皇有四皇子、第一惟高、第二惟條、第三惟彥、第四惟仁、天意若曰超三兄而立、故有此三超之謠焉、承平元年九月四日夕、參議實賴朝臣來也、談及古事、陳云、文徳天皇最愛惟高親王、于時太子幼冲、帝欲先暫立惟高親王、而太子長壯時還繼洪基、其時先太政大臣〇藤原瓦房作太子祖父爲朝重臣、帝憚未發、太政大臣憂之、欲使太子辭讓、是時藤原三仁善天文、諫大臣曰、懸象無變事必不遂焉、爰帝召信大臣、清談良久、乃命以立惟高親王之趣、信大臣奏曰、太子若有罪、須廢黜更不還立、若無罪亦不可立他人、臣不敢奉詔、帝甚不悅、

事遂無變、無幾帝崩、太子續位、後應天門有火、良相右大臣伴大納言計謀、欲退信左大臣、共參陣座時、後太政大臣〇藤原經爲近衛中將兼參議、良相大臣急召之、仰云、應天門失火、左大臣所爲也、急就第召之、中將對云、太政大臣偏信佛法、必不知行、如此事中將則知、太政大臣不預知之由、報云、事是非輕、不蒙太政大臣處分、難輒承行、遂辭出到職曹司、分諮太政大臣、太政大臣驚令入奏曰、左大臣是陛下之大功之臣也、今不知其罪忽被戮、未審因何事、若左大臣必可被誅、老臣先伏罪、帝初不知聞、大驚怪報詔以不知之由、於是事遂定矣、爾後太政大臣薨、清和天皇爲之期中不擧樂云云、此等事皆左相公所語也、

〔江談抄二雜事〕天安皇帝〇文徳有讓位于惟喬親王之志、太政大臣忠仁公、〇藤原良房被命云、天安皇帝有讓寶位于惟喬親王之志、太政大臣出自口之間、漸經數月云云、或祈請于神祇、又修秘法祈于佛力、眞濟僧正者、爲小野親王祈師、眞雅僧都者爲東宮〇清和護持僧云々、各專祈念互令相摧云々、

〔平家物語八〕名とらの事

むかし文徳天皇、天安二年八月廿三日かくれさせ給ひぬ、御子の宮たちわまた御位にのぞみをかけてまし〳〵ければ、內々御祈共有けり、一の御子これたかの親王をば、木はらの皇子共申き、王者の才量を御心にかけ、四かいの安危たな心の中にてらし、百王のりらんは御心にかけ給へり、されば賢聖の名をも取せまし〳〵ぬべき君なりと見え給へり、二の宮これ仁の親王は、其頃のしつへい忠仁公の御娘、そめ殿の后〇明子の御はら也、一門の公卿べつしてもてなし奉らせ給ひしかば、是も又さしおきがたき御事也、かれはしゆ文けいていのきりやう有、是は萬機補佐の臣さう有、かれもこれもいたはしくて、いづれも思召わづらはれき、一の御子これたかの親王家の御祈には、柿の本の紀僧正まんせいとて、東寺の一の長者弘法大師の御弟子也、二の宮これ仁

親王家の御祈には、外祖忠仁公の御ぢ僧、ひゑい山のゑりやう和尚ぞうけ給はられける、何もおとらぬ高そうたち也、とみに事行がたうや有んずらん、人々内々さゝやき合れけり、あんのごとく御門かくれさせ給ひしかば、公卿せんぎ有けり、抑臣らがおもんはかりをもつてえらんで位につけ奉らん事、ようゑやわたくし有ににたり、萬人脣を返すべし、ゑらずけい馬すまふのせつをとげ、其うんをゑり、ゑゆうによつてほうそをさづけ奉るべしと議定をはんぬ、去程に同ゑき九月二日の日、二人のみや達うこんのばゝへ行啓有けり、○中略ゑんせい僧正は東寺にだんをたて、ゑりやう和尚は大内のゑんでんゐんにだんをたていのられけるが、ゑりやうはうせたりといふひろうをなさば、ゑんせい僧正すこしたゆむ心もやおはすらんとて、ゑりやうはうせたりといふひろうをなして、かんたんをくだいていのられけり、すでに十ばんのけいばはじまる、はじめ四ばんは一の御子これたか親王家かたせ給ふ、後六ばんは二の宮これ仁親王家かたせ給ふ、やがてすまふのせつ有べしとて、一の御子これたか親王家よりは、なとらのう兵衞のかみとて、およそ六十人が力あらはしたるゆゝしき人を出されたり、二の宮これ仁親王家よりは、よしをの少將とて、せいちいさうたへにして、かた手にあふべし共見えぬ人、御むさうの御つげ有とて、申うけてぞ出られける、去程に名とらよしをよりあひて、ひし〳〵とつまどりしてのきにけり、ゑばらく有てなとらつとより、よしをゝ取てさゝげ、二丈ばかりぞなげ上たる、たゞなほつてたをれず、よしを又つとより、なとらを取てふせんとす、され共なとらは大のをとこかさにまはる、よしを猶あぶなう見えければ、御母儀そめ殿の后より、御つかひくしのはのごとくに玄げうはしりかさなつて、御かたすでにまけいろに見ゆ、いかゞせんと仰ければ、ゑりやう和尚は大ゐとくのほうを行はれけるが、こは心うき事なりとて、とつこをもつてかうべをつきやぶり、なづきをくだしにうにわしてごまにたき、くろけぶりを立て一もみもまれたりければ、よしをすま

ふにかちにけり、二の宮位につかせ給ふ、清和の帝是也、後には水のをの天皇と申き、其よりして山門にはいさゝかの事にも、ゑりやうなづきをくだけば、二帝位につき、そんいちけんをふつしかば、菅相納受し給ふ共つたへたり、是のみや法力にても有けん、其外は皆天照大神の御はからひ也とぞみえたりける、

〔源平盛衰記二十四〕大嘗會儀式附新嘗會事

延暦寺衆徒等誠惶誠恐謹言、○中略所謂惠亮摧腦、尊意振劒、凡捨身事君、無若我山、

○按ズルニ、平家物語ノ説ハ、信ズベカラザルコトナレドモ、廣ク世上ニ流傳スルモノナレバ、姑ク此ニ掲ケタリ、

〔大鏡一圓融〕此御門の東宮にたゝせ給ふほどは、いときゝにくゝいみじき事どもこそ侍れな、これはみな人のゑろしめしたる事なれば、事もながしとゞめ侍りぬ、

〔大鏡四右大臣師輔〕此后○村上后安子の御腹には、式部卿の宮○爲平こそは、冷泉院の御次にまづ東宮にもたち給ふべきに、西宮殿○源高明の御むこにておはしますにより、御おとゝのつぎの宮○圓融にひきこされさせ給へるほどなどの事ども、いといみじく侍り、そのゆゑは、式部卿御門にゐさせ給ひなば、西宮殿の御ぞうによの中うつりて、源氏の御さかえになりぬべければ、御をぢたちのたましひふかく非道に、御おとゝをばひきこし申させたてまつらせ給へるぞかし、世の中にも宮の中にも、殿ばらのおぼしかまへけるをばいかでかはしらん、次第のまゝにこそはと、式部卿宮の御事を思ひ申たりしに、俄に若宮の御くしかいけづり給へなど御めのとたちにおほせられて、大入道殿○藤原兼家御車にうちのせたてまつりて、北陣よりなんおはしましけるなどこそつたへうけ給はりしか、されば道理あるべき御かたびとたちはいかゞはおぼされけん、○中略そのほど西宮殿御心ちよな、いかゞおぼしけんさてぞかし、おそろしくかなしき御事どもいできにしは、

〔榮花物語一月〕月日も過て康保四年になりぬ、月頃うち〇上村にれいならず、なやましげにおぼしめして、〇略御心ちいとおもければ、小野宮のおとゞ〇藤原實賴なのびて奏し給、もし非常のことも
おはしまさば、東宮にはたれをかと御けしき給はりたまへば、式部卿の宮〇平爲尊をとこそおもひ
しかど、いまにおきてはえゐ給はじ、五宮〇四融をなんなか思ふとおぼせらるれば、うけたまはり
給ひぬ、〇略〇中つひに五月廿五日にうせ給ひぬ、東宮〇泉冷くらゐにつかせ給、〇略〇中春宮の御事、なだ
ともかくもなきに、よの人みな心々に思さだめたるもをかし、おとゞはみなおりておはすめる
ものをと、よろづ御のちの事ぞもいとゞいみじ、〇略〇中すこし心のどかになりても、春宮の御事有べ
かめる、式部卿宮わたりには、人ゆれずおとゞの御けしきをまちおぼせど、あへておとなければ
いかなればにかと御むねつぶるべし、源氏のおとゞ〇高明もしさもあらずば、あさましうもくち
をしうもあべきかなと物思ひにおぼされけり、かゝる程に九月一日東宮たち給、五宮〇圓融ぞた
るゝ〇略〇中せ給、〇略〇中あさましく思ひのほかなる世中をぞ、心うきものにおぼしめさ
るゝ程に、年もかへりぬ、〇略〇中かゝる程に世中にいとけしからぬ事をぞいひ出たるや、それは源
氏の左のおとゞの、式部卿の宮の御事を覺して、みかどをかたぶけ奉らむとおぼしかまふとい
ふ事いできて、よにいときゝにくゝのゝしる、いでやよにさるけしからぬ事あらじなど、よ人申
思ふ程に、佛神の御ゆるしにやげに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月廿六日〇安和二年に、この左大臣殿にけびゐし打かこみて、宣命よみのゝしりて、みかどをかたぶけたてまつ
らむとかまふるつみによりて、大宰權帥になして、ながしつかはすといふことをよみのゝしる、
〇略〇中式部卿の宮の御心ち、おぼかたならんにてだにいみじとおぼさるべきに、まいてわが御事
によりていできたることゝおぼすにせんかたなくおぼされて、われも〳〵といでたちさわが
せ給、

辭而不爲太子

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年四月壬寅、先立侍從從四位下恒世王爲皇太子、太子上表固辭、仍立正良親王爲皇太子、

〔神皇正統記嵯峨〕一旦國をゆづり給ひしのみならず、行末迄もさづけましまさんの御心ざしにや、新帝〇和淳の御子恒世親王を太子に立給ひしを、親王又かたく解退して世をそむき給ひける、こそありがたけれ、上皇〇嵯峨ふかく謙讓しましけるに、親王又かくのがれ給ひける、末代までの美談にや、むかし仁德兄弟相讓給ひし後には聞ざりし事なり、

〔水鏡嵯峨下〕弘仁十四年、みかど位を御おとゝの東宮〇淳和にゆづりたてまつりて、やがてその御子の、治部卿親王恒世を東宮にたて申給ひしを、親王あながちにのがれ申給ひて、こもりゐて御つかひをだにかよはし給はざりしかば、仁明天皇の御子にておはしましゝを、東宮にたて申たまひき、位をこそ東宮にておはしませばかぎりありてゆづりたてまつり給はめ、わが御子のおはしませぬにてもなきに、おとゝの御子を、東宮にさへたてたてまつらむとし給ひし御心は、ありがたかりしことなり、

太子辭儲位

〔百練抄後一條〕寛仁元年八月九日、皇太子敦明親王依病辭遣、廿九日、停前春宮坊爲小一條院、

〔日本紀略後一條〕寛仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、卽日立帝同胞弟敦良親王爲二
皇太弟、〇略〇中以前春宮坊爲小一條院、年給官爵如元、

〔御堂關白記〕寛仁元年八月六日辛未、以能信從東宮、〇敦明有今日可來消息、仍詣彼宮、攝政、〇藤原賴通大
將、〇藤原教通相從、以雅康令啓參入由、卽參御前、被命云、爲申停春宮事、開消息、立寄事慶申者、余申須申承由、能信思定可被仰者也、皇后宮、〇藤原威子左大臣、〇藤原顯光被何申者、
命給樣定不快、左大臣任心者、日來間思定所聞也、早停此春宮號、可然相定可宣者、申云、攝政候、召彼
同定申者、召攝政相定申、年官年爵如本、御封又如本、此外各有思食事者只隨仰、御氣色有可給受領

之心、仍余申給受領給如何、其氣色甚能、仍聞可給之由了、又隨身事同被命、承此由等退出、參內啓皇太后宮〇藤原彰子此由、其氣色非可云候宿、七日壬申、早朝從內罷出、可然上達部多來、相定云、如此事日可延、只今吉平可被問日、又申曰、非可忌者、召吉平問、申云、明後日吉日、彼日早可被行者也、雜事相定了、即參皇太后、啓案內退出、

〔左經記〕寬仁元年八月十七日壬午、參內、大殿以頭左中辨被聞攝政殿云、前坊奉授院號、幷年官年爵如舊、春宮時、又停止進屬、被任判官代主典代如元、兼又左右近衞各五人、可爲隨身之由等也、今日依欠日、不被下宣旨、廿三日戊子、申二刻被渡壺切御劒於東宮、件御劒、須御讓位日被渡東宮也、而有障、于今未被渡、置納殿、而間東宮辭退後、今日被渡新宮、頗似有靈感、廿五日庚寅、又改前坊爲小一條院、幷年官年爵御封等事如元、兼又止進屬爲判官代主典代、幷以左右近衞各五人、可爲隨身之由、右少辨奉宣旨、仰右大將、大將即召大外記文義朝臣、於膝突仰之云々、

〔大鏡三左大臣師尹〕一のみこ敦明親王とて、式部卿と申し程に、長和五年正月廿九日、三條院おりさせ給へば、たうだい〇後一條位につかせ給ひて、この式部卿の宮東宮にたゝせ給ひにき、〇中略院〇三條うせさせ給ひてのち、二年ばかりありて、いかゞ思召けん、宮たちと申しゝをり、よろづにあそびならはせ給ひて、うるはしき御ありさまいとくるしく、いかでかくてあらばやとおぼしならひて、皇后宮〇三條后娍子、敦明母、にかくなんおぼえ侍ると申させ給ふを、いかでかはげにさもとはおぼさんずる、すべてあさましくあるまじきことゝのみいさめ申させ給ふに、おぼしあまりて入道殿〇藤原道長に御消息ありければ、まゐらせ給へるに御物がたりこまやかにて、此位さりてたゞ心やすくてあらんとなん思ひ侍ると聞えさせければ、さらに〳〵うけたまはらじ、さは三條院の御すゑはたえねとおぼしめしおきてさせ給ふか、いとあさましくかなしき御事なり、かゝる御心のつかせ給ふ御事はこと事ならじ、古冷泉院の御ものゝけなどのおもはせたてまつるなり、さらさら〇さらさらハさらなノ誤ナランおぼしめしそとせいし給ふに、さらばたゞ本意もあり、出家にこそはあんなれとのたまはするに、さまでおぼしめす事ならばいかゞはともかくも申さん、うちに奏し侍りてをと申させ給ふをりにぞ、御けしきいとよくならせ給ひにける、さて殿うちにまゐらせ給ひて、大宮にもうちにも申させ給ひければ、いかゞはきかせ給ひけん、このたびの東宮には式部卿の宮〇敦康親王ほど〇ほどハをこノ誤ナランこそはおぼしめすべけれど、一條院のはか〴〵しき御うしろみなければ、東宮にたうだいをたてたてまつるなりとおほせられしかば、これもおなじ事なりとおぼしさだめて、寬仁元年丁巳八月五日こそは九さいにて、三宮〇後朱雀東宮にたゝせ給ひて、〇中略寬仁三年己未八月廿八日、御とし十一にて御元服せさせ給ひしか、さきの春宮〇敦明をば小一條院と申、〇中略小一條院わが御心もてのがれ給へる事はこれをはじめとす、〇中略この院のかくおぼしたちぬる事、かつは殿下の御報のはやくおはしますにおされ給へるか、又おほくは元方民部卿の靈のつかうまつりつるなり、〇中略事のやうだいは、三條院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮の御やうにもなく、殿上人などもまゐりて御あそびせさせ給ふや、もてなしかしづき申人などもなく、いとつれ〴〵にまぎるゝかたなくおぼしめされけるまゝに、心やすかりし御ありさまのみ戀しく、ほけ〴〵しきまでおぼえさせ給ひけれど、三條院おはしましつるかぎりは、院殿上人などもまゐりや、御つかひも志げくまゐりかよひなんどするに、人目も志げく、よろづなぐさめさせ給ふを、院うせおはしましては、世中ものおそろしく、おほぢの往來もいかゞとのみわづらはしくふるまひにくきにより、宮司などだにもまゐりつかうまつる事もかたくなりゆけば、ましてげすの心はいかゞはあらん、とのもりづかさの志もべもあさぎよめつかうまつる事もなければ、庭のくさも志げりまさりつゝ、いとかたじけなき御すみかにておはします、まれ〳〵參りよる人々は、よにきこゆる事とて、三宮かく

ておはしますを心ぐるしく、殿も大宮門○上東院も思ひ申させ給ふに、もしうちにをとこ宮もいでおはしまさなばいかゞあらん、さあらぬさきに東宮にたてたてまつらばやとなんおぼせらるなり、さればおしてとられさせ給へるなりなどのみ申を、まことにしもあらざらめどげに事のさまもよもとおぼゆまじげなればにや、きかせ給ふ御心ちはいとゞうきたちたるやうにおぼしめされて、ひたぶるにとられんよりはわれとやのきなましとおぼしめすに、又たか松どのゝみくしげ殿まゐらせ給ひて、殿のはなやかにもてなしたてまつらせ給ふべかなりとて、れいの事なればよの人さま〴〵さだめ申を、皇后宮きかせ給ひていみじうよろこばせ給ふを、東宮はいとよかるべき事なれど、さだにあらばいとゞ我おもふ事えせじ、なほかくてえあるまじくおぼしめされて、御母宮にさか〴〵なんおもふと聞えさせ給へば、さうなりやいと〳〵あるまじき御事なり、見くしげどのゝ御ことをこそまこととならばすゝみきこえさせ給はめ、さらに〳〵おぼしめしよるまじき事なりと聞えさせたまひて、御もののけのするなりと御いのりどもせさせ給へど、さらにおぼしめしとゞまらぬ御心のうちをいかでかよひともきゝけん○略中さて東宮にもかくとも申させ給はず、たゞ御心のまゝに殿に御せうそく聞えんとおぼしめすに、むつましうさるべき人ももの し給はねば、中宮の權大夫殿のおはします、四條の坊門とにしの洞院とは宮ちかきぞかし、それればかりをこと人よりはとやおぼしめしよりけん、藏人なにがしを御つかひにてあからさまにまゐらせ給へとあるを、○中略まゐらせ給ふほど日もくれぬ○略中見まはさせ給ふに、にはの草もいとふかく、殿上のあり さまも春宮のおはしますとは見えず、あさましうかたじけなげなり○略中あさがれひのかたにいでさせ給ひて、めしあればまゐり給へり、いとちかくこちとおぼせられて、ものせらるゝ事もなきに、あないするもはゞかりおぼかれど、おとゞにきこゆべき事のあるを、つたへものすべき人

のなきに、まぢかきほどなれば、たよりにもと思ひて侍るこそは本意ある事と思ひ、こゝぬんのさおかせ給へる事をたがへたてまつらむも、かたがたにはゞかり思はぬにあらねど、かくてあるなん思ひつゞくるにつみふかくもおぼゆるうちの御ゆくすゑはいとはるかにものせさせ給ふ、いつともなくてはかなき世にいのちもさりがたし、このありさまのきて心にまかせておこなひをもし、物まうでをもし、やすらかにてなんあらまほしきを、むげにさきの東宮にてあらむは見ぐるしかるべきなん、いんがう給ふて、としになるべき事にかとつたへ聞えられよとおぼせられけれども、かしこまりてまかでさせ給ひぬ、そのよはふけにければ、つとめてぞ殿にまゐらせ給へるに、○略中東宮にまゐりたりつるかとはせ給ふに、さうなりや、おろかにおぼしめさんやは、おしておろしたてまつらむ事はゞかりおぼしめしつるに、かゝる事のいできぬる、御よろこびなほつきせずまづいみじかりける大宮○上東門院の御宿世かなとおぼしめす、民部卿○源俊賢殿に申あはさせ給へば、たゞとく〳〵せさせ給ふべきなり、なにかよき日もとらせ給ふ、ずこしものびばおぼしかへして、さらでありなんとあらむをばいかゞはせさせ給はんと申させ給へば、さる事とおぼして、御こよみ御らむずるに、けふもあしき日にもあらざりけり、やがて關白殿○藤原頼通もまゐらせ給へるほどに、とく〳〵とそゝのかし申させ給ふ、まづいかにも大宮に申てこそはとて、うちにおはしますほどなればまゐらせ給ひて、かくなんとときかせたてまつらせたまへば、まして女の御心はいかゞはおぼしめされけん、それよりぞ春宮にまゐらせ給ふ、かう申事は寛仁元年八月六日の事なり、○略中母の宮だにもおろらせ給はざりけり、かくこの御方に物さはがしきを、いかなる事ぞとあやしくおぼしてあないし申させ給へど、れいの女房のまゐるみちをかためさせ給ひてけり、殿にはとしごろおぼしめしつる事な

ぞこまかにきこえんと心づよくおぼしめしつれど、まことになりぬるをりはいかになりぬる事ぞとさすがに御心さはがせ給ひぬ、むかひ聞えさせ給ひては方々におくせられ給ひにけりとや、だゞきのふのおなじさまに中々事ずくなにおぼせらるゝ御をりは、さりともいかにかくはおぼしめしよりぬるぞなどやうに申させ給ひけんかしな、御けしきの心ぐるしさをかつは見たてまつらせ給ひて、すこしをしのごはせ給ふ日よろづの事さだめおこなはせ給ふ、判官代にまつらせ給ひて、やがて事ぞもはじめさせ給ふ日よろづの事さだめおこなはせ給ふ、判官代には宮づかさども藏人などかはるべきにあらず、別當には中宮の權大夫をなしたてまつり給へればおはしてはいし申させ給ふ事どもさたよりはてぬればいでさせ給ひぬ、いとあはれに侍りける事は、殿のまださふらはせ給ひける時、母宮の御かたより何方の道よりたづねまゐりたるにか、わらはに御覽ずるもまらぬけしきにて、いとあやしげなるすがたしたる女房の、わなゝく〳〵いかにかくはせさせ給へるぞと、こゑもかはりて申つるなん、あはれにも又をかしうもとこそおぼせられけれ。〇中略ひたき屋、ぢん屋などとりやられけるほどにこそえたえずしのびねなく人々侍りけれ、まして皇后宮ほり川の女御殿などは、さばかり心ふかくおはしまさふ御心ともに、いかばかりおぼしめしけんとおぼえ侍りし。〇中略さていかなる事にか東宮御位せめおろしとりたてまつり給ひては、又御むこにとりたてまつらせ給ふほどもてかしづきたてまつらせ給ふ御ありさま、まことに御心もなぐさませ給ふばかりこそきこえ侍りしか、おものまゐらするをりは、大ばんどころにおはしまして、御だいやばんなどまで手づからのごはせ給ふ、なにをもめしこゝろみつゝなんまゐらせ給ひける。御ざうしぐちまでもておはしまして、女房にたまはせ、殿上にいだす程にもたちそひてよかるべきさまにをしへなどこれこそは御はゝねよとあはれにぞ。〇又見二榮花物語一

太子辭而不即帝位

〔日本書紀仁德〕四十一年二月、譽田天皇〇應神崩、太子菟道稚郎子讓位于大鷦鷯尊、〇仁德未即帝位、仍諮大鷦鷯尊、夫君天下、以治萬民者、蓋之如天、容之如地、上有聰心以使百姓、百姓欣然天下安矣、今我也弟之、且文獻不足、何敢繼嗣位、登天業乎、大王者、風姿岐嶷、仁孝遠聆、以齒且長、足爲天下之君、其先帝立我爲太子、豈有能才乎、唯愛之者也、亦奉宗廟社稷重事也、僕之不佞、不足以稱、夫昆上而季下、聖君而愚臣、古今之常典焉、願王勿疑、須即帝位、我則爲臣之助耳、大鷦鷯尊對言、先皇謂皇位者、一日之不可空、故預選明德、立王爲貳、祚之以嗣、授之以民、崇其寵章、分聞於國、我雖不賢、豈棄先帝之命、輒從弟王之願乎、固辭不承、各相讓之、〇略既而興宮室於菟道而居之、猶由讓位於大鷦鷯尊、以久不即皇位、爰皇位空之、既經三載、〇略太子曰、我知不可奪兄王之志、豈久生之煩天下乎、乃自死焉、時大鷦鷯尊聞太子薨以驚之、從難波馳之到菟道宮、爰太子薨之經三日、時大鷦鷯尊標擗叫哭、不知所如、乃解髮跨屍以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、爰大鷦鷯尊語太子曰、悲今惜今、何所以歟自逝之、若死者有知、先帝何謂我乎、乃太子啓兄王曰、天命也、誰能留焉、若有向天皇之御所、具奏兄王聖之且有讓矣、然聖王聞我死、以急馳遠路、豈得無勞乎、乃進同母妹八田皇女曰、雖不足納采、僅充掖庭之數、乃且伏棺而薨、於是大雀命〇仁德與宇遲能和紀郎子二柱、各讓天下之間、海人貢大贄、爾兄辭令貢於弟、弟辭令貢於兄、相讓之間既經多日、如此相讓非一二時、故海人既疲往還而泣也、故諺曰、海人乎因已物而泣也、然宇遲能和紀郎子者早崩、故大雀命治天下也、

〔神皇正統記仁德〕應神がくれましゝかば、御兄たち、太子〇菟道稚郎子をうしなはんとせられしを、此尊〇大鷦鷯さとりて、太子と心を一にしてかれを誅せられにき、爰に太子天位を尊にゆづり給ひ、尊かたくいなみ給ふ、三年になるまでたがひにゆづりて位をむなしくす、太子は山城の宇治にます、尊は攝津の難波にましける、國々の御つぎ物もあなたかなたにうけとらずして、民の愁へとな

れりしが、太子みづからうせ給ひぬ、尊おぼろきなげき給ふ事かぎりなし、されどゆがれますべき道ならねば、癸酉の年即位、

〔日本書紀十五顯宗〕白髮天皇○寧清　三年四月、立二億計王一○仁賢爲二皇太子一、立二天皇一○宗顯爲二皇子一、五年正月、白髮天皇崩、是月皇太子億計王與二天皇一讓レ位、久而不レ處、由レ是天皇姊飯豐青尊崩、十二月、百官大會、皇太子億計取二天皇之璽一、置二之天皇之座一、再拜從二諸臣之位一、曰、此天皇之位、有レ功者可レ以處レ之、著貴蒙レ迎、皆弟之謀也、以二天下一讓二天皇一、天皇顧讓以レ弟、莫レ敢即レ位、又奉二白髮天皇一、先欲レ傳二兄立一レ皇太子一、前後固辭曰、日月出矣、而爝火不レ息、其於レ光也、不レ亦難レ矣、時雨降矣、而猶浸灌、不二亦勞一乎、所レ貴爲二人弟者一、奉レ兄謀レ逃二脫難一、照レ德解レ紛而無レ處也、卽有レ處者、非二弟恭之義一、弘計不レ忍レ處也、兄友弟恭、不易之典、聞二諸古老一、安自獨輕、皇太子億計曰、白髮天皇以二吾兄之故一、擧二天下之事一、而先屬レ我、我其羞レ之、惟大王道建利遍、聞レ之者歎息、彰二顯帝孫一、見レ之者殞涕、憫憫搢紳、忻荷二戴天之慶一、哀哀黔首、悅逢二履地之恩一、是以克固二四維一、永隆二萬業一、功隣二造物一、清猷映レ世、超哉邈矣、粤無レ得而稱、雖レ是曰レ兄、豈先處乎、非レ功而據、咎悔必至、吾聞天皇不レ可レ以久曠、天命不レ可レ以謙拒、大王以二社稷一爲二計、百姓爲一レ心、發レ言慷慨、至二于流涕一、天皇於レ是知二終不一レ處、不レ逆二兄意一、乃聽而不レ即二御座一、世嘉二其能以實讓一、曰、宜哉兄弟怡怡、天下歸レ德、篤二於親族一、則民興レ仁、　元年正月己巳朔、大臣大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉二讓天下一、陛下正二統、當二奉一鴻緒一、爲二郊廟主一、承二續祖宗無窮之烈一、上當二天心一、下厭二民望一、而不レ肯二踐祚一、遂令二金銀蕃國群僚遠近一、莫レ不レ失レ望、天命有レ屬、皇太子推讓、聖德彌盛、福祚孔章、孺而勤、謙恭慈順、宜奉二兄命一、承二統大業一、制曰可、乃召二公卿百僚於近飛鳥八釣宮一、卽二天皇位一、百官陪レ位、皆忻忻焉、

〔日本書紀二十二天武〕天命開別天皇○智天　元年、立爲二東宮一、四年十月庚辰、天皇臥レ病以痛之甚矣、於レ是遣二蘇賀臣安麻呂一、召二東宮一、引二入大殿一、時安麻呂素東宮所レ好、密領二東宮一曰、有レ意而言矣、東宮於レ茲疑有二隱謀一、而愼之、天皇勅二東宮一、授二鴻業一、乃辭讓之曰、臣之不幸、元多レ病、何能保二社稷一、願陛下擧二天下一附二皇后一、仍立二大友皇子一、宜レ爲二儲君一、臣今日出家、爲二陛下一、欲レ修二功德一、天皇聽之、卽日出家法服、因以收二私兵器一、悉納二於司一、壬午入二吉野宮一、時左大臣蘇賀赤兄臣、右大臣中臣金連、及大納言蘇賀果安臣等送之、自レ菟道一返、或曰、虎著レ翼放レ之、是夕御二嶋宮一、癸未、至二吉野一而居之、是時聚二諸舍人一、謂レ之曰、我今入レ道脩行、故隨レ欲レ修レ道留レ之、若仕欲レ成二名者一、還仕二於司一、然無二退者一、更聚二舍人一而詔如レ前、是以舍人等半留半退、

〔古事記下卷九〕天皇崩之後、定二木梨之輕太子一、所二知日繼一、未二卽位之間一、姦二其伊呂妹輕大郎女一、○略中　是以百官及天下人等、背二輕太子一而歸二穴穗御子一、○安康爾輕太子奔二大前小前宿禰大臣之家一、而備二作兵器一、○兵器、舊時所レ作矢者、銅其箭之內、故號二其矢一謂二輕矢一也、之穴穗王子亦作二兵器一、此王子所レ作之矢者也、是謂二穴穗箭一也、於レ是穴穗御子興二軍圍一大前小前宿禰之家一、○略中爾其大前小前宿禰舉レ手打レ膝儛訶那傳自レ訶下三字以レ音歌參來、○略中如レ此歌參歸白之、我天皇之御子、於二伊呂兄王一無及兵、若及二兵者一、必人唉、僕捕以貢進、爾解二兵退坐一、故大前小前宿禰捕二其輕太子一者流二於伊余湯一也、

〔日本書紀十三安康〕四十二年正月、天皇○允恭崩、十月癸禮畢之、是時太子行二暴虐一、淫二于婦女一、國人謗之、群臣不レ從、悉隸二穴穗皇子一、而密設レ兵、穴穗皇子○安康復興レ兵將レ戰、故穴穗括箭、輕括箭、始起二于此時一也、時太子知二群臣不一レ從、百姓乖違、乃出之匿二物部大前宿禰之家一、穴穗皇子聞則圍之、大前宿禰出門而迎之、穴穗皇子歌之曰、於二朋摩弊一、烏摩弊輸區塗餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅泥、阿梅多知夜梅牟、大前宿禰答歌之曰、瀰椰比等能、阿由臂能古輸孺、於智珥岐等、瀰椰比等等豫牟、佐杜弭等、

太子暴逆自取敗亡

廢太子

茂由梅、乃啓皇子曰、願勿害太子、臣將議、由是太子自死于大前宿禰之家、〔一云流于伊豫國〕十二月壬午、穴穗皇子即天皇位、

〔大鏡裏書〕廢太子事 九人可勘之

道祖親王〔天武天皇孫、一品新田部皇子男、天平勝寶八年立之、寶字元年廢之、〕

他戸親王〔光仁天皇皇子、寶龜二年立之、同三年廢之、〕

早良親王〔追號崇道天皇、光仁天皇皇子、天應元年四月廿二日立之、延曆四年十月廢之、左遷淡路國、〕

高岳親王〔平城天皇皇子、大同四年立之、出家渡唐、逆旅之間遷化、號眞如親王、〕

恒貞親王〔淳和天皇皇子、天長七年立之、承和元年廢之、〕

○按ズルニ、廢太子ハ、此他康仁親王、成良親王、直仁親王等アリ、

〔續日本紀二十 孝謙〕天平寶字元年三月丁丑、皇太子道祖王〔天武皇孫、新田部親王子、〕身居諒闇、志在淫縱、雖加教勅、曾无改悔、於是勅召群臣、以示先帝〔聖武〕遺詔、因問廢否之事、右大臣已下同奏云、不敢乖違顧命之旨、是日廢皇太子、以王歸第、四月辛巳、勅曰、國以君爲主、以儲爲固、是以先帝遺詔、立道祖王爲皇太子、而王諒闇未終、陵草未乾、私通侍童、無恭先帝、居喪之禮、曾不合憂機密之事、皆漏民間、雖屢教勅、猶無悔情、好用婦言、稍多狼戾、忽出春宮、夜獨歸舍云、臣爲人拙愚、不堪承重、故朕竊計廢此、立大炊王、〔略〕宜從天廢、却還本色、〕七月庚戌、分遣諸衛、掩捕逆黨、更遣出雲守從三位百濟王敬福、太宰帥正四位下船王等五人、率諸衛人等、防衛獄囚、拷掠窮問、黃文〔改名多夫禮〕道祖〔改名麻度比〕大伴古麻呂、多治比犢養、小野東人、賀茂角足〔改姓吕志〕等、並杖下死、

〔續日本紀三十 光仁〕寶龜二年正月辛巳、立他戸親王爲皇太子、詔曰、明神御大八州〔ヤマト〕養德根子天皇詔旨勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、隨法爾皇后御子他戸親王立爲皇太子、故此狀悟氏百官人等仕奉詔天皇御命諸聞食止宣、

〔續日本紀三十 光仁〕寶龜三年五月丁未、廢皇太子等天下百姓衆聞食倍止宣、今皇太子止定賜部流他戸王、其母井上內親王乃魘魅大逆之事一二遍能味不在、遍麻呂久發覺奴、其高御座天之日嗣座波非吾一人之私座止奈毛所思行須、故是以天之日嗣止定賜比儲賜部流皇太子位仁、謀反大逆人之子乎治賜部婆、卿等百官人等天下百姓能念良麻呂久毛恥志賀多自氣奈志、加以後世乃平久安長久全久可在伎政仁毛不在止神奈賀良母所念行須依仁依而奈母、他戸王乎皇太子之位停賜比却賜布止宣天皇御命乎衆聞食倍止宣、

〔續日本紀三十 光仁〕寶龜六年四月己丑、井上內親王、他戸王並卒、

〔類聚國史七十 政理〕九、延曆廿二年正月壬戌、外從五位下槻本公奈氏麻呂授從五位上、弟正七位上豐人、豐成、從五位下、並賜姓宿禰、奈氏麻呂父、故右兵衛佐外從五位下老、天宗高紹天皇〔光仁〕之舊臣也、初庶人〔他戸王〕居東宮、暴虐尤甚、與帝〔桓武〕不穆、遇之無禮、老竭心奉帝、陰有輔翼之志、庶人及母廢后、〔井上內親王〕聞老爲帝所昵、甚怒嗔之、切責者數矣、及后有巫蠱之事、老按驗其獄、多發奸狀、以此母子共廢、社稷以寧、帝追思其情、故有此授、

〔水鏡下 光仁〕この后〔井上內親王〕御年五十六になりにて、御年なほもいまだいとけなくおはしまして、ことしは十二にぞなり給ひしかども、此后の御はらにておはせしかば、兄たちを置たてまつりて、こぞの正月に東宮に立給ひしぞかし、〔略〕百川此ほどの事どもをうかゞひ見るに、后まじわざをして、御井にいれさせ給ひき、みかどをとくうしなひたてまつりて、我御子の東宮を位につけたてまつらむといふ事どもなり、其井にいりたる物をある人とりて、宮のうちにもてわつかひしかば、此事みな人ざりにき、〔略〕百川此ことをきゝて、あさましく侍る事なり、后をえばし縫殿の寮に渡したてまつりて、こらしめたてまつらん、又東宮もわしき御心のみおはす、世のためいと〳〵不便に侍ると申し

かば、みかどよからんさまにおこなふべしとの給ひしかば、○中百川いつはりて宣命をつくりて、人々をもよふして、太政官にして宣命をよませむ、皇后及皇太子をはなちおひたてまつるべきよしなり、此事をある人みかどに申に、みかどおほきにおどろき給ひて、百川をめして、后なほこり給はず、ゑばし東宮をゑりぞけんとこそ申こひつるに、いかにかゝる事はありけるぞとの給ふに、百川申ていはく、ゑりぞくとはながくゑりぞくる名也、母つみあり子おごれり、誠にはなちおはんにたれる事なりと、すこしも私あるけしきなく、ひとへに世のためと思ひたる心かたちにあらはれて見えしかば、みかどかへりて百川におぼ給ひて、ともかくものの給はせずして、うち〳〵になげきかなしび給ふ事かぎりなかりき、

〔續日本紀三十桓武〕八延暦四年九月乙卯、中納言正三位兼式部卿藤原朝臣種繼、被二賊射一薨、丙辰、車駕至二自平城一、捕二獲大伴繼人一、同竹良等黨與數十人、推二鞫之一、並皆承伏、依二法推斷一、或斬或流、十月庚午、遣二中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂、大膳大夫從五位上笠王於山科山陵一、○天智部卿從四位上壹志濃王、散位從五位下紀朝臣馬守於田原山陵一、○仁光中務大輔正五位上當麻王、中衛中將從四位下紀朝臣古佐美於後佐保山陵一、○武聖以告二廢皇太子一、○貳早之狀、

〔日本紀略桓武〕延暦四年九月庚申、詔曰云々、○略中是日皇太子自二內裏一歸二於東宮一、即日戊時、出二置乙訓寺一、是後太子不二自飲食一、積十餘日、遣二宮內卿石川垣守等一、駕二船移一送二淡路一、比レ至二高瀨橋頭一已絕、載レ屍至二淡路一葬、

〔帝王編年記桓武十二〕延暦十九年七月、遣二勅使於淡路國一、取二早良親王之骨一、光仁第三皇子、桓武同母弟也、納二大和國八島寺一、添上郡古市南諡稱二崇道天皇一、八所御靈之內

○按ズルニ、崇道天皇ノ事ハ、追尊天皇ノ條ヲ參看スベシ、

〔水鏡下桓武〕八月○延暦四年ならの京へ行幸侍りき、○略中長岡の京には中納言種繼留守にて候し

を、みかどの御おとゝの早良親王東宮とておはせしが、人をつかはしていころさしめ給ひてき、○略中かくて十月に、東宮をおとくにでらにこめたてまつり給へりしに、十八日までその命たえ給はざりしかば、わはちの國へながしたてまつり給ひしに、山さぎにてうせさせ給ひにき、○略中同十九年七月己未、みかど思ふところありとのたまひて、前東宮早良親王を崇道天皇と申、又井上內親王を皇太后とすべきよし仰られき、おの〳〵まさぬあとにも、うらみの御心をゑづめたてまつらむとおぼしめしけるにこそ侍るめれ、

〔太鏡三左大臣師尹〕世はじまりてのち、東宮位とりさげられ給ふ事は、八九代ばかりにやなりぬらん、なかに法師東宮おはしけるこそは、うせ給ひて後に贈太上天皇と申ていぼひすゑられ給へば、おぼやけもゑろしめして、しゆだう天皇とて、官物のぼつをさきにたてまつらせ給ふめり、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月庚戌、廢二皇太子一、○高岳立二中務卿諱淳和一爲二皇太弟一、

〔紹運要略〕廢太子、高岳親王、平城子、後號二眞如親王一、大同四年四月日立坊、弘仁元年九月十二日廢之、出家渡唐、逆旅之間遷化、

〔水鏡下嵯峨〕弘仁元年○略中九月に內侍のかみ○藥子をすゝめたてまつりて、位にかへりつきて、われ后にたゝんといふ事いできて、世中靜ならずさゝめきあへりし程に、みかど內侍のかみのつかさ位をとり給ひ、仲成○藥子兄を土佐國へながしつかはすよし宣旨をくだせ給ひしに、○略中十一日に太上天皇いくさをおこして、ないしのかみとひをつ御こしにたてまつりて、東國のかたへむかひ給ひしに、○略中大納言田村麻呂、宰相綿麿をつかはして、そのみちをさへぎりて、仲成をいころしてき、太上天皇すぢなくてかへり給ひて、御ぐしおろして入道し給ひてき、御年三十七なり、內侍のかみみづから命をうしなひてき、おそろしかりし人の心なり、太上天皇の御子の東宮○高丘をすてたてまつりて、みかどの御おとゝの大伴親王とて、淳和天皇のおはしまし〳〵を、東宮にたて申させ給ひき、

〔三代實錄清和二十四〕貞觀十五年十一月十四日乙亥、從四位上行大和守在原朝臣善淵、前肥後守從五位上在原朝臣安貞等上表請、無品高丘親王入唐之後、多歷年序、歸却之期已過、存亡之分難決、而偏准於平常、猶受其封邑、靜而思之、慙悚難耐、望請早被返收、將免謗議、勅存亡難卜、何許來請、

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年七月乙卯、是日詔曰、現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔良万宣御命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食與止宣、不慮外爾太上天皇〇嵯峨崩流爾依天、晝夜止无久哀迷比焦禮御坐爾春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊、隙仁乘天、與橘逸勢合力天、逆謀乎構成天國家乎傾亡无須止此事乎皇太子波〇淳和皇子恒貞不知毛在女止、不善人仁依天相累事波自古利言來留物奈利、又先先仁毛令法師等天呪咀止云人多安利而止毛隱狐乎撥求女无事乎不欲之天奈毛抑忍太留、又近日毛或人乃云、屬坊人等毛有謀止云、若其事乎推究波恐波不善事乃多有无事乎、加以後太上天皇乃〇淳和厚御恩乎顧天毛究求女无事乎不知奴、今思保佐久波直仁皇太子乃位乎停天、彼此無事波善久有部之止思保之女須、又太皇太后乃〇嘉智子御言仁如此久奈毛思保留、故是以皇太子乃位乎停退介賜不、又可知事人止爲天奈毛、大納言藤原朝臣愛發乎波廢職天京外仁、中納言藤原朝臣吉野乎波太宰員外帥仁、春宮坊大夫文室朝臣秋津乎支出雲國員外乃守爾任賜比宥賜不止宣天皇我御命乎衆聞食止宣、丙辰、廢皇太子劒四口納二口納二珠繩一袋一、勅遣參議正四位下勳六等朝野宿禰鹿取等於嵯峨山陵告廢皇太子狀曰、天皇我御命爾坐、掛畏山陵乃厚顧爾依天、其事發覺禮奴、搜求事跡事緣伴健岑與橘朝臣逸勢挾懷惡心天謀傾國家介利、掛畏山陵爾申賜倍止奏久、比者東宮帶刀舍人皇太子、因茲食國法隨爾皇太子位停退留狀乎、恐美恐毛申賜久止申、八月甲戌、遣參議正躬王送廢太子於淳和院、備前守從四位上紀朝臣長江自院逢迎、其儀駕小車一出禁中一到神泉艮角一駕牛車一、先是童謠曰、天爾波琵琶乎曾折那留、玉兒率括乃坊爾牛車波善氣夜牟辛菅乃小菅之華、有識咸言、童謠不虛、于今驗之矣、

〔水鏡仁明〕承和九年七月十五日に、嵯峨法皇うせさせ給ひにき、當代の御ちゝにおはします、十七日平城天皇の御子に阿保親王と申し人、嵯峨のおほぎさきの御もとへ、御せうそくをたてまつりて申給ふやう、東宮のたちはきこはみねと申ものまできて、太上法皇すでにうせさせ給ひぬ、世中のみだれいでき侍りなんず、東宮を東國へわたしたてまつらんと申よしをつげ申給ひしかば、忠仁公〇藤原の中納言と申てふみをみかどにたてまつり給ひき、この事こはみねと但馬權守橘逸勢とはかれりける事にて、東宮はゝり給はざりけり、廿四日に事あらはれて、廿五日に但馬權守を伊豆國へつかはし、おち給ひて、太子をのがれんと申給ひしかば、みかどこの事はこはみねひとりが思ひたちつることなり、東宮の御あやまりにあらず、とかくおぼすことなかれとて、だゞもとのやうにてをはしまさせき、〇中略八月三日みかど冷泉ゐんに行幸ありて、すゞませ給ひしに、東宮もやがてまゐらせ給ひたりしに、いづかたよりともなくてふみをなげいれたりき、こはみねが東宮をしへたてまつりたることゝいもありしかば、にはかに東宮の宮づかさたちはきおもと人なゞ百餘人とらへられて、東宮を淳和院へかへしたてまつりて、四日當代の第一親王を東宮にたて申給き、文德天皇これにおはします、

〔三代實錄光孝四十六〕元慶八年九月廿日丁丑、恒貞親王薨、不任葬司、以喪家不經奏聞殯殮既訖也、皇帝不視事三日、親王者淳和太上天皇之第二子也、母太皇大后諱正子、嵯峨太上天皇之女焉、天長十二年立爲皇太子、承和九年廢皇太子、依橘逸勢、帶刀舍人伴健岑、反逆之謀也、嘉祥二年正月授三品、恒貞出家爲沙門、名曰恒寂、崇信佛道、精進持戒、無病而薨、時年六十、遺命薄葬務從率儉、

〔光嚴院御記〕元弘元年十月廿一日癸亥、以通顯卿、自內親王立坊事被申之、十一月八日己卯、立太

子○康仁節會也、

〔増鏡十村時雨〕元弘元年、○中略かゝるにつけては、一御ぞうのみいまはわくかたなくさだまり給ふべきかと、世の人も思ひこゝろえぬる程に、龜山院の御ながれのたゆべきにはあらずとにや、先坊○邦良の一宮○康仁を太子にたてまつるる、御めのとの雅藤の宰相の、法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入たてまつりて、十一月八日に坊にさだまり給ふ、今は思たえぬる心ちしつるにいとめでたし、松が浦島に年へ給ひぬる入道の宮も、御おやの心ちにておはしますべければ、太上天皇になずらへて、崇明門院○邦良妃・媖子と聞ゆ、

〔歴代皇紀光嚴〕皇太子康仁親王、元弘元年十一月八日立、九月二十日立親王二年五月廢之、

〔續史愚抄後醍醐〕元弘三年五月十七日己酉、於伯耆船上行宮詔曰、宜廢新帝光嚴院皇位、及康仁親王皇太子位、

〔歴代皇紀後醍醐〕皇太子恒良親王、當今皇子、母准三宮藤廉子、元弘四年十一月廿四立、延元元年十月十三日、爲義貞北國沒落、

〔南方紀傳〕南朝延元四年北朝曆應二年四月十三日、恒良親王薨逝、十五歲

○按ズルニ、恒良親王ノ北國ニ行啓アリシ後、光明天皇ハ成良親王ヲ太子ト定メ給ヒシカバ、恒良親王ハ自ラ廢セラレシモノニテ、神皇正統記後醍醐天皇ノ條ニ、八月○建武三年に至るまで度々合戰有しかど、官軍すゝまず、依て都には、元弘の時の僞主○光嚴の御弟に、三の御子豐仁○光明と申けるを位につけ奉る、十月の頃にや主上都に出させ給ふいとあさましかりし事なれど、また行末をおぼしめす道ありしにこそ、東宮○恒良は北國に行啓あり、左衞門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべき兵もあまたつかうまつりけり、主上をば尊號のごとくにてなし〳〵き、御心をやすめ奉んためにや、成良親王を東宮にすゑ奉る、ト見エタリ、

雜載

〔歴代皇紀光明〕皇太子成良親王、後醍醐皇子、母准三宮廉子、建武三年十一月十四日立、元上野大守征夷大將軍、

〔皇年代略記光明〕建武三年十一月十四日、以先帝○後醍醐皇子成良親王爲皇太子、十二月先帝又御出奔之後廢之、

〔歴代皇紀崇光〕皇太弟直仁親王、一院○花園第二皇子、母徽安門院、貞和四年十月廿七日立、十四讓位宣命、次觀應三年十一月廢之、

〔椿葉記〕崇光院は、○中略觀應二年十一月七日、南朝より取たてまつりて御くらゐを廢す、○中同三年閏二月廿日、南朝○後村上の天氣により、兩上皇○光嚴、光明、新院○崇光、儲皇直仁親王八幡の軍陣に幸しなしまゐらす、○中略さてとう宮○仁直は廢せられて、光嚴院第二宮○後光嚴同八月十七日踐祚あり、ちゝの御ゆづりにもあらず、ぶしやう○足利尊氏のはからひとして申おこなふ、

〔大鏡後一條〕むかし一條の院の御なやみのをりおはせられけるは、すべからくは次第のまゝに、一のみこ○敦康をなむ春宮とすべけれど、うしろみすべき人なきにより思ひかけず、さればこの宮をばたて奉るなりとおぼせられけるぞ、此たうだい○後一條の御事よげにさる事ぞかし、帝王の御次第は申さずともありぬべけれど、入道殿下○藤原道長の御榮花もなにゝよりひらけ給ふぞと思へば、まづ御門后の御ありさまを申なり、うゑ木はねを生じてつくろいおほしたてつればこそ、えだもさげりてこのみをもむすべや、さかあればまづ帝王の御つゞきをおぼへて、つぎに大臣の御つゞきはあかさんとなり、

〔愚管抄四〕さて後朱雀の御やまひおもくて、後冷泉に御讓位ありけることを、宇治殿○藤原賴通なをりて申しさたまてたゝせたまひけるに、後三條の御ことのなにとも沙汰もなかりけるに、御堂○藤原道長をと子の中に能信の大納言といふ人ありけり、閑院の公成中納言のむすめを子にしてありけるを、後三條の后にはまゐらせたる人なり、宇治殿たゝせたまひける跡にまゐりて、二宮

○後三條御出家の御師のことは、この次に仰せおかるべくや候らんと申たりければ、こはいかに二宮東宮にたゝんずる人をばと勅答ありけるをきゝて、さてはけふその御さた候はで、いつかはせられてやなひ重くてとおぼせられて、宇治殿めし返して、讓位の宣命に皇太子のよしのせられにけり、能信をば閑院東宮の大夫とぞ申、この申やうこそふかしぎなれと人おもへり、白河院○後三條皇子のつねに能信をば故春宮大夫殿おはせずば、我身はかゝる運もわらましやと仰られけるには、かならず〳〵殿の字を付ておぼせられけり、やんごとなきことなり、

〔續世繼御法の師〕東宮○後三條におはしましける時、よのへだて多くおはしましければ、あやふくおぼしけるに、撿非違使の別當にて經成と云し人、なほしにかゝはばさみにて、やなぐひおひて中門廊にゐたりける日は、いかなることの出きぬるぞとて、宮の内の女房より始めて隱れさわぎけるとかや、おはしましける所は二條東洞院なりければ、其わたりを軍のうちめぐりてつゝみたりければ、かゝる事こそ侍れなど申あへりけり程に、別當のまゐりたりければ、東宮も御直衣奉りなどして御よう意有けるに、別當撿非違使めして、をかしの物はめしとりたりやと問れければ、既にめして侍りと云ければこそ、ともかくも申さでまかり出られけれ、おもくあやまちけるもの、おはしまず近きあたりに籠りゐたりけるに、もし東宮ににげいる事もやあるとてまゐりたりけり、かやうにのみあやぶまれ給て、東宮をもすてられやせさせ給はんずらんとおもほしけるに、殿上人にて衞門權佐ゆきちかと聞えし人の相よくするおぼえ有て、いかにも天の下をろしめすべきよし申けるかひありて、かくならびなくぞおはしまし、

〔古事談一王道后宮〕後三條院春宮ノ御時、御持僧成尊僧都奉問云、北斗ノ御拜候ヤ、被仰云、毎月奉拜也、帝位ノ事ナド非祈申、オモハジトハスレドモ、自有即位時ナド思マジユル事時ニ出來ル也、此條奉爲君依可爲不忠、此事ヲ恐申テ拜シ奉ル也云々、成尊聞此御詞涕泣スト云々、

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、○中略

一歲立太子例

清和天皇　嘉祥三年十一月廿五日戊戌
冷泉院　天曆四年七月廿三日
鳥羽院　康和五年八月十七日
近衞院　保延五年八月十七日

二歲例

陽成院　貞觀十一年二月一日
保明太子　延喜四年二月十日
華山院　安和二年八月十三日
實仁太子　延久四年十二月八日

三歲例

慶賴太子　延長元年四月廿九日
朱雀院　延長三年十月廿一日

四歲例

後一條院　寬弘八年六月十三日

五歲例

一條院　永觀二年八月廿七日

六歳例
　當今〇高倉　仁安元年十月日
七歳無例
八歳無例
九歳
　恒貞太子　天長十年二月廿日
　醍醐天皇　寛平五年四月二日或十四日
　圓融院　康保四年九月一日
　三條院　寛和二年七月十六日
　後朱雀院　寛仁元年八月九日
十歳無例
十二歳
　後冷泉院　長暦元年八月十七日
　後三條院　寛徳二年正月十六日
　二條院　久壽二年九月廿三日
十三歳無例
十四歳
　仁明天皇　弘仁十四年四月十八日
十五歳無例
十六歳

文徳天皇　承和元年八月四日
十七歳
　白河院　延久元年四月廿八日
十八歳無例
十九歳
　村上天皇
廿歳無例
廿一歳無例
廿二歳
　嵯峨天皇　大同元年五月五日
〔增鏡九枕草〕文永十一年正月廿六日、春宮〇後宇多に位譲り申させたまふ、〇略中東の御方〇後深草后藤原愔子の若宮見〇伏を坊に立奉りぬ、十月五日節會行はれていとめでたし、〇略中御門〇後宇多よりはいまニばかりの御このかみなり、儲の君御年まされるためし、遠き昔はさておきぬ、近頃は三條院、小一條院、高倉院などやおはしましけん、高倉院の御末ぞ今もかく榮えさせおはしませば、かしこき例なめり、
〔羽倉考一〕立太子東宮宣下
明正院後光明院後西院不可有立太子乎之事
明正院、後光明院、後西院三代ハ、立太子ノ事見エザルヨシ、案ズルニ、明正院ハ女帝ナレバ立太子ノ事アル可ラズ、古來女帝ノ立太子イマダ所見アラズ、後西院ハ花町殿トテ一品式部卿親王ニテ在シニ、後光明院御在位ニテ俄ニ崩ジ賜ヘレバ、是亦立太子ノ事ナキナルベシ、唯後光明院ハ、

明正院ノ皇太弟ニ立タマフベキ事ナレドモ、是モ立太弟ノ事無リシニヤ、近代紹運錄ニモ、後光明院ノ御元服ノ加冠理髮ノ人ノ名ヲサヘ擧タルニ、立太子ノ文ナシ、古例ヲ考フルニ、必ズ太子ニ立テヽ後ニ位ヲ讓リタマフニモ非ズ、國史ニ見ユル所、上代ハ綏靖仁德以下、卽位先帝ノ叡慮ヨリ出タル者ハ、皆立太子ノ事アリ、是此時世ニハ讓位ト云コトナクシテ、崩御マデ御在位ナル故、太子ヲ立テザレバ、次ノ位定マラザルガ故ト見エタリ、皇極天皇ニ至リテ、初メテ位ヲ孝德天皇ニ讓リタマヘリ、而シテ孝德立太子ノ事ナク、輕皇子ト云シヨリ直ニ受禪シタマヘリ、故ニ天智天皇ト互ニ辭遜シタマヒシナリ、是本邦讓位ノ初ニテ、則チ太子ニ立テズシテ位ヲ讓リタマヘリ、其後陽成天皇位ヲ光孝天皇ニ讓リタマフ、是モ立太子ノ事ナク、光孝一品式部卿親王ニテ在シニ直ニ讓位シタマヘリ、中世以後モ、應安四年三月廿一日、後圓融院ニ親王宣下アリテ、同廿三日後光嚴院讓位シタマフ、中間唯一日、本ヨリ立太子ノ沙汰ナキコト後愚昧記ニモ明ナリ、此外モ數多アルベケレド急ニ考擧ゲ難シ、是ヲ以案ズルニ、必讓位シタマフベキ皇子アリテ、早クヨリ其叡慮アラバ立太子アルベク、叡慮遲ク定マリタラバ直ニ讓位アリテ、立太子ニ及バザルト見エタリ、然レバ明正院ノ後光明院ニ讓リタマフモ、急ナル叡慮ニテ、立太子ハ無リシナルベキ歟、

靈元院有二立太子之事一則不レ可レ無二東宮宣下之事

靈元院ハ、立太子ノ事案記アリテ、東宮宣下ノ事案記ナシトアルヨシ、此事通ゼズ、立太子則東宮宣下ニテ二事ニ非ズ、貞觀儀式以下諸次第ノ立太子ノ式ヲ見ルニ、皇子某ヲ太子ニ立ルヨシノ宣命ヲ群臣ヘ讀聞シムル、是則立太子ノ儀式ナリ、強テ之ヲ別タバ、儀式ナクシテ唯宣下アルヲ東宮宣下ト云ヒ、其宣下ヲ群臣ヘ露顯スル儀式ヲ立太子ト云ン歟、然ラバ宣下アリテ儀式ナキ事ハ有ル事モアルベシ、儀式アリテ宣下ナキト云フ事ハアルベカラズ、立太子ノ事案記アリテ、

東宮宣下ノ事案記ナシト云フ事義通ジ難シ、若ハ其東宮宣下トアルハ、儲君宣下ノ事ヲ混ジ云ルニテモアラン歟、〇略中靈元院ハ明曆四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院、當今〇櫻町ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ、皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下ナカリシナルベシ、然レバ靈元院立太子ノ事ハ案記アリテ、儲君宣下ノ事ハ案記ナキト云フ事ハアルマジ、

〇按ズルニ、本書ニ古來女帝ノ立太子イマダ所見アラズトアレド、孝謙天皇ハ、聖武天皇ノ皇太子ト爲リ給ヘリ、ナホ、皇女爲太子ノ條參看スベシ、

〔槐記〕享保十二年五月廿四日、參、候、〇略中人ニハ咄モナラズ、咄スベキモノモナシ、汝ニカタラントコノホドヨリ思召ス、汝モシルゴトク、今般親王〇櫻町ノ御方、東宮立坊ノ御沙汰アリテ、舊殿ヨリ戌亥ノ方ヘタテ出サルヽ筈ニテアリ、御儀式ノ殿ドモノナクテカナハヌ、寢殿大廣間殿上車寄等、忽チ東宮節會ニ諸卿群列ノ儀式行ハルヽヤウニナリテ、先日ヨリ度々御內ヘモ御成アリ、關白ノ第ヘモ御出アリタル事ナリ、奉行ハ石井中納言ナリ、大方儀式ノ御殿其差圖ドモハ出來ズ、內々ニナリテハ儀式ハイラズ、勝手ヨキヤウニ女中方ヨリノ好ミニマカセテオケバ、色々ノ好ミドモ出デヽ、段々ニ推シ出シテ、表ヘツマリテ肝心ノ儀殿ドモノ割ニナルコトアリテ、御差圖サダマラズ、色々ト御難儀ニ思召ス處ニ、一昨日御參內ノ刻、石井申サレシハ、御內々ノ御差圖ハスキト相スミヌ、表向ハ先達テ定メ置レタル通ニテ、早速ニ皆々埒アキヌト申サル、ソレハイカニキハマリテ、申シノ口モ二間ヲ一間ニシ、御納戶モセバキヲヒロゲ、御湯ドノモクラキユエヒロゲテ前ニ廊下ヲツケナド致セバ、常ノ御殿ノ前ノ假山草花等ヲ崩サヌバナラズ、コトニ御秘藏ノ山吹ヲ多ク栽ラレタリ、ウカヽハズバ御氣色イカヾナリトテ、大乳ノ人六條ナド申シ上ラレ

シニ、親王ノ御方〻〻〻ト聞シメシテ、ソレハナニユエニト勅問アリ、コノ度東宮立坊ノ御沙汰ニテ候、サアレバ御道具ドモ、多クナレバ、今ホドニテハ御セバキユエ、幸ノ御次手ニ、内々ノ勝手アシキ處ヲモ改易セシムルナリト申シ上シカバ、シバラク御思惟ニテ仰出サレシハ、東宮ノ御沙汰アレバ、是ナク御位ニモ御即ナサルベシ、サアレバ父帝〇中御門ノ御殿ニ御移リナサルベシ、其上ニテ父帝ノ改メラルヽハ格別、コノ御殿ハモト新中和門院〇櫻町母后尚子ノ御座所ニテ、コトニ御内々ハ常ニ馴テ御住居ナリシ處ナレバ、タトヒイカホド御不自由ナリトモ、御勝手アシクトモ、東宮ニテ御座アランホドハ、少シモ改ムベカラズト仰出サレシホドニ、大乳ノ人モ六條殿モ何ト申上ベキ言葉モナク、只感涙ニ堪ズシテ退キ、カヤウ〻〻ノ思召ノ上ハ、勝手方ニ於テハ少シモ御好ミモナシ、表向ノ御差圖ノミヨクト一日ニコトスミ候ト、武家モ臣下モ世ニアリガタキコトニ奉存ナリ、コレヨリ恐ロシゲツキテ、表向ニ差圖モ御覽ニ入ズバ、穴カシコ後悔アルベシトテ御覽ニ入シカバ、イザトヨ見ルニ及ブベカラズ、中ノ口マデハ女御ノ御方ニモ常ニハ成セラレシ處ナレバ、コレヲ改ムルハ世ニイマ〻〻シクコソオボシメセ、表向ノコトハトモカクモ儀ノ調テヨキニハカラヒ申セ、上ヨリノ思シ召ハ少シモナシト仰出サル、又々何レモ肝ヲヒヤシテ感歎シ奉ル、准后御方ニモ世ニ御ウレシゲニ忝クモアリガタキコトニ覺召ス、コノ御心ニテハ後來モ御タノモシキコトナリ、御代ノ長久、寶祚ノ御繁榮ウタガヒナキモノカト仰アリ、兩人ヨリ女中方チヘジメ、拙ドモモハバカリ多キコトナガラ、落涙トバメガタシ、准后ノ御心中イカバカリ御ウレシクモ、又女御ノオハシマサンモノゾトオボシメスベシト恐シレアルコトナガラ、八歳ノ宮〇後醍醐太子恒良ノ御發明ナノ、御奇特ナリノト申シ上ルコトニハアラズ、唯々天ノナセル麗質ノ御德義ヨリ出タルコトニテ、全ク才ノコトニアラズト申上シカバ、イカニモ汝ガ申條尤ナリト仰ナリ、日本ニテ八歳ノ宮ノ御歌トテ、古今マレナルコトニ申スモ、外ノ風流ノ御歌ニアラバコソ、父帝ヲシタヽメヒシユエナリ、ソレハ又一時ノ感情ヨリ出ヅトモ云ベシ、コノ御コトハ一時ノ感發トモ云ガタシ、治世ノ第一ト云ベシ、母后ヲシタヒマス御心モ、八歳ノ宮ニオトリ給ハズ、八月十二日參候仰ニ、來ル十八日ニハ、東宮御方、御本殿ヘ渡御ナルベシト仰出サレタリ、目出度コトニ思シメス、近代ナキコト、メヅラシキ御コトナリ、近代ハ急度御外祖ニ執柄ノ家珍ラシキコトユヱ其沙汰ナシ、昔御堂殿〇藤原道長ヘ東宮ノ渡御アリシハ格別ノ御コトニテ、五十匹ノ競馬ヲツガヒテ御覽ニ供セラレシコト御記錄ニアリ、近代ニテハ後水尾院ノ應山ノ櫻ノ御所ヘ渡御ナリシハ微々ノ御コトニテ度々ナリシ、其後ハ執柄ノ御外祖タルコトナキ故、コノ御家ニモメヅラシ、未ダ御入衆モシカトハ究ラズ、先刻ハ治部大輔ガ來リテ、本殿ノ表替掃除ノコトナドカクノ如ク取込ノ由、東宮ヲ初メ奉リ、女中公家地下ノ役人マデ、不殘御饗應ノ上御土產ヲ進セラレシモノアリ、小サキ御厨子棚フンダミ金ノ高マキエアリ、上ノ段ニ指圖ヲ一通リ不殘ソロヘテ、尉翁ヲ初トシテ小面平太等ヲ並ベラレタリ、香箱ヘハ微塵人形ヲツメラレタリ、外ニ東求院良山御筆ノ法書ノ卷、物一卷梅ノ折枝ニ付テ獻ゼラル、コレニ付テフト仰ラルヽハ、大事ノ故實アリ敎フベシ世ニ佐理行成道風ヲ三跡ト云、此三跡ノ字ハ、本ト御堂殿ヘ渡御ノ時ヨリ初テ云習セシコトナリ、コノ時御堂殿ノ獻上、佐理ト道風トノ筆跡ノ卷物ヲ獻ゼラレシガ、今一卷ヲ行成ニカヽセテ梅ノシモトニ付テ上ラレシヨリ、世ニコレヲ三跡ト云シコト御記錄ニアリ、行成ノ手柄世ニ面目ト云ベシ、古ノ佐理道風ニナラベテ行成ニカヽセラレシハ、行成ガ手柄ナリトノミ御咄アリシガ、コノタビモコノ例ヲ追ハルヽナルベシト恐察シ奉ル、〇略中又當日ハ何ゾ外ニ御ナグサミゴトニテモアリヤト伺フ、仰ニ、カヽテハ何ゾトコヽロガケシガ、コノ渡御ハ私ノコトニ非ズ、式正一々天下ノ取沙汰トナルベシ、然レバ何ゴトニモセヨ、コノコトアリテ、風說アリテハ批判アルベシト思召テ止メラレタリ、還

御ノ跡ニテハ傳奏ヲハジメ所司議奏ナド參ラルベシ、コノ饗應ニハ權之進タチ參リテハヤシナドアルベキカト仰ラル、申モ恐アルコトナガラ、何ノコトニモセヨ、天下ノ式トナルコトハコレアルベキコトナリ、御身ノタメノミナラズ、御上ノ御爲ニモ然ルベカラズ、初テノ御コト重テハトモカクモ此タビハカクアルベキコト、奉恐察、イツモノ拜賀元服ナド、ハチガヒテ、殊外ニ心遣ヒナルコトナリ、渡御ノ間ハ諸卿ヲ初トシテ末マデ不殘平折敷ナリ、還幸ノ跡ノ饗應ハ大臣ハ大臣、公卿ハ公卿、殿上人ハ殿上人ト、夫々ニ膳部ヲカヘテ、三寶モアレバ足打立モアリ、勿論平折敷モアリ、夫ユヱ二段ニナリテ、別シテヤカマシキコトナリト仰ナリ、十九日、昨日渡御御祝儀參候、昨日ハ隨分ノ御機嫌ニテ、朝モ正辰刻渡御ニテ、御獻上引ワタシナド相スミテ、乘馬御覽、御方ノ輿ヨセノ前ヲ馬場トシ、竹ヲ渡シ叡覽ノ假座ニムラサキノ幕ヲ引、最中ニ御簾ヲ下シ、前ノ椽ガハニ高欄ヲツケテ、簾外ニ准后關白ノ御座アリ、乘馬ハ左衞門、一角、甚內、新八ナリ、夫ヨリ御庭御覽、御泉水ノ築山ノ上ニハ、初葺松葺ヲ多ク植ラレタリ、寢殿段上マデ御步行ニテ還幸、御料理スミテ御靈祭御覽、御格子ノ前ニ神輿ヲ下シ奉幣ナドアリ、還幸ノ後御出スグニ初更前ニ還幸ノヨシ、前ニ記スゴトク上ヘ獻上ヲ初メトシテ、女中下々マデ引出物アリ、アナタヨリモ御ミヤゲアリ、上ヲ初トシテ諸大夫隱居諸大夫近習青士女中方不殘下サレモノアリ、

〔二中歷一人代〕薨逝太子

菟道稚郎皇子　應神一御子

木梨輕王　允恭子

厩戸皇子　用明子　號二聖德太子一

草壁皇子　天武子　文武父

聖武皇子　不レ知レ名

保明親王　醍醐子　元名崇象、□養太子

慶賴太子　保明子

實仁親王　後三條子

惟善親王　後二條太子

○按ズルニ、薨太子ハ此ノ他ナホ後醍醐天皇ノ皇子邦良親王、恒良親王、後小松天皇ノ皇子小川宮等アリ、

〔園太曆〕貞和四年十月廿七日庚寅、今日儲皇○崇光冠儀、幷讓國、○光明立坊、○仁直重疊嘉禮之日也、○中略依二踐祚立坊同日例一、於二陣被一行レ之、右大臣參議忠嗣執筆、

踐祚立坊同日例

淳和天皇踐祚

恒世親王立坊

弘仁十四年四月十七日

圓融院踐祚

華山院立坊

安和二年八月十三日

華山院踐祚

一條院立坊　圓融皇子

永觀二年八月廿七日

三條院踐祚

後一條院立坊

寛弘八年六月十三日

後一條院踐祚

敦明親王立坊

長和五年正月廿九日

後冷泉院踐祚

後三條院立坊（後朱雀皇子）

寛德二年正月十六日

白河院踐祚

實仁親王立坊（後三條皇子）

〔薩戒記〕應永三十二年二月十六日丁巳、辰刻許下人云、小川宮（後小松）第二御子、內（稱光）御一腹爲儲君、近頃勸修寺中納言經興卿奉養實、件御所彼納言家也、即奉同宿者也、今曉薨御、御頓死也云々、仰天馳參、〇中略昨日及秉燭無殊御氣、自去丑刻許令苦惱御、非殊御事歟之由於中納言云々、〇中略其後日野大納言入道參入召醫師、先是御息令絕御乎、言語道斷御事也者、〇中略或人曰、當年三合災也、又去頃有怪異等、一日吉社竹枯、是竹園災也一日吉大宮寶前有死猿無首云々、彼宮申御歲也、當時此宮爲申歲、此宮御怪異也云々、彼猿事正月廿二日事也云々、

皇太子妃

○

〔日本書紀十七繼體〕八年正月、太子妃春日皇女、晨朝晏出、有異於常、太子意疑、入殿而見、妃臥床涕泣惋痛不能自勝、太子怪問曰、今旦涕泣、有何恨乎、妃曰、非餘事也、唯妾所悲者、飛天之鳥爲愛養兒、樹巓作巢、其愛深矣、伏地之虫、爲護衛子、土中作窟、其護厚焉、乃至於人、豈得無慮、無嗣之恨、方鍾太子、妾名隨絕、於是太子感痛、而奏天皇、詔曰、朕子痲呂古、汝妃之詞、深稱於理、安得空爾無答慰乎、宜賜匝布屯倉表

妃名於萬代、

〔日本書紀三十持統〕高天原廣野姫天皇、〇持統少名鷕野讃良皇女、天命開別天皇〇天智第二女也、母曰遠智娘、更名美濃津子姫也、天皇深沈有大度、天豐財重日足姫天皇〇齊明三年、適天渟中原瀛眞人天皇〇天武爲妃、

〔續日本紀四桓武〕延曆九年閏三月丙子、是日皇后崩、甲午、參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美率誄人奉誄、謚曰天高藤廣宗照姫尊、〇略中皇后姓藤原氏、諱乙牟漏、贈內大臣從一位良繼之女也、母尚侍贈從一位阿倍朝臣古美奈、后性柔婉美姿儀、閑於女則、有母儀之德焉、今上之在儲宮也、納以爲妃、生皇太子賀美能親王、高志內親王、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十九年十月十一日乙巳、女御藤原氏、〇皇太子保明妃貴子於東宮賀右大臣〇藤原忠平四十算、

〔日本紀略十條〕長德元年四月六日壬午、關白正二位藤原朝臣道隆依病入道、年四十三中宮〇定子幷東宮女御、〇道隆女、行啓彼里第、

〔大鏡七太政大臣道長〕つぎの女君子〇嬉はそれも內侍のかみ、十五におはしますに、いまの東宮〇後朱雀十三にならせ給ふとし、治安元年二月一日まゐらせ給ひて、春宮女御にてさぶらはせ給ふ、とうくはでんにぞおはしまし、との〇道長入道せめ給ひて後の事なれば、いまの關白殿〇賴通の御女となづけたてまつりてこそはまゐらせ給ひしか、

〔續世繼三大內渡〕としもかはりぬれば、院〇鳥羽の姫宮、〇妹子東宮〇ニの女御にまゐり給、高松の院と申御事なり、

〔百練抄一四條〕正曆四年閏十月廿日、小右記云、〇中略將濟時子修法、猛靈忽出來、〇下略

〔河海抄二〕六條御息所〇秋好中宮母儀前坊御息所〇真信公女前坊御息所中將御息所

〔百練抄四條〕長德四年十二月三日、强盜入二宣耀殿東宮一、〔三條〕御息所、〔城子〕希代事也、

〔小右記〕長元五年九月十三日辛巳、東宮〔後朱雀〕御息所、一品禎子、戌刻產二女子一、

〔玉葉〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣〔藤原經〕長女有二入宮事一、名立子、生年十八、與レ余同、腹、母權中納言能保卿女、

廿六日、早旦著二直衣一參二東宮〔順德〕御方一、即參二御息所一、御方即退出、歸二一條亭一、今日以下每夜御息所昇給也、

〔續史愚抄十六花園〕正和三年正月廿日乙巳、春宮〔後醍醐〕御息所藤原朝臣禧子〔入道前太政大臣實兼女母從二位藤原朝臣孝子一、自二秋一盜取給、因無二參入儀一、著帶、今月有二露顯一云、日闕、

〔近代御系譜〕青綺門院藤舍子、二條關白吉忠公女、享保十八年九月廿八日、爲二東宮〔櫻町〕御息所一、

古事類苑

帝王部二十四

皇親上　皇親妃附入

稱號　一四一二
皇子初見　一四一五
親王初見　同
親王制度　同
世襲親王　一四一六
親王宣下式　一四二九
待遇　一四三五
叙品　一四四〇
任官　一四四二
親王家令　一四四五
勅別當　一四四六
帳內舍人　同
親王品田　同
親王食封　一四四七

時服　一四四八
季祿　同
年官年爵　一四四九
皇子賜姓　一四五二
賜姓後復親王　一四五四
猶子養子　一四五五
皇子爲人臣養子　一四五六
皇子皇女不爲親王　一四五七
廢親王　一四五八
○　
皇女初見　一四五九
內親王稱呼　同
內親王宣下　同
內親王叙品　一四六二
內親王待遇　同
內親王家令　同
內親王品田　一四六五
內親王食封　同
猶子　同
皇女降嫁臣下　一四六六

廢內親王　一四六九

目四

古事類苑

帝王部二十四

皇親上

皇親トハ、皇兄弟姉妹及ビ皇子皇孫以下スベテ天皇ノ親族ヲ云フ、日本書紀ニ據ルニ、其始メ皇親ノ男子ハ皆某尊、又ハ某命ト書シ、女子ハ何レモ某姫又某媛ト記セリ、某皇子、某皇女ノ稱ハ始メテ垂仁紀景行紀ニ見エ、諸王ノ稱ハ推古紀ニ見エタリ、此ヨリ後ハ、天皇ノ御子ハ多クハ某皇子某皇女ト云ヒ、或ハ某王某女王トモ稱セリ、降リテ天武天皇ノ時ニ至リ、親王諸王ノ別アリ、文武天皇大寶元年ニ至リ、皇親ノ制度ヲ立テヽ、皇親ヲ親王ト諸王トニ別チ、皇兄弟姉妹及ビ皇子皇女（一世）ヲ親王トシ、皇孫（二世）皇曾孫（三世）皇玄孫（四世）マデヲ諸王トス、玄孫ノ子即チ五世王以下モ、王ト稱スルコトヲ得レドモ皇親ノ限ニアラズ、又諸王ハ親王ヲ娶リ若クハ諸臣ニ嫁スルコトヲ得レドモ、親王ハ諸臣ト婚スルコトヲ聽ルサヾル等ノ制アリ、古事記日本書紀ニハ、皇子ヲ稱スルニ某王ヲ以テシタレドモ、續日本紀以後ノ國史ニハ、皇孫以下諸王ニアラザレバ某王ト記サズ、從ヒテ之ヲ訓ズルニモ、親王ハミコ、諸王ハオホキミト差別セリ、

親王トハ、天皇ニ最親シキ王ト云フ義ニシテ、コレニ親王、內親王、入道親王、法親王等ノ別アリ、親王ノ稱ハモト隋唐ノ制ニ、皇帝ノ子ノ某國ノ王タル者ヲ親王ト云フニ依リシモノニテ、此稱早ク天武天皇ノ時ヨリ見エタレドモ、之ヲ名ノ下ニ連書スルハ、文武天皇四年ノ紀

ニ刑部親王ト記セルヲ始トス、蓋シ此時ニ定メラレタルモノナラン、此ヨリ後ハ何レモ某親王又ハ某内親王ト書シテ、名ノ下ニ連稱スルコトヽナレリ、

親王ノ座次ハ、常ニ諸王諸臣ノ上ニアリテ、諸王諸臣ハ、朝堂ニ在テハ座ヲ避ケ、途上ニ於テハ歩ヲ讓ラザルベカラズ、其他親王罪ヲ犯セバ、先ヅ其罪ヲ議センコトヲ奏請シテ裁可ヲ請ヒ、其薨ズル時ハ、天皇爲メニ朝ヲ廢シ、賻物ヲ賜ヒ、使ヲ遣シテ葬事ヲ監セシメ給フ等、待遇極メテ優渥ナリ、其位階ハ品ト稱シテ、諸王諸臣ニ分チ、一品ヨリ四品ニ至ル、品ニ叙セラレザルヲ無品親王ト云フ、蔭子ハ初メ從四位下ニ叙セラルヽヲ例トス、官ハ大臣、太宰帥、八省卿等ニ任ジ、或ハ彈正尹、三國大守等ニモ任ゼラル、是レ親王ハ人臣ノ下ニ立タザル制ナルヲ以テ、長官タルヲ得レドモ、次官タル可ラザル故ナリ、俸祿ニハ品田アリ、食封アリ、時服及ビ季祿アリ、所屬ノ職員ニハ、文學、家令、家扶、家從、書吏、及ビ帳内等アリ、中古以降ハ勅別當、家司、職事、藏人、侍者、御監等ヲ置キ、特ニ内舍人、大舍人等ヲ賜フモアリ、而シテ此等ノ俸祿職員ハ、其品位ニヨリ、又ハ官職ニヨリテ多寡均シカラズ、又男女ニヨリテ其數ヲ異ニシ、大抵内親王ハ男親王ノ半ヲ減ジテ賜フヲ定例トス、後世ニ至リテハ、封戸ノ制多ク行レズ、年官年爵ヲ以テ俸祿ニ代フルニ至レリ、

内親王トハ、天皇ノ皇姉妹皇女等ノ稱ニシテ、天武天皇ノ紀ニ始テ見エタレドモ、之ヲ名ノ下ニ連書スルハ、文武天皇大寶元年ノ紀ニ、泉内親王、大伯内親王ナドアルヲ以テ濫觴トス、内親王ノ臣下ニ降嫁セルコトハ、古クハ醍醐天皇ノ皇女勤子内親王、及ビ韶子内親王ノ、藤原師輔源清蔭等ニ降嫁セル、近クハ後陽成天皇ノ皇女清子貞子ノ兩内親王ノ、鷹司信尚及ビ二條康道ニ降嫁セル類是ナリ、後世攝關ニハ其例甚ダ多カレドモ、其他ニハ只德川氏ニ一二ノ例アルノミニテ、靈元天皇ノ皇女吉子内親王ノ七代將軍家繼ニ結納ノ儀アリ、仁孝

天皇ノ皇女親子内親王ノ十四代將軍家茂ニ降嫁アリシニ過ギズ、女王婚嫁ノ例ニ至リテハ、攝關將軍諸侯門跡等極メテ多ク、攝關ニテハ有栖川宮職仁親王ノ女孝宮ノ近衞經熙ニ嫁シタル、將軍ニテハ伏見宮貞清親王ノ女顯子ノ德川家綱ニ嫁シタル、諸侯ニテハ同親王ノ女安宮ノ德川光貞（紀伊）ニ嫁シ、有栖川宮織仁親王ノ女富宮ノ德川齊昭（水戸）ニ嫁シタル、門跡ニテハ有栖川宮幸仁親王ノ女淑宮ノ東本願寺光啓ニ嫁シタル如キ是ナリ、

入道親王ト法親王トハ、共ニ皇兄弟姉妹、皇子皇女、若クハ孫王ノ佛門ニ入レルモノニテ、親王ニシテ入道セルヲ入道親王ト稱シ、出家ノ後親王タルヲ法親王ト號ス、但シ孫王ノ法親王タルハ、異例ニシテ普通ノコトニアラズ、抑出家入道セシモノ、親王ニハ平城天皇ノ皇子眞如アリ、親王タラザル皇子ニハ、光仁天皇ノ皇子開成、花山天皇ノ皇子深觀覺源ノ如キアリ、然レドモ此等ハ未ダ入道親王、又法親王ト稱セズ、入道親王ニ始マリ、法親王ノ稱ハ、白河天皇ノ皇子覺行法親王ヲ始メトス、其他孫王ニシテ法親王タリシモノアリ、後鳥羽天皇ノ皇孫澄覺法親王、順德天皇ノ皇曾孫承鎭法親王ノ類是レナリ、而シテ此等ノ皇子皇孫ハ何レモ一旦天皇ノ猶子トナリテ、然ル後法親王タルヲ例トス、中世以後皇親ノ制度漸ク衰ヘ、武家ノ權勢盛ナルニ及ビテハ、諸王ハモトヨリ、皇子皇女等多クハ落飾シテ僧尼トナリ寺門ニ入リ、皇子ノ住職シ給フベキ寺ヲ宮門跡ト唱ヘ、皇女ノ寺ヲ比丘尼御所ト稱シ、何レモ十數箇寺アリシナリ、

皇子皇女ハ、モト生レナガラニシテ親王タリシヲ、淳仁天皇以後、親王宣下ト云フコト始マレリ、蓋シ淳仁天皇ハ、皇孫ヲ以テ入テ大統ヲ繼ギタマヒシユエ、自ラ斯ルコトノ起リシモノニテ、後ニハ皇子皇女モ、宣下ヲ待タザレバ親王タルコトヲ得給ハザルニ至レリ、即チ後

白河天皇ノ皇子高倉宮以仁王、後西院天皇ノ皇女貞宮ノ如キ、及ビ後世總テ比丘尼御所ト稱スルモノヽ如キハ、共ニ親王宣下ヲ得ズシテ諸王タルモノナリ、而シテ孫王トイヘドモ宣下ヲ蒙レバ、或ハ親王タルコトヲ得ルナリ、孫王ニシテ親王宣下ノ初例トモ見ルベキハ、小一條院ノ御子敦貞敦元ノ二王、及ビ儇子嘉子ノ二女王トス、然レドモ、二王ハ三條天皇ノ皇子ニ准ジテ親王ト爲シ、二女王ハ天皇ノ養女トシテ内親王ノ宣下アリシナリ、此親王宣下ノ制ハ、維新ノ後、廢セラレテ古制ニ復スルコトヽナレリ、

中世以降、皇親漸ク蕃衍シ府庫ヲ費スコト多キヲ以テ、悉ク封戸ノ制ニ從フコト能ハズ、是ニ於テ姓ヲ賜ヒ人臣ニ列スルコト起リ、桓武天皇延暦六年、諸勝岡成ノ二皇子ニ廣根朝臣長岡朝臣ノ姓ヲ賜フ、是ヲ皇子賜姓ノ始メトス、次テ嵯峨天皇ハ、ソノ八皇子ニ悉ク源朝臣ノ姓ヲ賜ヘリ、爾後皇子ノ人臣ニ列スルモノ世々絶エズ、然レドモ種々ノ事情ニヨリ賜姓ノ後再ビ親王宣下アリテ、皇親ニ列セシモノナシトセズ、醍醐天皇ノ皇子兼明親王ノ如キハコノ類ナリ、諸王ノ姓ヲ賜ヘルハ、聖武天皇天平八年ニ、敏達天皇ノ玄孫葛城王等ニ橘宿禰ノ姓ヲ賜ヒシ類ニテ、稱德天皇天平勝寶四年ニハ、皇孫智努王等ニ文室眞人ノ姓ヲ賜ヒ、爾後漸クソノ數アリ、降リテ仁明天皇ノ朝ニ至リ、明日香親王ガ、其所生ノ男女ニ姓ヲ賜ハンコトヲ懇請シタマヒテヨリ、孫王賜姓ノコト益多シ、後ニハ王號ヲ稱スルモノ大ニ減ジ、獨リ神祇伯ヲ以テ世職トセル白河家ノミハ、永ク王號ヲ繼續シタリ、コノ賜姓ノ事ト、前ニ述ベタル皇子皇女出家ノ事トニヨリテ、皇族ノ數ハ極メテ少クナリ、且世襲親王トテハ、古クハ常盤井宮、木寺宮、近クハ伏見、桂、有栖川ノ三親王ニ過ギザリシヲ、後又閑院宮ヲ立テラレテヨリ、四親王家トナレリ、但シ世襲親王家ニ嗣ナクシテ、皇子ノ入テ其家ニ嗣トナリタマフ時ハ、多クハ宮號ヲ改メ新ニ其家ヲ興スヲ例トス、タトヘバ八條宮ノ常盤井ト改メ、再

ビ京極ト改稱シ、更ニ改メテ桂宮ト稱セラレシガ如キ是ナリ、

世襲親王ハ、天皇ノ猶子タラザレバ親王タルヲ得ズ、而シテ世襲親王ノ子ノ宮門跡タルニハ、天皇ノ猶子アリ養子アリ、或ハ又初メ天皇ノ養子トナリ、更ニ將軍ノ猶子トナリテ、然ル後親王宣下アルモアリテ一樣ナラズ、猶子ハ嵯峨天皇ノ皇子源定ヲ以テ、淳和天皇ノ猶子ト爲シ給ヒシニ始マリタレドモ、是ハ普通ノ猶子ニアラズ、次デ宇多天皇ノ皇子雅明ハ、醍醐天皇ノ猶子トナリ、花山天皇ノ昭登清仁ノ二皇子ハ、冷泉天皇ノ猶子トナリテ、其ニ親王宣下ヲ蒙レリ、蓋シコノ時ノ制タル、天皇御出家後ノ所生ノ皇子ハ、親王タルヲ得ザリシ故ニ、斯ルコトモアリシナリ、其他臣下ノ猶子トナリ給ヒシハ、後奈良天皇ノ皇女聖秀尼王ノ、足利義晴ノ猶子トナリ、陽光院ノ皇子智仁親王ノ、豐臣秀吉ノ猶子トナリ給ヒシ類ニシテ、臣下ノ養子トナリ給ヒシハ、後陽成天皇ノ二皇子信尋、昭良ノ、近衞家及ビ一條家ノ養子トナリテ、共ニ其家ヲ相續シ給ヒシ類是ナリ、

諸王ノ稱ハ、既ニ大寶以前ニ見エテ、天武天皇二年ノ紀ニ、諸王四位栗隈王トアリ、又其十二年ノ紀ニ、諸王五位伊勢王トモ見エタレドモ、女王ノ稱ハ文武天皇三年ノ紀ニ、坂合部女王トアルヲ始メトス、大寶ノ制、五世王ハモト皇親ノ限ニアラザリシヲ、慶雲三年ニ至リ親ヲ絶ツニ忍ビズトテ、特ニ皇親ノ列ニ入ルコトヽナレリ、然ルニ桓武天皇延暦十七年ニ至リ、奸濫ノ徒宗室ヲ汚ス懼レアリトテ、再ビ古制ニ復シテ皇親ノ以外ト定メ、其名籍計帳等諸王ニ關スル一切ノ事ハ、總テ正親司ニテ管理シタリ、

諸王ノ待遇ハ、親王ニ比シテ大ニ差降アリト雖、マタ諸臣ト同ジカラズ、其辭訟アル時ハ、特ニ座席ヲ賜ヒ、皇親以外トイヘドモ永世不課戸トシテ、特ニ課役ヲ蠲除スル如キ、優遇他ニ異ナルモノアリ、位階ハモト天武天皇ノ時ハ、親王ト等シカリシモ、大寶ノ制ニテ諸臣ト同

一トナリ、一位ヨリ五位ニ至リ、蔭子ハ初メ從五位下、若クハ正六位上ニ敍セラルヽヲ例トス、官ハ大臣、納言、神祇伯、或ハ大學頭等ニ任ゼラル、是レマタ諸臣ノ下ニ立タシメズシテ多クハ長官ニ任ゼラルヽ例ナリ、其位記官職アルモノニハ位田食封ヲ賜ヒ、一般ノ男王女王ニハ、共ニ春秋二季ニ時服料、及ビ季祿ヲ賜フ、後諸王漸ク蕃衍スルニ及ビテハ、時服ヲ賜フベキ諸王ノ數ヲ限定シ、其死闕ヲ待チテ、順次之ヲ補フコトニ定メラレタリ、

凡親王ニシテ大罪アレバ、先ツ屬籍ヲ削ル、伊豫親王ノ幽セラレタル、不破內親王ノ流ニ處セラレタル時ノ如キ是ナリ、諸王ニシテ大罪アレバ先ツ王名ヲ除ク、鹽燒王ノ獄ニ下サレタル、長野女王ノ配流セラレタル時ノ如キ是ナリ、但シ親王諸王共ニ、多クハ姓ヲ賜テ庶人トナシ、然ル後處罰セラルヽヲ例トス、

稱號

〔日本書紀三神武〕諸皇子(ミコ)

〔類聚名義抄六王〕親王(ミコ)

〔運步色葉集四志〕親王（唐帝大王、竹園、宗固、天枝、帝葉、一品、二品、三品、四品、）

〔下學集上人倫〕親王(シンワウ)（指皇子、或帝之兄弟、叔父等也、）　竹園（親王名也唐）　天枝　帝葉（共指親王）

〔徒然草上〕竹のそのふの末葉まで、人間のたねならぬぞやんごとなき、

〔史記五十八梁世家〕於是孝王築東苑、方三百餘里、（西京雜記云、梁孝王苑中有落猨巖、棲龍岫、雁池、鶴洲、鳧島、諸宮觀相連、奇果佳樹、瑰禽異獸、靡不畢備、俗人言梁孝王竹園也、）大治宮室、爲複道自宮連屬於平臺三十餘里、（按、今城東二十里、有故臺趾、不甚高、俗云平臺、又一名修竹苑、○節略）

〔邦輔親王御誕生記〕永正十年三月廿一日、○中略抑從禁裏御大刀口範久爲御使、若宮誕生珍重之由被仰下、　廿七日、前內府大刀口一腰持參、竹園（○伏見宮貞敦親王）御對面、　廿八日、典藥頭親就朝臣、（大刀）大藏卿、（大刀、兩御所進之、）四辻大納言、（大刀）賴孝（大刀）等持參、各竹園御對面、新典侍殿來臨、一荷兩種被進、三條內府同前大刀持參、於產所有三獻云云、以後竹園御對面、

〔大鏡七太政大臣道長〕第一の女君は、一條院の御時に、長保元年十一月一日、御年十二にて女御にまゐらせ給ふ、○中略中宮と申し程に、うちつゞきてをとこみこ二人うみ奉り給へりし、

〔榮花物語一月宴〕基經のおとゞの御女の女御の御はらに、醍醐の宮達あまたおはしましける、

〔玉勝間四〕宮と申す稱

天皇の御胤を宮と申すこと、いにしへは皇子皇女にかぎれり、皇子の御子よりしては、宮と申すことなかりき、然るを中ごろよりして、皇子の御子をも申し、近くは親王の御すぢをば、世々すべて宮と申す事となれり、

〔榮花物語一月宴〕按察のみやす所、とてさぶらひ給をとこ三の宮、女三のみや、うみたてまつり給つ、又この九條殿の女御、をとこ四五のみやうまれ給ぬ、又宣耀殿女御、男六八のみやうまれ給へり、○中略麗景殿の女御、をとこ七の宮、女六の宮、生れ給にけり、式部卿の宮の女御、女四の宮ぞうみたてまつり給へりける、廣幡御息所、女五の宮うまれ給へり、按察の御息所、をとこ九の宮うまれ給などして、又九條殿の女御七九十の宮などあまたさしつゞきうまれさせ給て、○中略おほかたをとこ宮九人、女みや十人ぞおはしける、

〔玉勝間四〕女一宮女二宮など申唱へ

女一ノ宮女二ノ宮など申す女字、音によみならへれども、榮花物語などに、男一ノ宮男二ノ宮などある男は音によむべくもあらず、必をとこ一の宮などゝよむべければ、女もいにしへは、をんな一の宮、をんな二の宮などぞよみつらむ、ことわりをもて思ふにも、字音にはよむまじきつゞきなり、

〔源氏物語二十若菜〕もてわづらはせたまふ姫宮の御うしろみに、これをやなど、ひとしれずおぼしよりけり、

〔榮花物語九 石陰〕ちご宮の、いみじうわてさせ給ふほどのうつくしきにも、○下略

〔紫式部日記〕いと宮いだき奉らんと殿のたまふを、いとねたきことにし給ひて、わゝとさいなむ、

○按ズルニ、いと宮トハ最モ季ナル宮ヲ云フナルベシ、

〔榮花物語八 初花〕中宮の若宮○後一條今宮○後朱雀さしつゞきて、月日の如くにて光りいで給へるに、○下略

〔大鏡五 太政大臣兼家〕いまひとつの御はらのおほいぎみは、冷泉院の女御にて、三條院彈正宮、○尊卑爲親王帥宮○敦道親王の御母にて、三條院位につかせおはしましゝかば、贈皇后と申き、

〔源氏物語五 若紫〕兵部卿の宮は、いとわてになまめい給へれど、にほひやかになどもあらぬを、○下略

〔紫式部日記〕中務の宮○具平親王わたりの御事を御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼしてかたらはせ給ふ、

○按ズルニ、彈正宮ハ彈正尹ニ任ゼラレ、帥宮ハ太宰帥ニ任ゼラレ、兵部卿ノ宮、中務ノ宮、マタ各其官ニ任ゼラレタルナリ、

〔伊勢物語下〕昔心つきて色ごのみなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり、そこのとなりなりける宮ばらに、こともなき女どもの、○下略

○按ズルニ、宮ばらトハ、其母ノ皇族ナルヲ云フ、

〔源氏物語六 末摘花〕左衞門のめのとゝして、大貳のあまのさしつぎにおぼいたるがむすめ、大輔の命婦とて、うちにさぶらふ、わかむどほりの兵部の大輔なるがむすめなりけり、

〔落窪物語一〕わかんどほりハ、河海抄ニ王家無等倫ノ字音ニテ王孫ヲ云フト云ヒ、閑田耕筆ニ王家統天子の御系ことなりト云ヒ、和訓栞ニ和漢通リノ義也ト云ヒ、黒川春村ノ北史國語考ニ稚子ワコ御統ノ義ナルベシト云ヒ、古來諸說一樣ナラズト雖、其皇族ヲ云ヒシコト明ナリ、わかんどほ

皇子初見

りばらトハ、其母ノ皇族ナルヲ云ヘルナリ、

〔日本書紀六 垂仁〕二十三年冬十月壬申、天皇立於大殿前譽津別皇子侍之、

○按ズルニ、是レ皇子ヲ以テ、名ノ下ニ連ラヌタル始メナリ、

親王初見

〔日本書紀二十 天武〕八年十二月戊申、由嘉禾、親王諸王諸臣及百官人等給祿各有差、

〔續日本紀一 文武〕四年六月甲午、勅淨大參刑部親王、○中撰定律令、賜祿各有差、

○按ズルニ、同紀是ヨリ先キ、正月丁巳、授新田部皇子淨廣貳ト見エ、四月癸未、淨廣肆明日香皇女薨ト載タリ、然ルニ本文ノ如ク、六月ニ至リテ、刑部親王ト名ノ下ニ連稱シタリ、蓋シ親王ノ稱ハ、此間ニ於テ制定セラレシモノナランカ、

〔帝王編年記十 文武〕大寶元年今年以皇子號親王、

〔神皇正統記 文武〕皇子を親王といふこと、此御時にはじまる、

親王制度

〔令義解四 繼嗣〕凡皇兄弟皇子皆爲親王、女帝子亦同、謂據下文四世以上所生、何者案下條爲五世王不得娶親王故也　以外並爲諸王、自親王五世雖得王名不在皇親之限、

〔六典二 吏部〕皇兄弟皇子皆封國、謂之親王、

○按ズルニ、女帝ノ子ヲ親王ト爲ストハ、内親王ノ諸王ノ妻トナリテ御子ヲ生ミ給ヒ、夫王歿シテ後ニ即位シ給ヒシ時ノ事ニテ、其御子ハ親王タル事ヲ得ルヲ云フナリ、日本書紀齊明紀廣額天皇○舒明而生二男一女、○中略一曰明年正月后即天皇位トアリ、漢皇子ハ即チ此例ナリ、

〔令義解二 戸〕凡戸主皆以家長爲之、戸内有課口者爲課戸、無課口者爲不課戸、不課謂皇親、○下略

〔令義解四 繼嗣〕凡王娶親王臣娶五世王者聽、唯五世王不得娶親王、

○按ズルニ、五世王ニシテ親王ヲ娶レバ、其子ハ二世王トナルガ故ニ此制アルナラン、

【延喜式十二中務】凡諸王以上、娶臣家女爲妻者、不得准夫品位、其内親王及女王、亦不得准夫品位、但五世王者得准夫位、

【令義解一職員】正親司

正一人、掌皇親名籍（謂二世以下四世以上名籍、案戸令皇親事、佑一人、大令史一人、少令史一人、使部十人、直丁一人、

【延喜式十宮内】凡親王諸王名籍者、皆於正親司案記、

【類聚符宣抄六】

皇親籍三卷

勘出帳一卷

並延曆八年作

右外記曹司無有件書、而今四部之書在正親司、望請取彼一部以爲官料、

弘仁十二年十一月四日　　參議左大辨直世王奉

右大臣宣、依請、

【延喜式三十宮内】凡其有品内親王、若有請事者申省、省受申官、即朝參及勅召者申縫殿寮、又内侍知之、

【官職難儀】さていま天子の皇子にてもなくて、二代三代の御末にて、親王宣下侍るは、一向道理にも叶はぬ事也、されどもいづれも天子御猶子の號にて宣下也、さからざるはなきなり、

【類例略要集】親王家　御家督御相續之節ニ、御所之御養子ニ被成、仍而御代々稱親王、若無其儀稱何宮、又ハ何王なり、

【皇胤紹運錄】

亀山院　　恒明親王一品式部卿、常磐井宮、

世襲親王

全仁親王三品中務卿、太宰帥、號常磐井、　　滿仁親王無品出家

直明王○後改直仁

恒直親王太宰帥、後柏原院御猶子、

全明親王無品彈正尹、後崇光院御猶子、

【皇胤紹運錄】

後二條院

康仁親王木寺、中務卿、春宮、廢春宮并親王號、　　邦良親王早世、木寺宮、文保二、三、九元服立太子、正中二、三、廿薨、

世平王早世　　邦恒王早世

靜覺法親王二品御室、後花園院御猶子、　　邦康親王二品中務卿

【康富記】康正元年十月廿八日、是日木寺宮有御元服、今年正月有親王宣下、爲仙洞法皇○後小松御養子、令蒙親王宣旨給、後二條院御末　是日即御叙品任官事被宣下、非陣儀消息宣下也、是又文安三年三月式部卿親王宣下御例也、令叙三品給、又令任中務卿給、

【近代帝王系圖】伏見宮

崇光院

榮仁親王（號二有栖川一）

應永五年五月廿六日出家（四十八歲）

貞成親王（號二伏見一、後小松院御猶子、

應永卅二年四月十六日親王宣下（廿歲）　文安四年十一月廿七日尊號太上天皇（七十七歲）　號二後崇光院一

貞常親王（號二伏見殿一、貞成親王二男、後花園院御弟、

文安元年二月廿日親王宣下（廿歲）

邦高親王（元邦康、後土御門院御猶子、

文明六年四月廿六日親王宣下

貞敦親王（後柏原院御猶子

永正元年二月廿五日親王宣下（十六歲）

邦輔親王（後奈良院御猶子

享祿四年四月廿四日親王宣下

貞康親王

永祿六年十二月廿一日親王宣下

邦房親王（貞康親王男、實弟、元邦良、

天正三年二月廿一日親王宣下

貞清親王（後陽成院御猶子

慶長十九年正月十九日叙二品一

邦尚親王（依二所勞一未二元服一

承應二年十一月廿九日薨（四十一歲）

貞致親王（邦道親王跡相續、後水尾院御猶子、

萬治三年十月十七日親王宣下

邦道親王（利尚親王跡相續

慶安二年十一月廿六日親王宣下

邦永親王（靈元院御猶子

天和三年三月十二日爲二御猶子一　元祿八年十二月十四日親王宣下

貞建親王（東山院御猶子

寶永六年五月廿一日親王宣下

邦忠親王　櫻町院御猶子

寛保二年三月十九日爲御猶子　同三年十月廿五日親王宣下

貞行親王　桃園院皇子

寶暦十年六月十八日御相續　同十三年十月八日親王宣下

邦賴親王　櫻町院御猶子、初勤修寺寛寶法親王、

延享二年十二月一日御猶子、勤修寺相續、同三年五月八日親王宣下　安永三年十二月廿五日還俗、伏見家相續、同月廿六日親王宣下

貞敬親王　後桃園院御猶子

寛政九年閏七月十日御猶子　八月五日親王宣下

邦家親王　光格天皇御猶子

文化十四年正月十一日爲御猶子　二月十四日親王宣下

貞敎親王　仁孝天皇御猶子

弘化四年五月三日爲御猶子　十二歳　嘉永元年三月廿三日親王宣下　○節略

○按ズルニ、當代ノ天皇ニ、未ダ皇后女御等ノ入内ナキ時、又ハ入内アリトモ未ダ皇子ノ御誕生ナキ間ハ、猶子養子ヲセサセ給ハザル例ニテ、伏見宮貞敬親王ハ、當時光格天皇ノ中宮ニ未ダ皇子オハセザリシ故ニ、先帝即チ後桃園天皇ノ猶子トナリ、貞敎親王ハ、當時孝明天皇ノ女

御末ダ入内ナカリシカバ、先帝即チ仁孝天皇ノ猶子トナラセ給ヒシナリ、

〔後深心關白記〕應安元年正月廿一日、今夜上皇（光嚴）○崇一宮立親王宣下云云、及天明之程、三條大納言來相謁語云、今夜宣下上卿云々、御名字榮仁、公卿亞相權中納言實綱、平宰相等參入、依別勅各立親族拜云云、

〔貞常親王記〕康正二年十月□日、從内御使源黄門來、故院被用異紋以下之事、其儘永世當家可用、且永世伏見殿御所ト可稱叙慮之旨傳申、

〔近代帝王系圖〕京極宮

正親町院

陽光院

智仁親王　號二八條一、關白秀吉公猶子、童名古佐麻呂、

天正十九年正月十六日親王宣下　十二歳

智忠親王　元忠仁、號二八條一、

寛永三年十二月四日親王宣下

穩仁親王　後水尾院皇子

寛永廿年四月廿九日生、號二幸宮一、爲二智忠親王養子一、明曆元年十月十四日親王宣下、

長仁親王（後西院皇子）

寛文七年十一月穩仁親王跡相續（十二歳）　同九年二月廿五日親王宣下

尚仁親王（後西院皇子）

延寶三年八月十二日長仁親王跡相續　貞享元年十一月廿七日親王宣下（十四歳）

作宮（始正宮、號二常磐井一、靈元院皇子）

元祿二年十月十五日尚仁親王跡相續、稱號改二常磐井一、

文仁親王（號二京極一、靈元院皇子、）

貞享五年八月六日有栖川幸仁親王爲二養子一、後被レ召二返仙洞一、　元祿九年九月四日賜二常磐井宮遺跡一相續、號二京極宮一、　同十年五月十一日親王宣下

家仁親王（東山院御猶子）

寶永五年十二月爲二御猶子一　同六年四月七日親王宣下

公仁親王（櫻町院御猶子）

寛保二年三月十六日爲二御猶子一　延享二年二月一日親王宣下

盛仁親王（光格天皇皇子　號レ桂）

文化七年九月十八日御相續、稱號依二思召一自今被レ稱二桂宮一、　十二月十八日御移徙　同八年三月十六日親王宣下

淑子內親王（仁孝天皇皇女○節略）

○按ズルニ、淑子內親王ハ、天保十三年九月十五日親王宣下、文久二年十二月廿三日內親王ニテ相續セラレタリ、

〔近代帝王系圖〕有栖川宮

後陽成院

節仁親王（仁孝天皇皇子）

天保六年七月廿三日御相續御治定　同七年三月四日依二御違例一移二于桂家一　同月五日親王宣下

好仁親王（號二高松一）

慶長十七年十二月廿六日親王宣下、二品彈正尹、

良仁親王（號二花町一、又號二桃園一、後水尾院皇子、）

正保四年九月十五日爲二親王一　十一月廿七日相續改二高松一稱二花町一、即移二彼亭一、　承應三年十一月廿八日踐祚、號二後西院一、

幸仁親王（號二有栖川一）

年三月十六日親王宣下

寛文七年七月六日相續　同九年八月廿九日親王宣下　同十二年六月八日改二花町一稱一
有栖川、

正仁親王 東山院御猶子
寶永四年爲二御猶子一　同五年九月廿九日親王宣下

職仁親王 靈元院皇子
享保元年十月十一日正仁親王跡相續　同六年十二月三日移二于新第一　同十一年十一月廿八日親王宣下

音仁親王 櫻町院御猶子
寛保二年三月十六日爲二御猶子一　同三年九月四日親王宣下

織仁親王 桃園院御猶子
寶曆十二年十二月七日爲二御猶子一　同十三年十月十六日親王宣下

韶仁親王 光格天皇御猶子
文化四年十二月十三日爲二御猶子一歲廿四　同五年二月廿一日名字勘進、三月四日親王宣下

幟仁親王 光格天皇御猶子

文政五年十一月十五日爲二御猶子一歲十一　同六年九月廿三日親王宣下歲十二

熾仁親王 仁孝天皇御猶子
嘉永元年十月十八日爲二御猶子一歲十四　同二年二月十六日親王宣下歲十五　○節略

〔近代帝王系圖〕閑院宮

東山院

直仁親王
寶永七年八月十二日爲二親王家一　享保三年正月十二日稱二閑院一　同月二十三日親王宣下

典仁親王 櫻町院御猶子
寛保三年九月四日親王宣下

美仁親王 桃園院御猶子
寶曆十三年十月十六日親王宣下

孝仁親王 光格天皇御猶子
文化五年三月四日親王宣下

愛仁親王 光格天皇御猶子

文政十一年八月廿三日親王宣下○略節

〔議奏日次案〕寶永七年八月十一日甲辰、東山院若宮、秀宮親王家可ㇾ有ㇾ御取立之由被ㇾ仰出之、享保三年正月十二日辛酉、以ㇾ秀宮可ㇾ被ㇾ稱ㇾ閑院之由、〔内々法皇〔靈元〕思召被ㇾ申進云云〕今㆑楠司前大納言被ㇾ仰ㇾ於宮方、廿三日壬申、辰刻親王〔直仁〕宣下陣儀也、上卿藤大納言、〔永福〕辨兼榮、勅別當源大納言、〔惟通〕奉行職事重孝朝臣、爲ㇾ御祝儀御大刀御馬代〔黄金十兩〕鯛二尾昆布一箱〔荷〕御樽一荷被ㇾ遣之、御使園中納言、二月十一日庚寅、直仁親王今日元服、被ㇾ任ㇾ彈正尹ㇾ參入、〔自ㇾ長橋車ㇾ寄ㇾ方ㇾ被ㇾ參〕於ㇾ常御所ㇾ被ㇾ拜ㇾ龍顏、申次右大將〔公全〕賜ㇾ二獻、〔女中之〕爲ㇾ御祝儀御大刀一腰、御馬〔代黄金二十兩〕一匹、紗綾十卷、〔紅白〕昆布一箱、鰯一箱、生鯛一折、御樽一荷等被ㇾ遣之、御使兼親、〔光臺一覽ニ〕親王家と申は、伏見、京極、有栖川、閑院の宮也、已前は三軒にて有しが、中御門院の御父帝東山院宮方多くいまししける中に、新大典侍の御腹とて、櫛笥前故内大臣隆賀公之御女之腹に御兩宮、中御門院は御せうと、今の閑院直仁親王は秀宮とて御弟也、外に女院の御本腹に、一ノ宮貴（タカ）の宮樣とて、姫宮一方居坐かりける、寶永六己丑年極月十七日東山院崩御の砌も、貴の宮樣と秀の宮樣とは、御部屋住にて御座被ㇾ成けるを從ㇾ關東ㇾ被ㇾ及ㇾ聞食ㇾ、御諸司代松平紀伊守信庸江御書到來せり、其寫し傳奏衆へ參り拜見覺ㇾ之居申候、御文言には、

一秀宮之御事、東山院御病中、被ㇾ遊ㇾ御苦勞候段被ㇾ爲ㇾ聞召ㇾ候に付、今般親王家一家新規に被ㇾ成ㇾ御取立、家領千石被ㇾ遣之候、是者格別之思召依ㇾ有之ㇾ、後々之例には難ㇾ相成ㇾ思召候御事

右之趣、兩傳奏衆迄其方差越、急度可ㇾ申達ㇾ旨御諚之御事候、恐々謹言、

月日　　御老中連名印如ㇾ前

松平紀伊守殿　　土屋相模守名乘書判

如ㇾ斯趣にて、秀宮樣には下立賣御門之内下ル處へ、東山院之御舊殿を被ㇾ用、從ㇾ江戸ㇾ造作被ㇾ成進、千石に而親王家一軒、新規之御取立被進、今之閑院樣是也、是も中御門院御幼年之砌は、隨分御懦弱に見へ給ひける故其事關東へも洩聞へ、若もの事欠にと思召入ㇾ有之ㇾ而、俗親王にて被ㇾ差置也、夫故格別の思召入依ㇾ有之ㇾ被ㇾ仰出けると、去御秘談承りし所也、然共末代俗親王四軒の列に立給ふ事、結構成御事也、關東の御書出しなかりせば、何地かの門跡方の御附弟となり給ひ、沙門の物うき御境界たるべきに、文昭院樣〔徳川家宣〕天下を玄ろし召れし時、禁庭御裁判之始なりし故、國王へ對し、仙洞樣へ之御手前何角にかく被ㇾ仰出ㇾ、ける物ならんと、無沙法に乍ㇾ恐奉ㇾ感歎ㇾ御事ぞかし、○節略

〔折たく柴の記 中〕廿七日〔寛永六年正月〕に參し時に、また封事を奉る、○略中此封事御覽の後仰下されし事ふたゝび三たびのゝち、申す所そのことわりあり、○略中やがて今の法皇〔東山〕の皇子秀の宮とか申す御事、親王宣下あるべき由を申させ給ひたりけり、

○按ズルニ、伏見、有栖川、桂、閑院ノ四家ヲ世襲ノ親王家ト爲シ、之ヲ四親王家ト稱ス、

〔寶暦卿記〕文久三年二月一日、從ㇾ正親町ㇾ同文來、續左、〔廿九日附〕

方今國事扶助精勤ニ付、非常以ㇾ格別ㇾ思召、還俗御內意被ㇾ仰出候旨、加勢長谷三位被ㇾ申渡ㇾ候、○略下

〔議奏言渡〕文久三年二月十七日、青蓮院宮、自今被ㇾ稱ㇾ中川宮ㇾ候旨、阿野殿御奉被ㇾ仰出ㇾ候旨申達、八月廿七日、頭左中辨、彈正尹宮、任官消息宣下相濟旨言上、〔御名字朝彦之旨被ㇾ屆〕以ㇾ兒申上、彈正尹宮、今日元服任官宣下、目出思召候、御大刀一腰、御馬一匹、〔代黄金十兩〕綿十把、二種一荷等賜之旨、目錄以ㇾ越後被ㇾ出、愛宕侍從申渡、尹宮參上、被ㇾ伺ㇾ天氣ㇾ、今日元服任官宣下、名字宸翰拜領、以ㇾ御使ㇾ御品々拜領御禮被ㇾ申上ㇾ、賜ㇾ祝酒ㇾ後時於ㇾ御前ㇾ御掛緒拜領御禮等、各以ㇾ表使ㇾ申入候、十二月九日、尹宮御參、今日隨身兵仗勅授帶劒宣下御禮被ㇾ申上ㇾ、以ㇾ表使ㇾ申入ㇾ、先是消息宣下相濟候旨頭辨言上、以ㇾ藤丸ㇾ申上、元治元年十

月十日中川宮自今被改稱賀陽宮候旨被仰出、三條殿御奉申達、〇略節

○按ズルニ、賀陽宮ハ、明治維新後ニ久邇宮ト改稱アリ、

〔議奏言渡〕元治元年正月九日、濟範勅免之旨、殿下〇鷹司輔熙傳宣、御本役御承、

元勸修寺濟範、多年謹愼、且今度一橋中納言已下、段々建言之次第モ有之、誠難被默止之間、以格別之思召御咎被勅免、伏見家江復系還俗被仰出候事、

勅免御世話卿代、廣橋殿御申渡、復系還俗等武傳被申渡候、明十日右御請、廣橋殿武傳申上、以女房申上候、十七日、元勸修寺濟範、自今被稱山階宮候旨、關白殿傳宣、六條殿御奉、廿七日、山階宮親王消息宣下相濟旨、頭左中辨言上、以藤丸申上候、山階宮當今御猶子、御願之通被仰出候旨、以大御乳人御申出、廿八日、山階宮御參被伺天氣、今日元服任官常陸太守宣下、且昨日御猶子親王宣下、御冠拜領、勅使賜物等御禮被申上、賜祝酒、後時於常御殿御對面、賜二獻女房沙汰訖、令退給、〇略節

〔禁裏御所領〕元和三年禁裏御所領幷公家衆御知行附〇略中

一千石　有栖川中務卿職仁親王

一三千六石六斗八升　八條宮式部卿親王

一千壹石　閑院彈正尹直仁親王

一千石

〔議奏言渡〕元治元年五月六日、〇略中武傳被附、

中川宮御家領　井伊掃部頭領分上知、近江國神崎郡位田村、市田村、河曲村、梁瀨村之內、右四箇村ニ而千五百石被相渡候、尤地所割方、幷鄉村引渡等之儀者、追而可相達旨、年寄共申聞候、此段右家江御達被成候樣にと存候事、

五月

山階宮御方江　御家料千石被進之候

右之通被申出候間、御三卿江御達可申旨、年寄共申聞候、右宮江被成御達候樣にと存候以上、

親王宣下式

五月六日

武傳三卿宛

以上以越後申入、披露濟被返書候、

〔新儀式五臨時下〕皇子給親王號事

皇子可給親王號、大臣奉勅宣下所司、此日外戚氏公卿、於仁壽殿東庭、令奏慶賀之由、舞踏退出、

〔江家次第十七〕當代親王宣旨事

藏人頭奉仰、仰上臈博士令勘申御名字、兼日示氣色、當日仰之、

博士進勘文、江家不注年月日

三以下並注本文幷音訓、有裏紙懸紙、用檀紙、

勘申御名字事

某書某反一也

同上某反一也

右勘申如件

年月日官姓名

頭以文刺奏之

於定被用嘉名

藏人頭書下　宣旨無裏紙懸紙

少員時或有口宣例、然而猶以書爲吉歟、長曆小野大臣僞無先例不下、範國宣旨書於大辨、

治曆四年、院一人被下親王宣旨內親王別紙、猶書之、男女親王可爲別紙由內府〇源師房被申、承曆實政爲頭、

以博士勘文下之、不可然云云、往年注御年、近代不然、可爲今上親王、近代不注今上字、

松平越中守

年月日書部

寛弘康和、以口宣仰下之於頭左中辨、大臣以下著仗座（道方依二大辨不參一也）藏人頭下二宣旨於大臣一（多用二大臣一）大臣用二大辨下之一（可レ結、拳憲不レ結、不レ可レ然、治暦レ結、大辨出二腋床子下一）史（用二大夫史一）後日成二官符一（右狀必載二今上親王字一）次公卿歷階下レ參二於弓場殿一、依二執柄告一可レ參歟、（以二藏人一承二仰旨一）承暦內大臣（○藤原信長）不レ列而退出、頗不レ叶二時務一、

次執柄加列上、（自二殿上一出）列立、（但外家公卿二人、殿上人二人列立、尤可レ恠之、）

以二藏人頭一被レ奏（其詞、某人人云云、）

人數多時、右（乃大イ）萬不千君等候（不止可レ申歟、皆申爲レ耳、）返來持レ笏頗向御所方願曰、聞食ツ、不レ受二拜之前退、（但下自二殿上一於二宇津保柱邊一可レ取レ笏歟、）公卿拜舞了、陣此間被レ仰二勅別當一（納言）於大臣、大臣又如レ始仰下之、或於二弓場殿一被レ仰二下之一、

別當一人留二弓場殿一拜

次公卿相引參二入本宮一

勅別當仰二下家司職事一（付二藏人等一）

家司（四位三人以上）

寛弘廿人、承暦康和三人、

職事（四位五位三人以上）

承暦康和三人

侍者二人、藏人二人、

予依レ擇申故敦文親王名、辭退畢

今宮（正家朝臣、擇申）未得二解由一

宗仁　尊明　後又慶仁

今上（實綱朝臣擇申）

善仁　守成

（明衡朝臣撰申、後三條院東宮、）

貞仁　有成　博時

貞尊不レ宜由公卿等申之（能長資綱等）

陽成院　華山院　三條院云レ云（並貞字）

故院仰曰、還可レ爲レ例、明衡曰、帝王三人被レ用二貞字一、可レ謂二無恥辱一、

後三條院　後冷泉院（義忠朝臣擇申）

親仁　尊仁　能成

後朱雀院　後一條院（匡房朝臣擇申）

敦成　敦良　敦人

三條院

一一條院（齊光卿擇申）

一華山院（同上、或說輔正云々、）

一圓融院（維時擇申）

一冷泉院（在衡卿擇申）

維時擇二申故慶賴親王名一、仍在衡卿擇申由見二九條記一、

一村上

一朱雀院（等可レ尋之）

寛平

權大納言藤原朝臣公實

右中辨源朝臣重資傳宣、右大臣宣、奉勅件人宜爲今上親王別當也、

康和五年二月九日　　左大史紀盛言　奉

奉字可レ忌由見二延木記一、臣下無レ擇、

臨字可レ忌由見二天曆記一、渉二哀臨義一、

太政官符、中務、式部、民部、大藏、宮内省、

無品崇尊親王、歳二、

右今上親王所定如レ件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

已上召仰、

參議左大辨從四位上兼行讃岐權守紀朝臣

延喜四年二月十日　　左大史正六位上御船宿禰有方

去年十一月四日丙寅誕生、于レ今七十箇日

太政官符中務省式部、民部、大藏、宮内等同、

無品宗仁親王

右今上親王所定如レ件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

修理左宮城使正四位上行左中辨兼越前權守源朝臣重資

康和五年六月九日　　正六位上行左大史紀朝臣盛言

〔續日本紀二十一〕天平寶字三年六月庚戌、帝御二內安殿一、喚二諸司主典已上一詔曰、略中兄弟姉妹悉稱二親王一止、宣、天皇御命衆聞食宣、略中從三位船王、池田王並授二三品一、略中從四位下室王、飛鳥田王並四品、

○按ズルニ、是即チ親王宣下ノ始ナルベシ、

〔續日本紀三十一〕寶龜元年十月己亚朔、卽二天皇位一於大極殿一、十一月甲子、詔曰、略中兄弟姉妹諸王、子等、悉作二親王一、氏冠位上給治給、略中天皇御命衆聞食宣、參內、立親王定也、職事定房奉行、略中親王定上

〔勘仲記〕永仁元年十二月十日辛卯、入夜著束帶一、用二毛車一、參內、立親王定也、職事定房奉行、略中親王定上卿權大納言遲參之間、所レ被二相待一也、小時參入之間、諸卿著二仗座一、權大納言、中御門中納言、衣笠中納言、下官、堀川宰相等也、小時移著二端座一、令二敷軾一、次職事定房下二御名字一、憙子、（龜山皇女、高檀紙一枚書之、）爲二親王一ヨ、職事退、次上卿召レ辨、右少仲親參進、被二下一御名字一、辨結申退、次職事仰二勅別當一、以二權中納言藤原朝臣一爲二憙子內親王別當一、召二辨仰之一、次上卿口口起座、進二弓場一有二親族拜一、申次定房、舞踏如レ例、一揖之後退出、中御門中納言一人立留、奏二勅別當慶申一、次同前中御門黃門一人可レ參二本所一、禪林寺殿云々

〔輔世卿記〕天保六年九月十八日、今日巳刻、儲君○孝明立親王宣下也、奉行頭右中辨正房朝臣、略中

立親王宣下

公卿

右大臣○九條尚忠　權大納言○醍醐弘　新源大納言○鄕

宮內卿○梅小路定肖　左兵衞督○飛鳥井雅久

辨

光暉朝臣○日野西辨

勅別當

新源大納言

家司

能通朝臣○六角右中將　公前朝臣○姉小路侍從　延房朝臣○池尻右兵衞權佐

言成朝臣○山科內藏頭　定德○梅小路讃岐權介

源中納言○廣幡基豐　右衞門督○藤谷爲脩

職事

寶豐○風早越前權介　國典○芝山宮內大輔

藏人

大江俊迪○北小路差次藏人　大江俊常○北小路藏人

侍者

小槻輔世○壬生新藏人

御監

平清德○粟津左衛門少尉以下地下官人略之、

立親王宣下次第

先諸卿著仗座

次上卿移著端座

次上卿令官人敷軾

次職事著軾下御名字

次上卿披見結申、職事仰可爲今上親王之由、

次上卿令官人召辨賜御名字（大辨候者召之大辨給之）仰可爲親王可作官符之由、辨退去、仰史令成官符宣旨、

次職事著軾、仰以某人可爲今上親王勅別當之由、

次上卿召辨仰其人今上親王勅別當事、（某人在座者上卿示之而後更召辨仰之、）

次上卿令官人撤軾、

次諸卿起座

次親族拜（近代不論親疎各列立）上卿以下進弓場拜舞（以頭藏人爲申次）終退出、勅別當殘留、更令職事奏別當慶、拜舞

退出、

次上卿引率諸卿參本宮、著對代座（奥端相分）勅別當留立中門外、申慶再拜、（以可補家司若職事之人爲申次）訖加著對代座（端）

次勅別當依召參進寢殿簾下、給家司職事藏人侍者御監等夾名（書折紙二通、女房從簾下出之、）復座、

次勅別當召家司上臈一人、賜家司御監等折紙、

次召職事上臈一人、賜職事藏人侍者等折紙、

次家司以下列立中門外、申慶賀、申次雖列申事由、加立列各二拜、

次上卿以下退出、諸卿退出、勅別當留座、

次職事覽家司以下之令旨（入筥）置座、職事退入、

次侍者持參硯、置座退入、

次勅別當加署

次侍者撤硯

次勅別當召家司、賜家司御監等令旨、取之退入、

次勅別當召職事、賜職事藏人侍者等令旨（作入筥）賜之（入筥）取之退入、

次勅別當退出、

〔新儀式五臨時下〕親王初謁見事

重親王初謁見、一同正月朝覲之儀、但不賜酒肴、或乳母給祿、

〔日本書紀三十持統〕四年七月甲申、詔曰、凡朝堂座上見親王者如常、大臣與王起立堂前、二王以上下座而跪、

〔令義解六儀制〕凡在廳座上見親王及太政大臣下座、左右大臣當司長官即動座、（謂左右大臣見親王及太政大臣即動座、其太

政大臣見二親王一、及親王見二太政大臣一並不レ動也、以外不レ動、

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁十年六月庚戌制、諸司於二朝堂一見二親王一、太政大臣者、皆磬折而立、若見二左右大臣一、及左右大臣見二親王一及太政大臣者、並起座、即就座及出門訖、乃以次就レ座、

〔延喜式十式部〕凡在二朝堂一座、見二親王及太政大臣一者、皆磬折而立、若見二左右大臣一、及左右大臣見二親王及太政大臣者一並起座、即就座及出門訖、乃以次就レ座、

〔延喜式十式部〕凡親王任省卿臺尹、就二曹司廳一者、五位已上並立二床前一、六位已下磬折而立、就レ座訖乃以次就レ座、其雜公文令二錄疏取一署、

〔延喜式四十弾正〕凡親王、太政大臣、左右大臣入二朝堂一者、諸司皆起座、親王、太政大臣者、磬折而立、座定乃以次復レ座、退出亦同、

〔延喜式四十弾正〕凡親王大臣及一位二位、於二五位以上一答拜、於二六位以下一不レ須、

〔禁中方御條目十七箇條〕一、三公之下親王、其故者右大臣不比等、著舍人親王之上、殊舍人親王、仲野親王、贈太政大臣穗積親王准二右大臣一、是皆一品親王以後、被レ贈二大臣一時者、先三公之下可レ爲二次座一、勿論歟、親王之次前官之大臣、三公在レ官之內者、雖レ爲二親王之上一、辭表之後者、可レ爲二次座一、

○按ズルニ、公卿補任ニ刑部親王、穗積親王、知太政官事タル間ハ、三公ノ下ニ列ス、サレドモ續日本紀ヲ見ルニ、親王ハ皆三公ノ上ニ著クト云ヘルハ誤ナリ、補任ニ養老四年右大臣藤原不比等、八月三日薨 知太政官事舍人親王八月四日任 ト見エタレバ、不比等ノ薨後ニ任ゼラレシモノナリ、二品仲野親王ハ宇多天皇ノ御外祖ナリ、一品太政大臣ヲ贈ラレシナリ、二品穗積親王ノ右大臣ニ准ゼラレシハ、季祿ヲ右大臣ニ准ジテ賜ヒシナリ、要スルニ、此條目ハ深ク典故ヲ考究セザルナリ、

〔令義解六儀制〕凡在路相遇者、三位以下遇二親王一、皆下馬、〔謂二稱親王一者、有品无品並同、若无品親王遇二有品親王一者不レ可レ下レ馬、何者上條致敬禮止爲二諸王以下一、不レ及二親王一、此條亦有品无品別故也、〕以外准二拜禮一、其不レ下者、皆斂馬側立、〔謂二位以上遇二親王一、三位遇二一位一之類、駐レ馬按二立於道側一也、〕○下略

〔延喜式四十弾正〕凡三位已下於レ路遇二親王一者、下レ馬而立、但大臣斂レ馬側立、

〔政事要略八十四〕弾例曰、凡相遇二親王一者、三位下レ馬而立、四位已下跪座、但大臣斂レ馬側立、又條曰、三位於二宮中一遇二親王一者跪座、但大臣不レ得二跪座一者、

〔西宮記臨時八〕致敬禮

車禮〔雖レ不レ載レ式、〔弾正式〕以二世俗之所一レ爲記耳、〕親王大臣共相遇者、各留二車前駈下一、納言逢二親王一者抑レ車、大臣前駈下、

〔拾芥抄中末車禮〔雖レ不レ載レ式、〔弾正式〕以二儀式一之說注レ之而已、〕

親王大臣共相逢者、留二車前駈下一、納言逢二親王一者抑レ車、大臣前駈下、參議逢二親王一者放レ牛立レ榻、

〔弘安禮節〕路頭禮事

一遇二親王一禮　大臣共抑レ車、僮僕互下レ馬、大臣前駈以下列二居車傍一、親王前駈歩行過レ之、親王車過畢、大臣僮僕騎レ馬進行、若親王車自後來者、大臣車直對二親王車一立レ之、自餘同輩准レ之、

〔准后親王座次事〕飛鳥井雅康正筆ノ寫

立レ車事

二品親王御車ハ、殿下ヨリ上ニ可レ立レ之、無品親王ノナラバ、殿下ヨリ下ニ立レ之、太政大臣ヨリハ上也、但於二陽明門一者、雖二二品親王御車一、殿下ノ御車ヨリ下ニ立、

〔途中行逢會釋〕文化十四丑年五月十八日大目付井上美濃守樣江差出候處御附札濟

一御攝家方、親王方、御門跡方、御行逢之節ハ、乘輿ノ儘片寄扣罷在、見計致二通行一候哉、

但御旅中ニて、右之御方之御泊驛ハ、可二相成一丈ケ止宿不レ致心得ニ罷在候、然處跡方右之御方之御通行ニて、自然川留等有レ之、先之驛迄御越不レ被レ成、萬一同樣御泊ニ相成候節ハ、御先方御差支不二相成一候之樣本陣明ケ、同驛ニて脇本陣、或ハ寺院等江止宿仕罷在候儀ハ不レ苦候哉、

五月十八日

御附札

書面之通御心得不苦候事

一右御同人樣御用人西金大夫方を以演說

攝家親王方之御同宿之儀、書面之通御心得不苦候得共、於彼方同驛止宿ハ殊之外六ヶ敷被申候由、美濃守及承候儀も有之候、心得之儀ハ、書面之通ニて宜候得共、右之義ハ御勘辨可有之義ト存候、此段御心得迄申候樣被申聞候旨被申候、○略節

〔途中行逢會釋〕享和元酉年二月四日、遠藤但馬守樣ゟ高家戸田土佐守樣江御問合

堂上之衆、於途中行逢候節會釋之儀、別に禮節も無之事に候間、旅中にても當地之通相心得、攝家親王門跡方は、乘輿之儘片寄扣居見計通行可致旨、伊豆守殿御書取を以被仰渡候、依之爲心得書付差出、同年二月十六日伊豆守殿江伺置候處、同廿八日御差圖、馬上勤之嫡子、途中にて堂上衆行逢候節之心得も御書取を以、左之通御差圖有之、

乘輿にても馬上にても、同樣之儀と差別無之事、○略節

〔五街道取締〕御朱印其外行逢候節之心得又は及不敬候もの之事

攝家親王門跡方行逢候節、乘輿之儘片寄罷在候は主人之義にて、陪臣之分は、乘輿御屆相濟行列之內に候共、駕籠之儘罷在候儀には有之間敷、下乘いたし可申事に候、尤下に時宜いたし候分には無之候得共、立居候筋には有之間敷候、○略節

〔帝王編年記十文武〕大寶元年、今年以皇子號親王、又被止親王乘馬出入宮門、

〔新儀式五臨時下〕親王公卿有別勅、聽乘輦車出入宮中幷帶劒事

親王、太政大臣、大臣若有國之元老、朝之重臣、別聽乘輦車出入宮中、

〔文德實錄五〕仁壽三年六月癸亥、一品太宰帥葛原親王薨、○中略勅賜輦車入宮、禮儀異諸親王、

〔文德實錄九〕天安元年四月丙戌、有勅許無品惟喬親王帶劒于時皇子年十四、未加元服、

〔令義解一後宮職員〕凡親王及子者、皆給乳母、謂生子者、內親王嫁諸王、所生子者、不在給限也、親王三人、子二人、所養子年十三以上、雖乳母身死、不得更立替、其考叙者、竝准官人、

〔令義解四選叙〕凡蔭皇親者、親王子從四位下、諸王子從五位下、其五世王者、從五位下、子降一階、庶子又降一階、唯別勅處分不拘此令、

〔律疏名例六議〕

一曰議親謂皇族及五等以上親○下略

○按ズルニ、皇親罪アレバ、先ヅ其罪ヲ議セン事ヲ奏請シ、裁可ヲ待テ後決罰スルナリ、

〔令義解九喪葬〕凡百官在職薨卒、當司分番會喪、親王及太政大臣散一位、治部大輔監護喪事、○中略內親王女王、及內命婦亦准此、

〔令義解九喪葬〕凡職事官薨卒贈物、○中略親王及左右大臣准一位、○中略其無位皇親准從五位三分給二、

〔令義解九喪葬〕凡皇親及五位以上喪者、並臨時重給送葬夫、

〔令義解九喪葬〕凡親王及三位以上、暑月薨者、謂六七月給氷、

〔延喜式十太政官〕凡親王及大臣薨、即任裝束司及山作司、或任主行所及山作所、輕重隨品高下、事見葬葬記、送葬之日、勅使二人、一人持詔書、一人持位記、若無贈位者、一人持贈物、數其使人位階隨亡者高下、就弟子弔贈、

〔百一錄〕延寶三年六月廿五日、八條中務卿宮薨去、行年廿一、新院○後四院第一皇子、禁裏御柱立依三日、廢朝延引、兼而今日可被行之處也、七月十九日、吉良上野介上著、中務卿宮八條殿依薨逝爲御悔、

〔百一錄〕元祿七年五月十八日、伏見殿一品式部卿貞致親王薨、遇市中歌舞三ヶ日、

敘品

〔令義解十獄〕凡決二大辟罪一者於レ市、五位以上及皇親、犯二惡逆一以上一、聽レ自レ盡於レ家、（謂今二罪人一在レ家自レ死也）

〔日本書紀三十持統〕朱鳥元年十月己巳、皇子大津謀反發覺、逮二捕皇子大津一、庚午、賜二死皇子大津於譯語田舍一、

〔續日本紀十聖武〕天平元年二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等告レ密、稱二左大臣正二位長屋王私學二左道一、欲レ傾二國家一、壬申、遣二一品舍人親王（○中略）等一、就二長屋王宅一、窮二問其罪一、癸酉、令二王自一盡其室一、甲戌、勅曰、（○中略）長屋王者、依二犯伏誅一、雖レ准二罪人一、莫レ醜二其葬一矣、

〔日本書紀二十九天武〕十四年正月丁卯、更改二爵位之號一、仍增二加階級一、明位二階、淨位四階、每レ階有二大廣一、幷十二階以前諸王已上之位、

○按ズルニ、此時ノ制ハ、親王諸王同一ニシテ、諸王トイヘドモ尚諸臣ト異ナリキ、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、始依二新令一改制二官位號一、親王明冠四階、諸王淨冠十四階、合十八階、

（○中略）始停二賜レ冠易一以二位記一、

○按ズルニ、此ニ至リテ、諸王諸臣ノ位階ハ同一トナリ、親王ノ位階ノミ特異トナレリ、

〔令義解一官位〕親王

一品（謂品位也、親王稱レ品者、別二於諸王一、）二品　三品　四品（○節略）

〔令義解七公式〕凡應レ敘、親王四品、

〔光臺一覽二〕親王の位は、臣下の如く正從を不レ分、上下をいはず、位と稱へず、三品四品或ハ二品一品と稱へ、無位の親王は無品の親王と稱へ申事也、

〔續日本紀四元明〕和銅元年正月乙巳、是日授二四品志貴親王三品、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月癸巳、授二二品穗積親王一品、

〔續日本紀八元正〕養老二年正月庚子、詔授二二品舍人親王一品、

任官

〔續日本紀九聖武〕神龜元年二月甲午、二品新田部親王授二一品、

〔皇胤紹運錄〕賀陽親王（桓武皇子）二品刑部卿、兵部卿、治部卿、貞觀十三、十、八、冀、七十母夫人多治比眞宗、參木長野女、

大野親王（桓武皇子）四品治部卿、延曆廿二、十、冀、六歲、母同、

坂本親王（桓武皇子）四品治部卿、母川上眞好、

有明親王（醍醐皇子）三品兵部卿、母女御和子、光孝女、

〔小右記〕寬弘八年九月十日庚辰、故院（○一條宮達叙）四品之御慶事、送二書狀於母氏許一也、十八日戊子、昨日戌刻故院宮達參內、於二射場一令レ奏二慶賀一訖、（其道經二敷政門一云云）即被レ聽二昇殿一、依レ召參二御前一、候レ庭、以二官圓座一爲レ座、暫可レ令二退下一、中納言隆家、行成、參議經房等相從、（南階下云云）親王云云、候二御前之間一、左大臣（○藤原道長）候二御帳邊一云云、資平所レ談、

○按ズルニ、故院宮達トハ、後朱雀天皇ナルベシ、皇胤紹運錄ヲ按ズルニ、後朱雀院（諱敦良、母同二後一條一、寬弘六、十一、廿五降誕、同七、正、十六爲二親王一、）トアリ、御母ハ上東門院ナリ、此天皇ヲ除クノ外ハ皇子ナキナリ、

〔光臺一覽二〕扨親王御昇進の次第は、親王宣下は有て、いまだ位に叙し給はぬを無品親王と申、夫より四品三品二品と上り給ひ、一品は至極の先途と心得べし、官は中務卿、式部卿、兵部卿、又は太宰帥、彈正尹等也、

〔有栖川系圖〕韶仁親王

弘化二年二月廿七日一品宣下、非二一世親王一者、其例遲速雖レ不二容易一、被及二六旬有餘一、且病氣危篤之間、以二格別之叡慮一被二宣下一、不レ可レ爲二後例一、

〔令義解一官位〕親王

一品　太政大臣

二品　左右大臣
三品
四品　大納言　太宰帥　八省卿
〔延喜式十八部〕凡諸王諸臣任太政大臣者、不得以親王爲左右大臣、但得任八省卿、諸臣任太政大臣者、不得以諸王爲右大臣、但親王諸臣不得爲左右、
〔官職秘抄上〕八省卿　中務　式部　兵部　以上必以親王任之　治部　民部〇中略以親王（賀陽親王）被任例
〔官職秘抄下〕彈正臺　尹　爲親王官
〔類聚三代格五〕太政官符
應親王任國守事
上總國　常陸國　上野國
右撿中納言從三位兼行左兵衛督清原眞人夏野奏狀偁、設置八省職寮相隸、百官守職庶務俱成、一事有闕萬事皆緩、今親王任八省卿、此人地望素高不得就職、無知碎務、仍官事自懈、政迹日蕪、非是庸愚之所致因地勢使之然也、凡官人遷代必署解由、至有缺物不免償物、居此之費、見其如此望請點定數國爲親王國、迭任彼國、身留京都、意欲居京官者、一兩人將聽若有守闕者不補他人、其料物者納置別倉、支无品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峰朝臣安世宣、奉勅依奏、但件等國守官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太〇守、限以一代不可永例、
天長三年九月六日
〔官職秘抄下〕諸國　守〇略中上總、常陸、上野太守爲親王、介爲受領、仍歷外記史輩不任之、與親王不可相並之由、二條關白被執之然而其例多、又近代不及此儀歟、

太宰府　帥　親王任之　權帥〇中略北山抄云、爲尊親王爲太宰帥正、惟仲帥之時、以彼親王任他官、此事無謂、可任權帥也、何以正帥任他官哉、
〔日本書紀二十七天智〕十年正月癸卯、是日以大友皇子拜太政大臣、
〔日本書紀三十持統〕四年七月庚辰、以皇子高市爲太政大臣、
〔續日本紀三文武〕大寶三年正月壬午、詔三品刑部親王、知太政官事、　慶雲二年九月壬午詔二品穗積親王、知太政官事、
〔公卿補任文武〕慶雲三年、知太政官事二品穗積親王、二月辛巳、准三右大臣、
〔續日本紀八元正〕養老四年八月甲申、詔以舍人親王爲知太政官事、新田部親王爲知五衛及授刀舍人事、
〔增鏡五内野の雪〕建長四年正月八日、院〇後嵯峨の御前にて御かうぶりし給ふ、〇中略御とし十一なるべし、中務の卿宗尊親王と申めり、おなじ二〇二、百抄作四、練月十九日、都を出給ふ、其日將軍の宣旨かうぶり給ふ、かゝるためしはいまだ侍らぬにや、上下めづらしくおもしろき事にいひさわぐべし、
〔勘仲記〕正應二年十月九日、親王〇後深草皇子久明　今夜被宣下征夷大將軍事、　十日、今日將軍御下向關東、先未明入御六波羅、八葉長物見御車、

○按ズルニ、此他宗尊親王ノ子守邦ノ二親王モ亦、征夷大將軍ニ任ゼラレタレド此ニ略ス、官位部征夷大將軍篇參看スベシ、

〔神皇正統記後醍醐〕かくて親王〇後村上元服したまひ、直に三品に叙し、陸奥の太守に任じたまふ、このくにの太守ははじめたることなれや、たよりわりとてぞ任じたまふ、
〔三代實錄四十陽成〕元慶六年六月廿六日丁酉、是日以一品行式部卿兼常陸太守諱〇光孝親王爲左相撲司別當、以三品行兵部卿本康親王爲右相撲司別當、兩親王下紫宸殿庭奉勅拜舞而出、

〔伏見宮系譜〕朝彥、文久二年九月三日、國事扶助被命、

〔議奏言渡〕慶應元年十月六日、尹宮以使兩役へ被附、

不肖臣朝彥、段々蒙仰、昨日迄御用者相務候處、豈計不被爲得止次第ニ相成、積年之叡慮不仕貫徹恐入候、是全臣等不盡其職之儀ト恨身外無之實以不堪恐懼候、仍不忠罪被正、扶助被爲免候樣伏相願候事、

十月六日　朝彥

議奏傳奏衆中江

右經內覽、以權少輔申上被召留、諸大夫召設申渡候、七日、被召留候御請、不取敢以使被申上、權少輔申上候、

〔議奏言渡〕慶應二年九月四日略尹宮被附

先年來不肖朝彥、格別蒙朝恩畏入候、然處去月晦夜、不顧恐諸藩召之儀、押而言上、何共恐入候次第、是迄トテモ不行屆、此後尙又不計御失體ヲ釀候儀候而者、實ニ恐懼之至、仍國事扶助、以御憐愍被免候樣待御沙汰候事、

九月四日　朝彥

右於御前御評議之處、被止御前、

〔議奏言渡〕慶應二年九月廿七日、常陸宮山階宮晃親王、常陸太守、已下御答被仰出、

常陸宮、此度國事掛依所勞理乍申上他出、剩止宿、且從來不行跡、旁以蟄居被仰出候事、

國事掛被止候事略

但常陸宮諸大夫召設葉室殿御申渡、小時御請以國分上總被申上候、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十二月十二日、勅シテ總裁議定參與ノ三職ヲ置ク、

德川內府喜慶征夷御委任候處、大政返上、將軍職辭退の兩條、斷然被聞召候、抑癸丑嘉永六年以來未曾有の國難、先帝孝明頻年被惱宸襟候御次第、衆議の所望に付、依之叡慮被決、王政復古、國威挽回、御基被爲立候間、自今攝關幕府等廢絕、即今先般の總裁職、議定、參與の三職を置れ、萬機可被爲行、諸事神武創業に基き、縉紳武辨、堂上地下の別なく、至當の公議を盡し、天下御休戚を固く可被遊叡慮に付、各勉勵、舊惰の汚習を洗ひ、盡忠報國の誠を以て可奉公事、略

三職人撰

總裁　有栖川宮

議定　仁和寺宮　山科宮略

太政官始追々可被立候間、其旨可被心得候、

〔令義解一家令職員〕親王、內親王、准此、但文學不在此例、

一品

文學一人、掌執經講授、餘文學准此、家令一人、掌總知家事、餘家令准此、扶一人、掌同家令、餘扶准此、大從一人、掌撿校家事、餘從准此、少從一人、掌同大從、大書吏一人、掌勘署文案、餘書吏准此、少書吏一人、掌同大書吏、

二品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、大書吏一人、少書吏一人、

三品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

四品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

勅別當

帳内舍人

親王品田

〔三代實錄九清和〕貞觀六年八月八日壬戌、右京人、二品秀良親王家令正六位上宇自加臣吉人賜姓笠朝臣、〇中略阿波國名東郡人、二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家令正六位上安曇部粟麻呂改部字賜宿禰、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨云云

當代親王勅別當、上卿奉勅賜辨、辨仰史令書宣旨、

〔類聚符宣抄七〕從二位行權中納言兼中宮大夫右衛門督藤原朝臣齊信

左中辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉勅件人宜爲今上敦成親王家別當者、

左大史小槻宿禰奉親奉

寬弘五年十月十六日

〔貞信公記〕延長五年二月十二日甲午、東宮御修善於山座主所行也、十親王約口内裏、彼親王別當淑有朝臣、依院御消息昇口、親王及陪從四位以下六位以上、賜祿有差、

〔令義解五軍防〕凡給帳内、一品一百六十人、二品一百四十人、三品一百二十人、四品一百人、〇中略女減半、減數不等從多給、

〔續日本紀八元正〕養老三年十月辛丑、詔曰、〇中略舍人新田部親王百世松桂、本枝合於昭穆、萬雉城石、維磐重乎國家、理須吐納清直、能輔洪胤、資扶仁義、信翼幼齡、然則太平之治可期、隆泰之運應致、可不慎哉、今二親王宗室年長、在朕既重、實加褒賞、深須旌異、然崇德之道、既有舊貫、親之理、豈無於今、其賜二一品舍人親王内舍人二人、大舍人四人、衞士二十人、益封八百戸、通前二千戸、二品新田部親王内舍人二人、大舍人四人、衞士二十人、益封五百戸、通前一千五百戸、其舍人以供左右雜使、衞士以充行路防禦、於戲欽哉、以副朕意焉、凡在卿等、並宜聞知、

〔令義解三田〕凡位田、一品八十町、二品六十町、三品五十町、四品三十町、

〔延喜式二十民部二〕凡授品田者、親王内親王其數一同、

親王食封

〇按ズルニ、親王品田ノコトハ、俸祿部位田ノ篇ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、

〔令義解四祿〕凡食封者、一品八百戸、二品六百戸、三品四百戸、四品三百戸、内親王減半、

〔延喜式二十民部二〕凡職封者、解官幷身薨即還收、〇中略品位封者薨年之料、全納喪家、無品封亦准此、

〔日本書紀二十天武九〕十一年三月辛酉、詔曰、親王以下至于諸臣、被給食封皆止之、更返於公、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月壬辰、勅、親王已下准其官位賜食封、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年正月丁酉、二品長親王、舍人親王、穗積親王、三品刑部親王、益封各二百戸、三品新田部親王、四品志紀親王各一百戸、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年十一月庚辰、有詔加親王諸王臣食封各有差、先是五位有食封、至是代以位祿也、

〔續日本紀六元明〕和銅七年正月壬戌、二品長親王、舍人親王、〇中略封租全給、其食封田租全給封主、自此始矣、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年二月甲午、是日一品舍人親王益封五百戸、

〔類聚三代格八〕太政官謹奏

應賜無品内親王食封事

右奉勅件封戸、大同三年十月十九日論奏云、一品已下食封、并四位祿等並據令訖、但先經恩賜、更不收返、其加階進級之日、即便廻給各得其所、又大同三年六月廿九日式云、無品親王食封二百戸、男女並同、但叙品之後、一從停止者、今撿奏意、無品内親王叙四品之日、封邑一百五十戸、然則無品之日封二百戸、叙品之時還失五十戸事之所在、良不穩便、宜議定奏聞者、謹依勅旨商量、件封戸、大同三年論奏、依令已訖、然則女者良宜半減、内親王准令半之、其先經恩賜後據論奏、更不收返、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、勅依奏、

時服
季祿

大同四年六月廿三日

〔日本後紀十桓武〕延曆廿三年九月甲午、式部省言、案公式令、親王一品已下、職事初位已上、並可自牒諸司、雖是三位已上、曾無以家司牒及解向官司之文、而案去延曆廿一年九月廿三日格云、親王內親王、並年滿四歲、始充帳內者、今親王內親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司、若爲申牒、又同令牒式、三位已上去名、然則親王四品已上、去名明矣、而散事數人、同品及同官位姓之類、既不署名、何以辨知、仍問法家、答云、如此之類、可有別式者、未審所從者、勅、幼稚親王、既不便筆、三位已上亦無可署准據令格、還成疑滯、必須自牒事有不穩、自今以後、宜親王四品已上、及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首並具注其官品其親王家及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾家令已下兩人署之、无品親王內親王者、並別當官人署名申牒、牒式准上定、別當人依勅處分、〇下略

〔延喜式十中務〕時服〇中略無品親王時服、內親王亦同絹五十匹、細布四十七端二丈一尺、各加絹二百屯、

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月己酉、皇親年滿者、不論官不、皆入賜祿之額、

〔延喜式十八式部〕凡親王知太政官事者、其季祿准右大臣給之、預議政者、一品二品准大納言、三品四品准中納言、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月辛巳、知太政官事二品穗積親王、季祿准右大臣給之、

〔古京遺文〕建多胡郡辨官符碑

辨官符、〇中略和銅四年三月九日甲寅宣、〇中略太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、〇麻呂右大臣正二位藤原尊、〇不比等

○按ズルニ、親王ノ季祿ハ右大臣ニ准ズト雖、其官ハ左大臣ノ上ニアルナリ、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字五年二月丙辰朔、勅、朕以餘閑、歷覽前史、皆降親王之禮、並在三公之下、是以別預議政者、月料馬料春秋季祿夏冬衣服等、其一品二品准御史大夫、三品四品准中納言給之、

年官年爵

〔日本後紀十平城〕大同三年五月乙巳、停有品親王月料、

〔續日本紀三文武〕大寶三年九月辛卯、賜四品志紀親王、近江國鐵穴、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年四月庚申、賜三品刑部親王越前國野一百町、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁皇親之祿乞賣賤價事

右檢案內、太政官去延曆十六年四月廿四日下諸國符偁、自今以後、公私舉錢、宜限一年收半倍利、雖積年紀、不得過責者、今右大臣宣、奉勅如聞王親或募多祿、先受少價、或設重質、貸乞賤物、苟貪目前、不顧後弊、報價之日、既過一倍、因茲所司豪民競求利潤、好爲與借、班祿之日、濫訴繁多、自今以後、賣買祿物、不得過於半倍之利、如有違犯、依法科處、

延曆十八年三月九日

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應皇親准主典奪祿事

右同前〇左京職解偁、被太政官去弘仁十年十一月五日符偁、當路不掃清、穿垣引水、壅水侵途等、諸司諸家幷內外主典已上、移式部兵部、貶考奪祿、四位五位、錄名奏聞、无品親王家及所々院家、以其別當宣、准諸家司、亦移省貶奪、其雜色番上已下、不論蔭贖決罰、皆五十者、今案符旨、皇親此雜色之內、須不論蔭贖決笞、謹案律條、皇親議論人也、蔭同三位、誠雖被下符、驗理不便、望請准主典移省奪祿者、其前符疎而不勞皇親、今如所請、當奏請之、但皇親蕃多、事惟輕碎、宜依請、

以前大納言正三位兼行右近衛大將良峯朝臣安世宣、奉勅宣依件行之、

天長五年十二月十六日〇又見二政事一要略八十二一

〔拾芥抄中末御給〕親王　諸國目一人、一分一人、或云、當代第一親王者、每年賜祿、自餘親王者、又或式部卿者一分二人也、

〔除目抄〕

一親王巡給事（巡給、別巡給、別給、已上其號有三種、年給日一人、一分一人、外巡給二合事也、）

一巡給（巡給事又在別抄、）

一代御後君王、不論男女、預之、寬平御後親王有例、巡給別巡給云々、延喜六年五月宣、

一說假令

白川院親王一年　堀川院親王一年　鳥羽院親王一年

今案、是其代親王一巡、悉被申任之心也、

一說假令

白川院第一親王　次年同院第二親王　次年同院第三親王

次年堀川院第一親王　次年同第二親王　次年同第三親王

次年鳥羽院第一親王　次年同第二親王

今案、是其代ノ親王一人ヅヽ可被申之心歟、

一說

一年白河院第一親王　堀河院第一親王　鳥羽院第一親王

次年白河院第二親王　堀河院第二親王　鳥羽院第二親王

次年白河院第三親王　堀河院第三親王　鳥羽院第三親王

今案、是其代ノ一二親王達ヲ分別シテ、一年ヅヽ可被申之心也、

古抄云、江帥卿示予（師遠）云、巡給ハ一代々々親王ヲ可作巡給之次第也、假令後朱雀院親王一巡、次後冷泉院親王一巡之類是也云云、而予（師遠）所案異之、只依巡給宣旨之次第可被任也、假令巡給ノ人三人アラバ三年ニ一度、四人アラバ四年ニ一度可

任也、但一代親王一巡ヅヽ、悉被任之極秘說也云云、

別巡給

第一親王每年二合依別勅也、今案別巡給是也云云、別巡給トハ、當帝后腹親王不論男女、可預別巡給之由被宣下ヌレバ、一人御坐ノ時ハ、每年任之、二人之時ハ隔年任之、只可依別巡給之人數也云云、

別給

依勅定懸親王巡也、又非后腹當代親王給之號也、一人之時每年任之、但末代無沙汰、寬元宗尊親王（非后腹當代親王也）給可有之歟、不有之歟有沙汰、遂不被申之、非后腹當代親王給、某親王當年別給ト在之、勝子內親王例也、此義可然歟、依勅定懸親王巡云々、寬平九、六、廿六、宣旨云、尙侍藤原淑子別給、據一人、一分一人（是年給一分之外也）每年任之、先人之說也云云（今案播州外遠歟）

〔三代實錄十清和〕貞觀七年正月廿五日丁未、太政大臣從一位臣藤原朝臣良房、〇（中略）等奏議言、伏見自延曆至仁壽六代親王、年料給分、主典史生等、每代各一人、互稱一代、不用通計、是以或隔一年卽給、或經數年稀給、或省內親王不關給例、執論各殊、披訴間出、天慈攸及、還似不平、謹按此事、格式不載、宣旨非切、從見流例、未詳本源、方今年中所出之給、始自三宮至於諸司、有勞應補者、居常苦其不足、而親王之數四十有餘、非隔數年、難可周給、伏請總計親王、不別代々、輪轉而給、鱗次弗愆、將使先後無恨、男女共欣、永々相承、以爲成式、但先來有勅所別給者、不入此限、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔本朝世紀〕天慶元年十月八日、太政大臣參入職御曹司、被定行雜事、大納言平伊望卿着宜陽殿西廂座、召大外記三統公忠仰云、四品行明親王、去延長五年八月官符儀、件親王今上親王所定如件者、而所司自延長六年、以件親王爲寬平御後、載巡給簿行來久、不可追改、宜准故雅明親王例、從彼延長六年爲寬平御後、宛其年官者、卽書件宣旨續納已了、

皇子賜姓

〔神皇正統記村上〕源氏と云事は、嵯峨の御門世のついえを思しめして、皇子皇孫に姓を給ひて人臣となし給ふ、すなはち御子あまた源氏の姓を給はる、桓武の御子葛原親王の男高棟、平の姓を給はり、平城の御子阿保親王の男行平業平等有原の姓給る事も此後の事なれど、是はたま〳〵の義なり、弘仁以後、代々の御後はみな源の姓を給ひしなり、親王の宣旨を蒙る人は、才不才によらず、國々に封戸など立られて、世のついえなりしかば人臣につらねず、官學して朝要にかなひ、器にあたがひ昇進すべき御おきてなるべし、姓を給る人は直に四位に叙す、皇子皇孫にも當君の事也（例まれなり、嵯峨の御子、大納言定卿三位に叙せしかど、是も當代にはあらず、かくて代々のあいだ、姓を給ひし人百十餘人もや有けん、然れど他流の源氏大臣以上にいたりて、二代と相續する人の今まできこえぬこそいかなる故ならんとおぼつかなけれ、嵯峨の御子姓を給ひし人二十一人、此中大臣にのぼる人常の左大臣、兼大將信の左大臣、融の左大臣、仁明の御子に姓を給る人十三人、大臣にのぼる人多の右大臣、光の右大臣、兼大將文徳の御子に姓を給はる人十二人、大臣にのぼる人能有の右大臣、兼大將清和の御子に姓を給る人十四人、大臣にのぼる人十世の御末に、實朝の右大臣、兼大將、是は貞純の親王の苗裔なり、陽成の御子に姓を給る人十五人、宇多の御孫に姓を給りて大臣にのぼる人、雅信の左大臣、重信の左大臣、さもに敦實親王の男なり醍醐の御子に姓を給はる人二十人、大臣にのぼる人高明の左大臣、兼大將兼明の左大臣、後に親王となす、中務卿に任ず、前中書王これなり、此後は皇子の姓を給ふ事はたえにけり、皇孫にはあまたあり、任大臣を本と記すによりてこそ〳〵大臣にいたりても、いづれか二代とあひつげる、ほとむど納言以上にて傳はれるだに稀なり、雅信の大臣の末ぞおのづから納言までものぼりて殘りたる、高明の大臣の後、四代大納言にて有しもはやく絶にき、いかにも故ある事かとおぼえたり、皇胤の貴種より出ぬる人、蔭をたのみいと才なくもなく、剩へ人にをごり慢する心もあるべきにや、人臣の禮にたがふ事ありぬべしみさせ給ひけるにこそ、

〔續日本紀三十九桓武〕延暦六年二月庚申、勅、諸勝賜姓廣根朝臣、岡成長岡朝臣、

○按ズルニ、諸勝ハ光仁天皇ノ皇子、岡成ハ桓武天皇ノ皇子ニシテ、皇子賜姓ノ始メナリ、

〔公卿補任桓武〕延暦廿一年十二月己酉、賜良峰朝臣姓于安世、○桓武皇子　貫右京、

〔享祿本類聚三代格十七〕詔、朕○嵯峨當揖讓纂踐天位、德愧睦邇、化謝覃遠、徒歳序屢換、男女稍衆、未識子道、還爲人父、辱累封邑、空費府庫、朕傷于懷、思除親王之號、賜朝臣之姓、編爲同籍、後從事於公、出身之初、一叙六位、唯前號親王、不可更改、同母後產、猶復一例、其餘如可同恩、朕非忍絶廢禮餘分、折枝葉、固以天地之知此意、

弘仁五年五月八日○又見河海抄

〔新撰姓氏錄左京皇別〕源朝臣　源朝臣信年六、腹廣井氏　弟源朝臣弘年四、腹上毛野氏　弟源朝臣常年四、弟源朝臣明年二、已上二人腹飯高氏　妹源朝臣貞姫年六、腹百濟氏　妹源朝臣潔姫年六、腹布勢氏　妹源朝臣全姫年四、已上二人腹當麻氏　妹源朝臣善姫年二、腹百濟氏　信等八人是今上○嵯峨親王也、而依弘仁五年五月八日勅、賜姓貫於左京一條一坊、即以信爲戸主、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年正月三日丙寅、大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定鄰、○中略定者、嵯峨太上天皇之子也、○中略弘仁五年特蒙明詔、諸皇子未爲親王者、皆賜姓源朝臣、定是源氏之第六郎也、其源之命氏始於此矣、太上天皇以定奉淳和天皇爲子、淳和天皇受而愛之、過所生之子、更賜寵姫永原氏、令爲之母、故世稱定有二父二母焉、原姫所謂亭子女御也、天長四年二月廿八日、淳和天皇奉書

於嵯峨太上天皇、請以定爲親王、曰、○中略皇家之胤、徒淪胥庶、眷言猶子、情深矜愍、謹撿弘仁五年五月八日詔旨、除親王之號、賜朝臣之姓、如可關者、朕殊裁下、特望齒列親王、榮曜貽孫、方寸之思、伏聽天裁、

〔三代實錄十清和〕貞觀八年三月二日戊寅、勅、沙彌深寂、賜姓貞朝臣名登、○中略先是貞觀五年九月二十日、三品中務卿親王、○中略等奏言、深寂是仁明天皇更衣三國氏所生也、承和之初、賜姓源朝臣、預時服之時、既列皇子、還俗之日、何爲非兒、然則准之人間、宜復本姓、但伏聞嵯峨遺旨、母氏有過者、其子不得爲源氏、望請賜姓名貞朝臣、登叙位階、貫京職、至是詔許之、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年八月廿五日丙寅、詔曰、朕之諸兒皆賜朝臣之姓、斯誠節國用、息民勞之計也、○中略第七皇子定省、年二十一、便侍朕躬、未曾出閤、寬仁孝悌、朕所鍾憐、前被混昆弟之膺行、遽編一戶、今欲傳祖宗之駿命、何澀請任、苟不爲身、誰嫌反汗、其削臣姓、以列親王、心星宜肖帝子之名、偕岳曷辭、天孫之號、

○按ズルニ、定省親王ハ其ノ明日立チテ皇太子トナリタマフ、宇多天皇是ナリ、

〔帝王編年記十七醍醐〕貞元二年四月廿四日、左大臣源朝臣兼明停大臣爲親王叙二品、十二月十日任二中務卿一號前中書王一是也、

〔榮花物語二花山〕大殿○藤原兼通おぼすやう、世の中もはかなきに、いかでこの右大臣○藤原頼忠いますこしなしあげて、わがかはりのそくをもゆづらんと覺したちて、だいまの左大臣兼明のおとゞときこゆる、延喜のみかど○醍醐の御十六の宮におはします、それ御心ちなやましげなりときこしめして、もとのみこになしたてまつらせ給ひつ、さて左大臣には、小野宮の頼忠のおとゞをなしたてまつり給ひつ、

賜姓後復親王

猶子養子

〔本朝世紀〕寛和二年四月廿八日、四品盛明親王出家入道、醍醐天皇第十五皇子也、春秋五十九云々、

○中略件入道親王、初賜朝臣姓、後更爲親王一也、

〔日本紀略一醍醐〕延喜廿一年十二月十七日、以第十皇子雅明爲親王、實者法皇○宇多御出家之後、所生皇子也、爲今上御子、

〔日本紀略十條〕寛弘元年五月四日丁亥、以冷泉院皇子昭登清仁爲親王、實花山院御出家之後産生也、

〔榮花物語八はつ花〕院○花山このみやたちのゑのびがたく、あはれにおぼえ給へば、中つかさがはらの一のみこ、○昭登むすめのはらのみこ、○仁清ふた宮を、との○道長に申させ給て、これ冷泉院の御子のうちにいれさせ給へとある御消息度々あれば、○中略内にまゐらせ給て、ことのよしそうせさせ給て、よきひして宣旨くださせ給ふ、おやばらの御子をば五の宮、むすめばらの御子をば六の宮とて、おの〳〵みなならべてのみやたちのゑ給ふほどの御封どもたまはらせ給ふ、

〔執次詰所本御系譜〕

後伏見院

- 光明院
- 後伏見院第二宮、爲光嚴院猶子、

後小松院

- 後花園院
- 應永廿年六月十八日降誕、實者後崇光院皇子、爲後小松院御猶子、

皇子爲人臣養子

【近代帝王系圖】

後光明院

靈元院

後水尾院皇子、爲後光明院御猶子、承應三年五月廿五日降誕、號高貴宮、明曆四年正月廿八日立親王、叙二品、五歳、節略○

○按ズルニ、當代ノ天皇ニ、未ダ皇后女御等ノ入内ナキ時、又ハ入内アリトモ未ダ皇子ノオハセザル間ハ、他ノ皇子ヲ猶子養子トセサセ給ハザル例ニテ、此時後西院天皇ニハ未ダ皇子オハセザリシユヱ、靈元天皇ヲ先帝卽チ後光明天皇ノ御猶子トセサセ給ヒシナリ、

【執次詰所本御系譜】

後陽成院

藤原信尋

爲近衞三藐院關白准三后信尹公養子、任關白左大臣、

藤原昭良

爲一條自淨心院前關白左大臣内基公養子、任關白左大臣、

【執次詰所本御系圖】

陽光院

智仁親王

皇子皇女不爲親王

號八條、豐臣關白秀吉公猶子、童名古佐麻呂、

【皇胤紹運錄】

後陽成院

良純法親王

慶長九年三月廿九日誕生、稱八宮、同十九年十二月十六日爲親王、元和元年六月爲東照宮、○德川家康御猶子、

【源平盛衰記十三】高倉宮廻宣附源氏汰事

一院○後白河第二ノ御子以仁王ト申ハ、○中略三條高倉ニ御坐ケレバ、高倉宮トゾ申ケル、○中略既ニ三十ニ成セ給ヌレドモ、親王ノ宣旨ヲダニモ不被下シテ、沈テゾ御坐ケル、御手跡モ嚴ク、御才覺モ優ニ御坐ケリ、御位ニ卽セ給タラバ、末代ノ賢王トモ申ツベシナド人々申ケレドモ、女院○後白河后建春門院德子ニハ繼子ニテ渡ラセ給ケレバ被打籠ツヽ、○中略等閑ニ年月ヲ過サセ給ケリ、

土御門院

秀子

春子

知子

信子

是子

〔皇胤紹運錄〕
順德院
　忠成王
　彥成王

廢親王

〔季連宿禰記〕元祿十六年四月三日戊寅、傳聞入江殿御比丘尼、後入滅、去月廿七日歟、御閉眼西院皇女、之由風聞、當座祕レ密歟、今夜奏聞云云、廢朝無之、依無親王宣下之儀歟、洛中自今夜三ケ日止音曲云云、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年十月壬申、〇中略又詔曰、船親王波、〇中略又仲麻呂何家物計夫流罪中略書中略仲麻呂等通家流謀乃文有、是以親王乃名波下氏、諸王等成氏、隱岐國爾流賜布、又池田親王波、此夏馬多集天事謀止所聞支、〇中略是以親王乃名波下賜天、諸王等氏、志土佐國爾流賜等布詔大命乎聞食止宣、

〔日本紀略平城〕大同二年十月辛巳、蔭子藤原宗成、勘中務卿三品伊豫親王潛謀不軌、十一月乙酉、徙親王幷母夫人藤原吉子於川原寺、幽之一室、不通飲食、乙未、親王母子仰藥而死、時人哀之、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十年三月己亥、詔朕有所思、宜復故皇子伊豫、夫人藤吉子等本位號、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年九月癸未、中使就故贈二品伊豫親王墓、詔曰、〇中略宜贈榮班、以貴幽寵、可贈一品、

○按ズルニ、此伊豫親王ハ、京都上京ナル上御靈神社祭神八柱ノ內ニアリ、御靈會ヲ行フ事ハ、貞觀五年ヨリ興レリ、

〔德川禁令考一〕紫宸殿御條目
一親王宮御不行跡之節者、被任先例可令遠流事、
　寬保二壬戌年〇月日次

〔皇胤紹運錄〕良純法親王
慶長十九年十二月十六日爲親王、元和元年六月爲東照宮〇德川家康御猶子、同五年九月十七日入寺得度、十六寬永廿年十一月十一日遷於甲州天目山、四十萬治二年六月廿二日歸洛、住泉涌寺中新善光寺、〇五十六中略明和五年八月當百年忌、復本位、

○按ズルニ、十三朝紀聞ニヨルニ、是歲詔罷知恩院法親王良純、放之于天目山、近婦女、茹葷醒故トアリ、

皇女初見

○

〔日本書紀七景行〕四年二月、喚八坂入媛爲妃、生七男六女、〇略中第六曰淳尉斗皇女、第七曰淳名城皇女、

〔運步色葉集二那〕內親王皇女、帝之姊伯母也、

〔日本書紀三十持統〕五年正月癸酉朔、賜親王、諸臣、內親王、女王、內命婦等位、

〔續日本紀二文武〕大寶元年二月己未、遣泉內親王、侍於伊勢齋宮、十二月乙丑、大伯內親王薨、天武天皇之皇女也、

內親王稱呼

○按ズルニ、是レ內親王ヲ以テ名ノ下ニ連稱スル始メナリ、

內親王宣下

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年六月庚戌、帝御內安殿、喚諸司主典已上、詔曰、〇中略兄弟姉妹悉稱親王、止宣天皇御命衆聞食宣、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、十一月甲子、詔曰、〇中略兄弟姉妹諸王子等悉作親王、氏冠位上給治給、〇中略酒人內親王三品、從四位下衣縫女王、難波女王、坂合部女王、能登女王、美努摩女王、並四品、

○按ズルニ、從四位下衣縫女王以下、並ニ四品ニ叙ストハ、卽チ內親王ニ陞セシナリ、

〔類聚符宣抄四〕太政官符、中務式部民部大藏宮內等省、

昌子內親王歲壹

右太上天皇〇雀朱親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

右中辨

左大史

天曆四年八月十日

〔榮花物語一月宴〕朱雀院は御子たちおはしまさゞりしかば、たゞ王女御〇熙子ときこえける御はらに、えもいはずうつくしきをんなみこ〇昌子一所ぞおはしましける、はゝにようごも御子みつにてうせ給にしかば、みかど〇雀朱われひとゝころ、こゝろぐるしき物にやしなひたてまつり給ける、いかできさきにすゑたてまつらんとおぼしけれども、れいなきことにてくちをしくてぞすぐさせ給ける、昌子內ぉんわうとぞきこえさせける、

〔本朝世紀〕治曆四年八月十四日、〇中略又內大臣於仗座被下女親王四人宣旨、聰子、後佳子、後宮子、左少辨正家奉之、

〔台記〕久壽元年八月十八日己亥、饗儀了參內、〇中略更闌光賴朝臣來曰、只今新大納言參入、可用壽字之由所申也、余答曰、壽者衞宣公之子、遇殺者名也、見桓十六年左傳非無其忌、如何、光賴退告大納言、大納言曰、夜及深更、不能奏烏羽、勘例統子內親王宣旨後改名、依彼例今夜用壽字、後日改名何事之有乎、余即著陣、光賴朝臣下親王名、余結申、光賴曰、可爲內親王、余稱唯卷之、召左大辨下之、大辨退下、次光賴來、仰以侍從藤原朝臣成通爲內親王別當之由、即仰左大辨、不召立、又示成通卿、次成通公敎重通公能等卿進射塲奏慶、此間余參烏羽北殿奏慶、土佐守季行朝臣別當傳奏、是大將慶也、此間曉鐘頻報、次昇堂、家司職事申慶了、余退出東三條、大將饗三獻間、新大納言奏院宣、遂親王名字勘文曰、依閤下定申本勘申、依壽諱不被用、依仰重擇申也、見件勘文、載姝擇好三字、申曰、禮儀中間不能勘文書、但姝擇無殊難歟、如此事、被問太政大臣、被用被定申趣可宣歟、廿九日庚戌、頭光賴朝臣來曰、內親王改壽子爲姝子〇皇女羽者、示可書下之由、即書檀紙授之、

〔兵範記〕仁安三年八月廿七日丙辰、〇中略

太政官符中務省

悰子內親王

右內親王所定如件、省宜承知依件行之、符到奉行、

正四位下行權右中辨平朝臣

左大史正六位上兼皇太后宮少屬中原朝臣

仁安三年八月廿七日

〔百練抄十四條四〕貞永元年十一月廿四日庚午、當今〇四條同胞妹親王宣旨也、御名字曄子、〇一代要記曄子ニ作ル式部大輔爲長卿擇申、

〔平戶記〕延應二年〇仁治元年四月廿一日、今夜兩姬宮被下親王宣旨、大府卿勘申兩御名字、注載一紙、以消息付頭辨云々、白河姬宮後高倉院姬宮也、御名能子持明院姬宮今上姉也〇騰子〇百練抄四條異母姉御名暉子ニ作ル之由被定仰、不被問人々、只今申合入道殿給云云、

〔百練抄十四條四〕仁治元年四月廿一日乙卯、親王宣旨、陣子內親王、後堀川院御女能子內親王、後高倉院御子一宮、御名治子、今夜即令預別給云々、

〔後深心院關白記〕貞治三年正月五日、裏書傳聞、叙位以前有立親王宣下、上卿藤中納言、今上〇後光嚴女

〔實躬卿記〕文久元年四月十九日丁丑、內親王〇仁孝皇女親子宣下也、〇略〇中略先內大臣齊入敷政門著陣、〇中略職事長順朝臣來下御名字、內府被結申、長順朝臣仰仰詞退入、〇中略次內府仰官人召辨、權右中辨博房著軾、內府賜御名字、博房結申、內府被仰仰詞、博房退仰史、次長順朝臣著軾、仰以權大納言藤原朝臣可爲勅別當之由退入、

〔言成卿記〕文久元年四月十九日、今日和宮御諱親子、內親王、宣下陣儀、巳刻、上卿內大臣、齊敬中山大納言、忠能勅別當三條西中納言、季知右宰相中將、實麗家司敬直朝臣、中務大輔實梁從侍職事長季、小倉大夫敬久錦織大夫云云、

〔新儀式五臨時下〕內親王初謁事

內親王年七八歲、有初謁事、先定吉日時、用夜時當日晚景、垂東廂御簾、御帳中立倚子、撤畫御座、時剋皇上著御御座、親王進出當御座、於東廂肅拜、退更召給祿、白褂一重、延長五年、廉子親王之時、件祿納御匣也、中宮職給祿、男女房裳、又親王乳母給祿、各稹子一領或有給其什物等之事、

〔儀式八〕正月八日叙內親王以下儀

皇帝未御紫宸殿之前、掃部寮立漆案於內廂、當御座掃部寮預立案即臨東檻喚大臣、大臣稱唯、升殿就座、大臣宣喚中務省、內豎稱唯出喚、輔以上若筥多丞隨之稱唯、入自日花門立東庭、大臣宣參來、輔唯、卿先升受三位以上位筥、置於案上退下、次輔昇進置五位以上筥於同案退下、次大臣退下、內侍率可被叙者列南廂、東面北上、異位重行、卿先昇叙之退、出宣仁門、次輔昇、叙之退下、其被叙者、隨叙北面東上立、肅拜訖引還、掃部寮昇却案、

〔延喜式十中務二〕凡叙內親王以下品位者、卿叙品及三位已上、輔叙五位已上、其授宮人位畢下知縫殿寮、

〔續日本紀三十光仁六〕寶龜十一年十一月丁亥、授四品彌努摩內親王三品、

〔日本後紀十桓武二〕延曆廿三年正月辛巳、曲宴某內親王〇高志之房、授親王三品、淳和贈皇后也

〔扶桑略記二十後三條九〕延久元年六月十九日甲寅、第一內親王聰子叙一品、〇中略俊子內親王叙二品、佳子篤子兩內親王各叙三品、

〔令義解一後宮職員〕凡內親王、女王、及內命婦、朝參行立次第者、各從本位、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年二月丁丑、勅、以三品吉備內親王男女皆入皇孫之例焉、

○按ズルニ、吉備內親王ハ、文武天皇ノ皇妹ニシテ、長屋王ノ妃ナリ、其ノ男女王ハ、內親王ノ子ナルヲ以テ、夫王ノ世系ニ關セズ、特ニ皇孫ノ列ニ入レラレシナリ、

〔續日本紀一文武三〕三年九月丙子、新田部皇女薨、勅王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、

〔續日本紀三十光仁五〕寶龜九年五月癸酉、三品坂合部內親王薨、遣從四位下壹志濃王等監護喪事、所須並官給之、天皇爲之廢朝三日、內親王天宗高紹天皇〇光仁異母姊也、

〔續日本紀三十光仁六〕天應元年二月丙午、三品能登內親王薨、遣右大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂就第宣詔、從四位下石川朝臣豊人等監護喪事、所須官給、遣參議左大辨正四位下大伴宿禰家持、刑部卿曰、天皇大命乎宣、此月頃間身勞須止、聞食氏、伊都之可病止氏參入岐、岐恐、波氏誤朕心毛慰米麻佐止、今日加有牟明日加有牟止所念食都々待比賜間爾、安加良米佐須如事久、於與豆禮加毛年毛高久成流多朕乎置氏罷麻之閉止聞食氏毛、奈驚賜比悔備〇此下恐之止脫賜比二字大坐須、如此在牟止知末世婆心置氏毛談比賜比相見氏末物乎、悔加毛哀加毛云部〇部上恐脫二牟須二字不知、然毛在加毛、朕波汝乃志乎波壓久乃間毛忘得末之自美奈毛悲備賜比之乃比賜比大御泣哭川川大坐麻須然毛治賜止所念之位止奈毛、一品贈賜不、子等乎婆二世王爾上賜比治賜不、勞久思麻之罷麻佐牟道波、平幸久都々牟事無久、宇志呂毛輕久安久通止世告與止詔天皇大命乎宣、內親王天皇之女也、適正五位下市原王、生五百井女王、五百枝王、薨時四十九、

○按ズルニ、五百井女王、五百枝王等ハ、內親王ノ子タルヲ以テ、夫王ノ世系ニ關セズ、二世王トセラレシナリ、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年閏十月廿日丙寅、無品同子內親王薨、帝不視事三日、內親王者淳和太上天皇之皇女也、母池子丹墀氏、從五位上門成之女也、廿五日辛未、是日任同子內親王裝束山作等司、從四位下行越中權守房世王爲裝束司長官、治部少輔從五位下安倍朝臣房上爲次官、判官二人、主典二人、喪葬二人、散位從五位下廣山王爲山作司長官、從五位下藤原朝臣大野爲次官、判官二人、主典二人、喪

家辭而不受、

〔三代實錄清和〕貞觀四年二月廿五日甲子、无品有子内親王薨、淳和太后奏請不被任葬儀司、詞旨懇切、因而不任、輟朝三日、内親王者、淳和太上天皇之女也、母贈皇后諱高志桓武天皇之女也、生一男三女焉、

〔類聚符宣抄四〕被右大臣宣偁、紀内親王〇桓武皇女薨之由今日奏聞既訖、宜仰辨官始自今日、令神祇官獻御贖物者、

仁和二年六月廿九日　　大外記大藏善行奉

即日仰告當直左少史凡春宗訖

〔類聚符宣抄四〕中納言兼右近衛大將藤原朝臣師尹宣、奉勅一品康子内親王〇醍醐皇女今月六日薨、須依例任葬官、而依喪家辭申停任件官者、

天曆十一年〇天德元年六月十日　　少外記國公眞奉

〔日本紀略四村上〕天德元年六月六日辛酉、一品康子内親王薨、醍醐第十四皇女給贈物、件薨胞衣不下之故也、於右大臣〇藤原師輔坊城第薨、十日乙丑、御躰御卜如例行之、天皇不服錫紵、以前有御卜奏、於禁中儀於陣外奏之、此間故康子内親王家別當掃部頭藤原在滋、於待賢門付外記申云、今日親王葬送也、葬官不可任之由有遺誡者歟、有薨奏事、今日以後三箇日、不可有音樂之由仰内豎畢、今夕件内親王、葬西八條東河島邊、

〔續世繼六志賀の御禮〕女宮は一品宮とておはしましゝは、禧子の内親王〇鳥羽皇女とて賀茂のいつきにたち給へりし、御なやみにてはべなくいで給ひにき、長承二年十月十一日御とし十二にてかくれさせ給にき、〇中略廿七日薨奏とてこのよし内裏に奏すれば、三日は廢朝とて御殿のみすもおろされ、なに事もこゝろたてゝそうすることなど侍らざりけり、みかど〇崇德は御いもうとにおはしませば御ふくたてまつりなどしけり、もんもなき御かふり、なはえいなどきこえて、年中行事の障子のもとにてぞたてまつりける、みかどは日かずを月なみのかはりにせさせ給なれば、三日御ふくとどきこえける、

〔百一錄〕延寶二年九月十二日、夜陰永井伊賀守、同大學上著、女一宮江〇靈元皇女爲吳服料、黃金百兩年々可有進呈之由申來、本院〇明正御所へ金千兩、是者當年耳、

〔百一錄〕延寶九年八月廿三日、新院姬宮〇後西皇女樣へ御合力米貳百石

〔令義解一家令職員〕親王、内親王准此、但文學不在此例、

内親王家令

○按ズルニ、家令以下ノ職員ハ、上文親王家令ノ條ニ揭ケタリ、故ニ今又此ニ贅セズ、

内親王品田

〔類聚國史祥瑞百六十五〕延曆十六年六月辛酉、三品朝原内親王獻白雀、御〇監及家司等賜物有差、

内親王食封

〔延喜式二十民部二〕凡授品田者、親王内親王其數一同、

〔日本書紀二十天武九〕五年八月丁酉、親王以下小錦以上大夫、及皇女姬王内命婦等、給食封各有差、

〔日本書紀二十天武〕十三年閏四月己卯、益二品氷高内親王、四品水主内親王、長谷部内親王、益封各一百戶、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年正月壬寅、詔、御名部内親王、〇中略益封各一百戶、

〔續日本紀六元明〕和銅七年正月己卯、益二品氷高内親王、〇刊本脫内親二字、據本書下文及日本紀略補食封一千戶、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月甲午、三品泉内親王、長谷部内親王、益封各一百戶、

〔日本紀略十一條〕寬弘四年正月戊午、勅二品脩子内親王叙一品、年官年爵准三宮、本封外加千戶、

猶子

〔御湯殿の上の日記〕天文廿二年正月廿八日、ひめ宮〇後奈良皇女聖秀尼王の御方、ぶけ〇足利義晴の御ゆうじになし參らせらるゝとて、ぶけへ十かう十か、みだいへ五かう五か參らせらるゝ、これは廿五日の御事なり、けふぜんげ院どのへさだめ參らせられて、御てらより五かう五か參る、ひめ宮の御かたならしまして、ほうくわうあんまゐられて、御さか月まゐる、めでたし、十二月十一日、ひめ宮の御かた、ぜんげ院どのへ御入室にて、すけ殿、ながはし御まゐり、てんきよく、すが〳〵とくわんなりて、めでたし、御てらより十かう十か參る、御じゆかいわり、

皇女降嫁臣下

〔日本紀略二朱雀〕元慶元年十一月五日、四品勤子内親王薨、先帝(醍醐)第二皇女、中納言師輔室、

〔一代要記四醍醐〕韶子内親王　帝六女、延喜廿年二月十七日爲親王、始配大納言源清蔭、後配河内守橘惟風、

〔皇胤紹運錄〕

小一條院

僖子内親王　配權中納言信家、三條院爲子、

〔勘仲記〕弘安七年八月十四日己未、抑今夕内大臣殿〇藤原家基令迎新院山〇龜皇女、十六歳日來輿、按察二品御同宿云々、俄有此儀、頗希代之例也、上皇密々御幸二品第、御出立事有叡覽云云、御車自内府被進之、侍二人、殿上人一人云々、密々儀云々、忠仁公嘉例云々、頻髣髴歟、今度時宜定有子細歟、

〔執次詰所本御系譜〕

後陽成院

清子内親王

爲鷹司關白信尚公北政所　慶長六年十二月九日内親王宣下

貞子内親王

爲二條太閤康道公北政所〇略節

〔執次詰所本御系譜〕

後水尾院

昭子内親王

爲近衛關白左大臣尚嗣公北政所　寛永十三年十一月廿三日嫁于近衛殿　同十四年十二月八日内親王宣下〇略節

〔百一錄〕元祿十五年八月廿六日、近衛關白〇基熙御臺級宮〇常子御方薨御、六十四歳、號無上法院、後水尾院姫君、廢朝三箇日、市井同斷禁之、

〔百一錄〕貞享三年七月廿三日、後西院姫宮賢宮〇益子爲内親王、上卿今出川大納言、八百宮御妹也、廿五日、今夜九條大納言殿〇輔實御簾入于賢宮御方、中筋通故准后新廣儀門院舊御所云々、廿七日、賢宮移徙于九條殿新造之御殿、從二條辻固勤之、前驅殿上人、扈從公卿三輩、綾小路、清閑寺相公、伏原三品、

〔執次詰所本御系譜〕

靈元院

吉子内親王

正德四年八月廿二日生、號八十宮、同五年八月廿七日爲征夷大將軍家繼公〇德川御臺所、同六年二月十八日有結納之儀、東使阿部豐後守正喬、同四月三十日家繼公薨去、依之在住皇都、享保十一年十一月廿八日内親王宣下〇略節

〔基熙公記〕正德五年五月廿三日戊午、前攝政被來、今度於關東執權中、兩傳奏へ申旨有之、大樹御嫁緣之事也、申請院姫宮度云云、子細難記之、只歎息而已、兩傳奏今日可奏院云云、委事前攝政可有注記、嗚呼々々、遣書狀東武有要用故也、依上件事、自前攝政被遣飛脚了、

〔有章院殿御實紀十三〕正德五年九月廿九日、群臣總出仕あり、法皇〇靈元の姫宮御定婚あり、御入輿あるべきよし仰出さる、十月三日、御定婚により、日光山御宮に代參使を立らる、五日、阿部豐

後守正喬、御入輿の事總督を仰付られ、來春納采の御使をも命ぜらる、十六日、こたび御定婚あ
りし法皇の姫宮を、八十の宮御方と稱し奉るべき旨仰出さる、
〔有章院殿御實紀十四〕正德六年〇享保元年二月五日、阿部豐後守正喬、納采の御使として發足す、其御
贈物は、八十宮の御方に紅白練絹百端、色絹百匹、綾子百卷、五種五荷、主上〇中御門へ守次の御大刀、金
三十枚、三種二荷、法皇へ宗恒の御大刀、金五十枚、三種二荷、女院に銀二百枚、二種一荷、閏二月廿
一日、阿部豐後守正喬、京より歸り謁し、茶苧島大刀馬料の金を獻る、廿二日、御納采を賀し、群臣
出仕して宰臣に謁す、萬石以上の人々、宿老御側用人少老の宅にまかりて賀す、廿三日、きのふ
の事により、萬石以下の人々諸老臣に詣賀す、致仕臥病、幷に幼稚の輩使者を出し、在封の人々よ
り使札を獻ず、
〔有章院殿御實紀十五〕正德六年〇享保元年三月七日、勅使德大寺右大將公全卿、庭田前大納言重條卿、
法皇使東園前中納言基雅卿、引見あり、〇中略御納采の御祝とて、大內より御大刀一振、馬料金三枚、
三種二荷、院より御大刀一振、馬料の金五枚、三種二荷、女院より一枚、〇下略
〔執次詰所本御系譜〕
今上〇仁孝

皇女
弘化三午年閏五月十日降誕　同月十七日號和宮　嘉永四年七月十二日有栖川帥宮御
緣組御治定
〔言成卿記〕文久元年四月十九日、今日和宮御諱、親子內親王宣下、
〔議奏言渡〕萬延元年八月廿六日、從殿下〇九條尚忠以御世話卿和宮江被申上、相濟、御緣組御延引御理

被聞食候旨、可申渡于有栖川宮殿下垂命、則被申渡候旨武傳被示、少選御受被示候、此由以大御乳
人申入候、
〔實麗卿記〕萬延元年十月十八日、巳刻參內、如日來、今日若狹侍從、橫瀨侍從等、參內有御對面、和宮御
緣組之事、御許容被仰出、〇中略右大將以一紙被示續左、
和宮御緣組之事、自關東再三被懇願候に付、正德年中八十宮御約定、幷東福門院〇後水尾后德川秀忠女御
入內之御例も被爲在候間、御許容被仰出候事、
〔議奏言渡〕萬延元年八月廿六日、從殿下〇九條尚忠以御世話卿和宮江被申上、相濟、御緣組御延引御理
西下刻退出、直參和宮、申談有子細、又爲御使女房越後大御乳人代云云御緣組御許容之事、被仰進、〇下略
〇按ズルニ、和宮ハモト有栖川家ニ婚儀治定アリシヲ、後改メテ德川家茂ニ降嫁セラレシナ
リ、
〔續日本紀二十九〕神護景雲三年五月壬辰、詔曰、不破內親王者、先朝有勅削親王名、而積惡不止、重爲
不敬、論其所犯、罪合入虐、但緣有所思、特宥其罪、仍賜厨眞人厨女姓名、莫令在京中、
〔續日本紀三十二〕寶龜三年十二月戊午、復厨眞人厨女屬籍、
〔類聚國史八十七刑法〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐奸小家內親王、
除名、內親王削屬籍、

厩內親王

古事類苑

帝王部二十五

皇親下　皇親妃附入

入道親王法親王　一四七一
皇子出家　同
法親王宣下式　一四七五
法親王　同
宮門跡　一四七八
孫王爲法親王　一四八〇
內親王入道　同
比丘尼御所　一四八一
入道親王法親王叙品　一四八三
法親王待遇　同
法親王母代　一四八五
雜載　一四八六
○　一四八八
諸王初見

女王初見　一四八九
諸王制度　同
待遇　一四九二
叙位　一四九三
任官　同
食封　一四九四
時服　同
季祿　一四九五
女王賜祿　一四九六
孫王爲親王　一四九七
諸王賜姓　一四九九
諸王爲人臣嗣　一五〇二
女王婚嫁　同
除王名　一五〇五
雜載　一五〇六
○　一五〇七
皇親妃

古事類苑

帝王部二十五

皇親下

入道親王法親王

〔官職難儀〕法親王は、法中にてあるなり、それに差別あり、御出家以前、先俗名にて親王宣下ありて、さて御出家あるをば、入道。親。王。と申て規摸とせらるゝ也、御出家已後宣下あるをば、法。親。王。と申、さりながら入道親王をもその御義勢にあり、さりながらおもてむき法親王とも申事は勿論なり、

皇子出家

〔元亨釋書十五〕釋開成、光仁帝子、桓武之兄也、幼敏穎、而志佛乘、上甚鍾愛、天平神護元年正月一日潛出宮入勝尾山、疊石爲塔、禪宴其側、二月十五日仲算二師經行山中、〇中略即日就二師剃落受戒、〇中略天應元年十月四日手執香爐向西低頭而寂、壽五十八、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年十二月丁亥、三品上總太守基貞親王上表曰、臣基貞言、臣近披肝膽遠叫形闕、九重隔深、未蒙矜許、臣聞人心所欲、上天或從之以仁、物性攸偏、明主不強之以化、故唐堯道洽、皮冠未妨箕嶺之遊、漢祖風高、羊裘猶全富春之槩、臣幼有厭俗之志、緣切聖主之恩、矯性勵心、强歯簪紱、欲盡忠勤而獻勲、猶苦稚生之不堪、至今已沉痼疾、不復全人、即知天授之攸鍾、遂難以人事矯激、伏惟聖主陛下、仁超飛帝、德邁輪王、既能鑒因果而不疑、冀賜感宿業之攸速、又臣幸以頑質厚被聖恩、知在此身、終難報答、但望出家功德、念佛勝利、雖戒行不全、而或補萬一、若更褒頭髮、再塵印章、則生爲失志之具、臣死爲含恨之愚鬼、不任懇切之至、重亦拜表以聞、許之、

〔文德實錄〕仁壽元年二月丙寅、无品常康親王落髮爲僧、親王者、先皇〇仁明第七子也、母紀氏、少而沉敏、風情可察、先皇諸子之中、特所鍾愛、親王追慕先皇、悲慟無已、遂歸佛理、求冥救也、

〔三代實錄清和〕貞觀元年五月七日壬戌、四品守彈正尹兼行常陸太守人康親王出家入道、上表曰、臣人康言、身居雲漢之末、才無涓流之效、空備簪纓、徒縈疾病、中謝臣欲遂頑怯於聖日、不盧幽人長往之蹤、將盡筋骨於明時、豈歸眞如寂滅之道、然而蒙昧之身荷榮顯、鬼必瞰其滿盈、尊崇之地處虛贏、天宜奪其年算、斯乃臣所以一寒一暑、膚腠作搆患之機、或晦或明、心肺皆養痾之府者矣、臣今年二月、熱發甚篤、醫藥無所施其方、針熨遂不通其術、即知魂遊岱岳、九原多一死之悲、夢上鈞天、七日無再生之効、綿綴之間、纔發此念、出家功德、免三途苦、仍先請二師、已受十戒、形猶禿丁、服是僧祇、豈計非更生之藥、起朽質於玄廬、無返魂之香、招飛精於鬼錄、此乃如來護念、菩薩加持之力矣、已得蒙其冥助、不得背其深期、伏望被陛下之殊私、爲梵門之禪侶、將使金魚脫佩、長襬紫服之粧、銀驄伏櫪、永罷繡衣之職、陛下若遇臣厚者、思拾獲其保全、若矜臣優者、宜獎収其封職、不勝荒迷之至、謹拜表以聞、詔、人康親王辭其官爵、歸於釋侶、宜准國康親王、収其品封、但本封舊、幷帳內資人、准無品例充之、人康親王者、仁明天皇之第四子也、承和十五年正月叙四品拜上、總太守、仁壽二年遷彈正尹、齊衡四年兼常陸太守、親王自少年時、有歸大乘道之意、今謝病遂本懷焉、

〔續日本後紀仁明〕承和二年正月壬子、平城舊宮處水陸地三十餘町、永賜高岳親王、親王者、天推國高彦天皇〇平城第三子也、大同年中、未少登儲貳、〇中略遂遭時變、失位、落髮披緇、位于東寺、

〔三代實錄清和〕貞觀四年十二月廿五日己未、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵奏言、〇中略親王〇高丘昔搆堂舍之地、今來荒廢基趾猶存、〇中略

〔伊勢物語〕昔たかきこと申女御おはしなしけり、うせ給ひて七々日の御わざ安祥寺にてゐけり、其御わざにまうで給ひて、かへさに山しなのせんじのみこおはします、その山科の宮に、〇中略まうで給ひて、〇下略

〇按ズルニ、せんじのみこトハ、仁明天皇ノ皇子人康親王ナリ、

〔日本紀略醍醐〕延喜二十年閏六月九日、一品式部卿是忠親王出家、號南院親王、

〔日本紀略後一條〕寛仁三年三月某日、師明親王、〇性信於仁和寺出家、于時童

〔釋家官班記〕入道親王

仁性信仁和寺大御室、寛弘八年十月五日立親王、七歳俗名師明、寛仁二年八月十九日出家、十四大僧正濟仁爲師、

仁覺性紫金臺寺御室、大治四年十月廿四日出家、十二歳俗名保延六年六月廿二日出家、十三歳

山尊快後鳥羽院御子、山梨本承圓僧正弟子、二日爲親王、俗名成建保二年十二月十

山道覺後鳥羽院御子、山青蓮院、號西山宮、承廿日爲親王、俗名建保四年六月廿日

山尊圓伏見院御子、青蓮院、延慶三年六月廿六日出家、十三歳應長元年六月廿六日出

寺尊悟伏見院御子、圓滿院、延慶三年六月廿八日出家、十四爲二

東性勝後宇多院御子、大覺寺、俗名吉岑、永正和二年三月十八日出家、十三

法仁後醍醐院御子、法守親王弟子、

山尊道後伏見院御子、曆應四年七月廿四日出家、

爲二親王一、名十歳俗名同年同月廿九日出家、

已上山門園城具載入數、於仁和寺者、覺性以後皆入道親王也、

〔初例抄〕入道親王始

大御室性信〇三條皇子師明

〔山槐記〕安元元年八月十六日、今日法皇〇後白河若宮（承仁建春門院御猶子、實遊女一藏腹、號丹波局、御年七歳、藏人右少辨親宗奉養之、爲天台座主權僧正明雲顯通卿子、弟子、始令渡彼房給、予爲亘從、參之由、先日內々自女院有此仰、申可送御教書、已刻參院御所七條殿、着直衣、乘侍從兼口車、頗馴之故也、差綱車副一人、遣之、着當色、牛童同、虫襖上下、雨皮持退紅笠持等、當色新調、雜色十一人、但御棧敷前渡七人皆垂括、午刻牽御車庇

御車、袖外有レ畫之御車也　於寢殿東廊南面、新大納言國實候二御簾若宮御例御直衣、其色甚濃、御奴袴二藍龜甲二倍織物色々文、女郎花單重、濃下袴、無二引部一、幾乘御之間如二蹲居一、先出二東中門外一、宰相中將云、無二品位一、又非二親王一、而公卿可レ奉レ居二御所一、被レ奉二出立一女院有二御猶子之儀一、不レ可レ有二式乘一歟、他人不レ居、只隨レ便可二斟酌一者、相公云、可レ然事也、此間殿留御車、大納言候二御車後一、以二前駈一令レ立二御榻一、脫二沓於地一、上自二簀子一御簾、所々參入之由不二申御一、不定之體可レ存事歟者、大納言前駈有二二人一、皆着二布衣一、猶可レ着二衣冠一、車遙在二公卿車後一、牛童遣レ之、車副可レ遣歟、予幷宰相中將於二馬場殿北方一乘レ車、宰相中將車副賜二當色一、牛童同薄色、上下、雨皮持笠持裝束、顏舊車副可レ遣歟、藏人右少辨親宗、右衞門權佐、騎馬候二御車後一、右近將監秦兼頼同候御車後、次公卿車也、出二南殿西面北樓門一、北門〇恐衍行、更入二北殿西面南方樓門一、渡二御棧敷前一給、御棧敷在二西門腋一、仍出二御此門者、御見物之門雖レ調二行列之故一、遙令レ廻二馬場方一給也一、出二北方西面樓門一、經二河原瀨々橋一、京極大路北行、三條大路東行、此間所々有二見物車一、大納言於二門外一下二御車一、先摔二御下簾一、卷上御、立二揚上一、御車輦中門廊、大納言被レ候二御簾一、此間予相公入二門下御之間一、即昇中門廊、若宮經二透渡殿一、入二寢殿南庇東向障子一給、座主着二香染一、兼母屋西方東向被レ座、其內儀不見及、南庇御簾被レ垂也、公卿著二寢殿東庇座一、殿上人等在中門南廊座、源大納言定房被レ座二北面簾中一、依レ座主親昵、內々被レ來訪歟、供二御膳一、陪膳權少僧都實修云々、頃之依二右少辨命一、大納言以下移著二寢殿東北廊一、〔雜居二供菓子八種飯油物梨子柿菱野老等一、糗糖居二前方一、中居二菓子一、不レ似二常鉢一歟、依次飯次菜二高坏一、今四本也、人人着レ座之後、卷二一獻居一、冷汁二下箸一、二獻居二熱汁一、三獻居二粥漬一、伏箸復二本座一、役人僧也、此所非二御前一、強非レ優事歟、今案座主若以二凡人一、雖レ准レ歟、聊可レ有二會釋之詞一歟、〕被レ獻二御贈物一、曾證大師御手跡、納二銀筥一、裏二紫地錦一、以二青糸一結レ之、付二銀松枝一、源大納言被レ取之云々、先年號二院道一、人爲レ送二、此座主弟子、實成綸卿子云云、仍座主被レ奉レ送、仍被レ改二彼儀一、以二俗被一獻云々、右少辨取之賜二御共廳官一、次座主令レ着二御車於寢殿南階間一、大納言候二御車簾一、此間殿上人騎馬、予相公下二立中門外子時小雨、上下擁レ笠、但御車不レ覆二雨皮於河原一雨止、經二本路一還給、今度不レ廻二馬場一、直令レ入二七條殿西面南門一給、入二中門一、着二御車所一也、予相公不レ進出南庭、下御之後昇中門廊、此後上下退出、

〔百練抄八高倉〕安元二年十月廿三日、上皇〇後白河若宮御室御入內、是依爲二主上御猶子一也、

法親王宣下式

法親王

〔愚管抄七〕宮たちは入道親王とて、御室の中にも有がたかりしを、山にも二人〇順德皇子、尊覺及皇曾孫承鎭、ならびておはしますめり、新院〇後堀河當今〇後堀河又二宮三宮の御子なども云て、數もらずをさなき宮々法師法師にと、師共の許へあてがはるめり、

〔孝亮宿禰記〕慶長六年三月五日、今日親王御方、中山大納言之女、大典侍局腹也、〇良仁仁和寺御入室、烏丸大納言、廣橋大納言、中山中納言、勘修寺宰相、上冷泉、五條、予已上七人供奉之、於二仁和寺五獻有之、親王御方只有二御落涙一、漸院家計有二御對面一、夕陽人々歸家、

今迄正親町院御所、親王爲二御座所一、今日令出二彼御殿一給之時、供奉人々各落涙也、〇又見二義演准后記一

〔夕拜備急至要抄下〕法親王宣下

日次　上卿大臣多奉行、大辨、中少辨又有レ例、　勅別當法親王或仰之或不レ仰之、　官外記　親族拜一向無レ之　仰詞以二尊圓一、〔後鳥羽皇子、宣令爲二親王一之時如レ此、〕後建保、祖父奉行

〔本朝世紀〕康和元年正月三日丙午、法皇〇白河子覺行蒙二親王宣旨一、法興院太政大臣〇藤原兼家出家之後准三宮、入道師明親王叙二一品之等例也、十一日甲寅、被下二親王宣旨一、覺行上卿左大臣〇源俊房

〔續世繼八腹々の御事〕仁和寺に覺行法親王ときこえたまひしは、白河の院のみこにおはす、御ぐしおろさせ給て、やう〳〵おとなになら給はむに、いとかしこう〳〵しくおはしければ、さらに親王の宣旨かぶり給とぞきこえ侍りし、おはします御むろとておはしましゝは、三條院の御子師明親王ときこえ給し、まだちごにおはしまして、御子の御名えたまひければ、法師のゝちも、親王のせんじかぶり給はず、その宮につけたてまつりたまひしに、御でしのみや〇行覺はわらはにても、親王の御名えたまはねども、親王のせんじかぶり給へり、後二條のおとゞ〇藤原師通出家の後は、例なきよし侍りけれども、白川院、內親王といふこともあれば、法親王もなどかなからんとて、はじめて法師ののち、親王ときこえ給しなり、かくてのちぞうちつゞき、いづくにも出家の後の親王きこえ、

給める、

〔後二條關白記〕康和元年正月三日丙午、有二行幸召仰事一、○中略有頃還御、被レ仰二賞事一、仁和寺宮○覺行被レ下二親王宣旨一、

〔初例抄上〕法親王始

仁和寺御室　康和元年正月三日、仁和寺御室令レ蒙二親王宣旨一、御年二十五一　鳥羽殿朝觀行幸、○堀河仙院白河御賞也、法親王初例也、此日御室○覺行參入、法興院大相國○藤原家出家後蒙二准三宮之宣一、令レ持二院御居箱一、以二件例一今被レ叙二親王一云々、○中略御出家以後蒙二親王宣旨一初也、仁和寺御室白川院御子、自二少僧都一蒙二親王宣旨一例

少僧都道深○後高倉皇子　金剛光院是也、承久元年月日任、具在レ別、

僧正最雲○堀河皇子　保元三年三月一日日蝕御祈、於二中堂七佛藥師法一賞蒙二親王宣下一、

〔古事談三僧行〕白川院御時、中御室覺行御修法勤行間、初夜時ニ令レ昇給タリケルニ、此佛キト供養シ玉ヘトテ、諸人不レ見知之繪像一鋪ヲ被二獻之一、即密密有二御聽聞一云々、奉レ掛二其像於本尊前一、ヤガテ令二供養一給テ、新被二圖繪一供養給ヘリ、常具利童子トテ、其天ノ功能、本誓目出タク令レ釋給ヘリ、爲レ奉レ試俄有二此儀一云々、御感之餘、後朝被レ下二法親王宣旨一云々、法親王之始也、

〔中右記〕長治二年十一月十九日、從二殿下一○忠實藤原被レ仰云、去夜亥時許、彼仁和寺二品覺行親王、已以入二滅于仁和寺新造北院一、年卅一云々

法親王者、太上皇○白河御子、母前大貳經平女也、往年出家、從二寬意權大僧都一深傳二眞言道一、其後頻關二勘賞一、蒙二親王宣旨一、幷叙二二品一、關二巡給一也、出家之後親王宣旨、始二於此人一、可レ謂二希代之例一矣、抑親王誠是佛日之光華、法門之棟梁也、加之言語分明、文章優妙也、云二容體一、云二心性一、誠叶二大器一、依之威滿二天下一、名聞二海外一、總受二病之後二十餘日一、遂以入滅、吁嗟哀哉、

〔中右記〕天永三年十二月廿七日、○中略次召仰、頭辨來仰、以二行信一可レ爲二親王一者、是院○白河御子、仁和寺之宮也、○覺法出家以後有二親王宣旨一也、大將仰下、左大辨重資也、

〔續世繼六志賀の御禊〕待賢門院○鳥羽后璋子、中略うみ奉り給へる第五のみこは、本仁の親王と申し、わらはより出家し給て、仁和寺の法親王○覺性と申なるべし、ささばらのみや、法師にならせ給ふことありがたきことゝ申せども、佛の道をおもくせさせ給、いとめでたきことなるべし、この宮いとよき人におはして、眞言よくならひ給ひ、御てもかゝせたまひ、詩つくり歌よみなどもよくし給き、

〔百練抄仲恭二〕承久三年十月十三日乙丑、權僧正尊性權少僧都道深、宜レ爲二禪定仙院○後鳥羽親王之由、藤大納言師經被レ宣二下之一、

○按ズルニ、尊性道深ハ、竝ニ後鳥羽天皇ノ同母兄守貞親王ノ子ナリ、故ニ後鳥羽天皇ノ皇子トナシ親王宣下アリシナルベシ、

〔百練抄後十五嵯峨〕寬元元年十月廿七日庚子、當今○後嵯峨御弟宮、令レ渡二三條宮一給御出家、公卿扈從、雲客騎馬、

〔百練抄後十六深草〕建長元年正月廿八日庚子、上皇○後嵯峨若宮令レ入二圓滿院宮一給、御弟子之儀也、卽今夜御出家、同助　二月十五日丁巳、法親王宣下也、

〔勘仲記〕弘安七年二月十日己丑、及晚參二殿下一○藤原平、內覽事、今夕法親王宣下之由所レ申入也、次伺申立親王御參事於左大將殿御方、件日有二御故障之由被一レ仰下一、且入見參申了、次參二內相一觸女房、法親王宣下之由申入、上卿辨散狀所レ進入也、○略○中中院中納言具房參入、經二床子座前一著二奧座一、○中小時上卿立二奧座一著二端座一、○中略次予又參、軾仰云、徽音、上聲、卿聞程也、以二法印權大僧都仁惠宣一令二親王一ヨ、上卿被二氣色一、次右廻

退入、上卿召官人、被仰辨可召之由、左中辨信輔朝臣參軾奉之、辨於宣仁門外召史仰之、史康有立留辨前一揖奉之、又一揖退、次予歸昇小板敷參御所方、小時退出、仁惠故院〇後嵯峨宮撿按宮御弟子云々、法親王事、以卿忠世朝臣奉行、今夕所相語予也、〇中略今夕不被仰勅別當、且近例如此、

建長四年八月廿八日

法親王宣下　以權大僧都尊助〇土御門皇子宜爲親王

文永十一年三月二日

法親王宣下　前大僧正澄覺〇後鳥羽皇孫宜爲親王

〔門跡傳 尊〕日光御門跡

尊敬親王

後水尾院第四皇子、寛永廿一、十一才親王宣下、慶安元、三、四叙二品、十五才同九、移東叡山、

公紹法親王

有栖川幸仁親王息、光格天皇御養子、文政十、三、廿五爲親王、四、廿五入室里坊、即日得度、六、二下向關東、

〔門跡傳 坤〕知恩院御門跡

良純法親王

後陽成院第八皇子、元和元、六、廿八征夷大將軍家康公爲猶子、智恩院御門跡最初、寛永十九、十二、十六廿九才爲親王、

尊統法親王

有栖川幸仁親王息、靈元院御養子、元祿十一、八、十三智恩院相續、寛永三、十、三常憲院殿〇德川綱吉爲二猶子、同四、三、廿九爲親王、十二才〇節略

〔百一鈔〕寛永三年十月三日、仙洞〇靈元御養宮、元有栖川宮之宮也、知恩院門主御儲也、今日大樹〇德川綱吉御養子云々、先々每節爲大樹御養子、居知恩院門主云々、

〔門跡傳 坤〕勸修寺御門跡

尊信法親王

常磐井一品親王恒明息、龜山法皇孫、後醍醐帝御猶子、

寛寶法親王

伏見殿貞建親王息、延享二、十、二爲櫻町院御猶子、同三、五、八爲親王、同十、八入寺得度、

〔雲上明覽 文久年版 三〕御門跡方

輪王寺宮號日光宮

輪王寺准后慈性親王〇御宗旨天台、光格天皇御養子、實有栖川故韶仁親王御子、一品、

毘沙門堂御無住〇御宗旨天台、輪王寺宮御兼帶、

仁和寺宮〇御室御所、又御室宮、

仁和寺入道純仁親王〇御宗旨眞言、仁孝天皇御養子、實伏見入道親王御子、一品、

大覺寺御門跡稱二嵯峨一、嵯峨山稱二嵯峨一、嵯峨院又稱二嵯峨一嵯峨御所、嵯峨殿一、

大覺寺御無住〇御宗旨眞言

妙法院宮號二新日吉御門跡一

妙法院御無住〇御宗旨天台

聖護院宮

聖護院雄仁入道親王〇御宗旨天台、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御子、一品、

照高院御無住〇御宗旨天台、聖護院宮御兼帶、

青蓮院宮

青蓮院御無住　御宗旨天台

知恩院宮

知恩院入道尊秀親王　御宗旨淨土、今上（孝明）御養子、大樹公御猶子、實伏見入道禪樂親王御子、無品、

勸修寺宮　醍醐帝御祈願所

勸修寺御無住　御宗旨眞言

梶井宮　圓融院御門跡、又梨本御門跡、

梶井入道昌仁親王　御宗旨天台、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御子、二品、

曼殊院宮

曼殊院御無往　御宗旨天台

圓滿院宮　號二平等院狛櫻井一

圓滿院御無住　御宗旨天台

孫王爲法親王

【釋家官班記上】孫王親王例

山　澄覺親王　後鳥羽院御孫、雅成親王息、文永十一年三月二日叙二前元服一、梨本門主、尊覺親王弟子也、孫王親王初例也、

山　承鎭親王　順德院曾孫、忠成王孫、三位中將彥仁王子、文保元年叙二正三位一、梨本門主、後宇多院御猶子、尊胤親王師匠也、叙二

內親王入道

【續日本後紀十九】嘉祥二年閏十二月庚午、此月四品安勅內親王入道上表還二俗品一許之、

【續日本後紀二十】嘉祥三年二月辛亥、勅、四品安勅內親王、依レ願令二入道一、宜二封戶及帳內資人品田收一公、但无品本封帳內資人依レ舊行之、

【日本紀略一醍醐】延長三年三月□日、三品綏子內親王落髮、

【日本紀略十二條】長和四年四月廿六日乙亥、一品資子內親王薨、先レ是落飾　五月十日己丑、奏二資子內親王

薨由一上宣一云、件內親王出家人也、有二一品字一否、雖レ然不レ改二一品字一、

比丘尼御所

【雲上明覽文久三年版】比丘尼御所

大聖寺宮

大聖寺御無住　御宗旨禪

寶鏡寺宮

寶鏡寺御無住　御宗旨禪

曇華院宮

曇華院御無住　御宗旨禪

光照院宮

光照院御無住　御宗旨四宗兼學

靈鑑寺宮

靈鑑寺宗諄入道女王　御宗旨禪、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御女、

圓照寺宮

圓照寺文秀入道女王　御宗旨禪、今上（孝明）御養子、實伏見入道禪樂親王御女、

林丘寺宮

林丘寺御無住　御宗旨禪

中宮寺宮

中宮寺尊澄成淳女王　御宗旨眞言律、今上（孝明）御養子、有栖川故一品親王御子、內實伏見故貞敬親王御子、

【折たく柴の記中】廿七日○寶永六年正月　に參し時に、なた封事を奉る、其事の大要は、○略中當家の神祖、○德川家康　天下の事をゑろしめされしに及びてこそ、朝家にも絕たるをも繼ぎ、廢れしをも興さ

せ給ふ御事共はあるなれ、さかはあれど、儲君の外は、皇子皇女皆々御出家の事においては、今もなほおとろへし代のさまにかはり給はず、凡匹夫匹婦の賤しきも、子を生ては、必らず其室家あらむ事を思ふ、これ天下古今の人の情なり、また今農工商の類だにも、男には其資財をわかち、女には其婚嫁をもとむ、ましてや士より以上、ことく〳〵くみなさからざるはなし、かゝる世のならはしとなりて年久しければ、朝家には今まで申させ給ふ御事こそなからめ、此等の御事ねがはせ給ふべき所とも思はれず、たとひ又朝家には申させ給ふ御事こそなからめ、これらの御沙汰なからむ事、上につかふまつらせ給ふ所をつくされしとも申べからず、當時公家の人々、家領のほどもあるなれば、皇子立親王の事おはしまさむにも、いかほどの土地をなゐらせらるべき、皇女御下嫁の事おはしまさむにも、いかほどの國財をか費し給ふべき、このゆゑに國天祖の御後のかくのみおはしまさむに、當家神祖の御末は、常盤堅盤に榮えおはしまさむ事を望まむは、いかにやはさふらふべき、されど某が申すごとくならむには、これより後代々の皇子皇女、其數多くおはしまさむに至ては、天下の富もつがせ給はぬ所ありぬべしなど申す事も候はん歟、古より皇子皇女數十人おはしませし代々もすくなからねど、それらの御後、今に至り給ふは、いくばくもおはしまさず、天地の間には、大算數といふものゝある也と古の人は申たりき、これ等の事は、人の智力のおし量るべき所にあらず、只理の當否をこそ論じ申すべけれ、或は又皇子の御後多からむには、つひには武家の御ため、不利の事ども出來ぬべきなど申す事もあるべきにや、高倉宮の令旨によりて、諸國の源氏起りし事もあれど、これは平相國入道のひが事のみ多くして、家滅びぬべき時にあたれるなり、もし此等の事を以て誡とすべきも、高時入道滅びし時に令旨なされしは、梨本の御坊〇讓貳親王にはおはしまさずや、さらばたとひ御出家の御身といふとも、それらの事あらじとは申すべからず、これらはたゞ武家

入道親王法親王叙品

御政事の得失にこそかゝり給ふべけれ、すべて此等の事よく〳〵御心せさせ給ふべき所也と申せし也、此封事御覽の後、仰下されしことわりあり、されどこれ國家の大計也、よく〳〵御思惟有べしと仰下されしに、やがて今の法皇〇東山の皇子秀の宮とか申す御事、親王宣旨あるべき由を申させ給ひたりけり、

法親王待遇

〔海人藻芥〕法親王叙品之事

二品ハ御室バカリ叙之、而近代諸門跡連綿歟、一品高尾御室〔後深草院皇子性仁〕於僧中者始叙之、而又大覺寺〔龜山院皇子寬尊親王〕青蓮院〔後伏見院皇子尊道親王〕令望叙之云云、

〔仁和寺御傳〕大御室　性信、三條院御四御子、〇略申永保三癸亥年三月十三日於禁中〔六條院〕内裏修孔雀經法、同二十日直叙二品、〔御年七十九、僧位始也、正曆元攝政兼家出家後、被蒙准三宮宣旨、准三此例令叙給云云、〕

〔長秋記〕大治四年正月廿二日辛丑、大理云、仁和寺二品親王、〇覺法每年任諸國掾之由所示給也、如此事如何、權大納言預別給之人可然、於巡給別給可給巡年歟、能可被尋前例、攝政聞此事云、問外記可被一定歟、又別當云、如此法親王別當、參議已上可被補歟如何、下官云、入道師明法親王別當、參議師成卿也、覺行法親王別當、大納言公實卿也者有何坊哉、凡親王男女童後皆同事也、法親王何別沙汰候哉、權大納言云、尤可然者、

〔園太曆〕貞和二年八月三十日、後聞仁和寺一品御室寬性法親王今夜子剋御入滅、御年五十八、閏九月一日、今日評定延引之由有御敷書、一品御室事故歟、且爲驚申此事、申剋許參院、良久有出御入見參、雜訴已下之事、經顯卿尋沙汰、法親王有事之時無停止例云々、又御百首披講事延否未定云々、

依仁和寺宮事、廢朝錫紵事被尋例云々、當今〇光明者上皇〇光嚴御猶子也、仍今之□令隔給歟、此例清隆後日持來、仍續之、其外不審候間尋大理卿□爲俊卿奉行被尋云々、

依仁和寺一品法親王御事、廢朝錫紵有無例事、

無品定惠法親王、今上後鳥羽御伯父建久七年四月十八日御事、同年六月廿六日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ止ニ音奏一之由被ニ宣下一、同日御錫紵、

無品承仁法親王、今上後鳥羽御叔父同八年四月廿七日御事、同年五月四日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ止ニ音奏一之由被ニ宣下一、〔不レ可レ有ニ廢朝以後政始一之由被レ仰ニ外記一〕

無品仁助法親王、今上龜山御伯父弘長二年八月十一日御事、同月廿四日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ止ニ音奏一之由被ニ宣下一、同日御錫紵、

二品圓助法親王、今上後宇多御伯父弘安五年八月十二日御事、同年十月五日有ニ薨奏一、廢朝三箇日之由被ニ宣下一、同日御錫紵、

二品覺雲法親王、今上後醍醐御伯父元亨三年十月十八日御事、同月十九日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ止ニ音奏一之由被ニ宣下一、〔不レ可レ有ニ廢朝以後政始一之由被レ仰ニ外記一〕同日御錫紵、

右例依レ仰注進如レ件

貞和二年閏九月十五日　　左大史小槻清澄

依ニ仁和寺一品法親王御事一、禁裏廢朝、御錫紵可レ爲ニ何事一哉事、粗引ニ勘先規一候之處、御室二品守覺法親王建仁二年八月廿五日御事、聖護院無品靜惠法親王同三年三月十二日御事、兩法親王後白河院皇子、後鳥羽院皇子、後白河院御叔父、帝〔土御門〕御從祖父、御室三品道法法親王建保二年十一月廿一日御事、後鳥羽院皇子、後鳥羽院御叔父、帝〔後深草〕御從祖父、二品道助法親王實治二年正月十六日御事、後鳥羽院皇子、後嵯峨院御叔父、帝〔後深草〕御從祖父、件年々廢朝御錫紵事、外記無所見、口可レ被ニ得其御意一給一哉、師茂誠恐謹言、

後九月四日　　師茂請文

一二等法親王者有レ故時、有ニ廢朝錫紵例一、

高倉院

仁安三年四月廿五日無品道惠法親王薨、帝御叔父、鳥羽院皇子、五月廿一日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ停ニ音奏一之由被レ仰レ之、不レ可レ有ニ廢朝以後政始之旨被レ仰レ之、今日御錫紵三箇日、

嘉應元年十二月十一日二品覺住法親王薨、帝御叔父、同院皇子、同廿一日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ止ニ音奏之由被レ仰レ之、今日御錫紵、〇中略

四條院

正應元年九月三日三品尊性法親王薨、帝御伯父十月廿二日有ニ薨奏一、廢朝三箇日、可レ止ニ音奏一、警蹕之由被レ仰レ之、今日御錫紵卽除御、

龜山院

文應元年十月廿三日無品尊守法親王薨、帝御嵯峨院皇子、

伏見院

正應三年八月十八日無品忠助法親王薨、帝御叔父、後同院皇子、同六年二月三日無品最助法親王薨、帝御叔父、同院皇子、永仁三年七月廿七日無品應助法親王薨、帝御叔父、同院皇子、

後伏見院

正安元年六月七日二品深性法親王薨、帝御叔父、後深草院皇子、

已上件年々、無ニ薨奏廢朝御錫紵等事一乎、

閏九月七日　　大外記中原師茂

〔執次詰所本御系譜〕

法親王母代

靈元院

一道仁法親王

實伏見式部卿貞致親王男　元祿九年十二月廿五日爲御養子、養母新大納言局、

守恕法親王

實京極兵部卿文仁親王男　享保三年六月廿四日爲御養子、准母敬法門院（東山母）

桃園院

深仁法親王

實閑院太宰帥典仁親王二男　寶曆十年八月廿八日爲御養子、准母恭禮門院（桃園后富子）

光格天皇

雜載

承眞法親王

實有栖川中務卿織仁親王男　文化五年三月十四日爲御養子、以民部卿典侍賴子爲養母、（節）

略

〔小河一敏筆記〕岩倉具視公ノ御說ニ、御養子親王ハ、燕寢侍御ノ女官ヲ御母代ニ定メラレ、眞ノ母子ノ如ク親昵ニ音信等アリ、參內ノ時ニモ御母代ノ局ニ通リ、時々饗應ナドモアリタリ云云、

〔桂宮御自記〕靈元院御代迄ハ、御養子の事停止被仰出、皆御猶子也、然所女中之沙汰歟、御養子始る、法親王之事故、次第はかいろう可爲處、御猶子之法親王より御養子は上座云云、

〔葉黃記〕寬元四年十一月十五日庚午、櫻井宮（覺仁）被補熊野三山撿挍、法親王補之、今度始之前大僧正道慶、依入道大納言御吹擧被蒙御約束了、今特移之間相違歟、吉田中納言書院宣（後嵯峨）進之件書樣在裏、不似先例歟、

〔和長卿記〕明應三年八月一日丁巳、秘傳云、一休和尙者、後小松院落胤皇子也、世無知之人、

〔孝亮宿禰記〕元和七年十一月十五日壬子、昨今古筆求出、（略）中一休和尙等筆也、（一休後小松院第一皇子諱宗純云云稱）

純藏主、正月元日出降誕宮也、

〔基量卿記〕天和二年十月廿八日、早天向勸修寺、今日門主渡也、當今（靈元）一宮、（寬清）中納言典侍（小倉大納言寬起卿女）依御生質不宜、去年大覺寺へ御弟子ニ可被遣之由仰之處、彼宮出家之義無御素意之由達而固辭之間、小倉大納言幷中納言典侍等同前ニ辭申時宜、叡慮不快之由、去年小倉父子三人流罪幷親族之輩閉門了、然處大覺寺殿より、彼宮之義申請事迷惑之由、固辭被申之間、今度勸門死去、件寺無住之由、彼宮ヲ被遣了、慈尊院僧正、勸門院家也、依之諸事令申沙汰、予彼僧正有內緣之間、可參訪由、兼日蒙仰之間參向了、

宮親王宣下、去廿五日有之云々、

著座公卿

前源大納言通義卿　日野中納言資茂卿　風早前宰相實種卿

刻限罷催之處、宮兎角無御同心之間、悲歎以外也、種々清閑寺大納言（房）、（熙）萬里小路、予等雖令申、無然、若今日御落髮無之時者、彌以父帝逆鱗可爲以外也、如形被遂行哉之旨申之間、衆僧等各參會、御覺悟之間、戒師慈尊院僧正被申旨、如此之御樣躰、中々於本堂難沙汰之間、於御居間可遂行也、先年仁和寺殿最樹院殿（後水尾院御兄）、（良仁）得度之時、如此之流例有之、如何可有哉之旨也、各申言、於例者可手足ヲ取、無理ニ令落髮了、誠先代未聞之事、不可說之事共也、及暮各退了、勅使梅溪中將（五種）、（五荷）被遣、本院使堀川宰相（康則）、新院使櫛笥中將（隆賀）等各參、無御對面也、

〔近世見聞錄〕天和元年辛酉、此一之宮（靈元子寬清）皇仁和寺へ御弟子に可被遣之由、主上御內意有之處、御出家之儀、御心に不被爲呼、大納言（小倉起）も無是非被存候由、然處仁和寺へ可被遣旨、勅使阿野

宰相を以て三度迄被仰遣之、大納言勅答兩度迄ハ、親王被爲思召切之由奏上、至三度兎角勅諚之趣可然ト申候ヘ共、親王御合點無之に付、九月十二日の夜、御側衆轉法輪右大將勘修寺中納言へ被仰付、禁裏附へ被内通、與力同心召連、兩勅使小倉大納言宅へ相越、早速寺へ不遣之段不屆被思召候、親王可相渡、其方父子は、閉門被仰付候由勅諚之旨申渡、直に飛鳥井隱居屋敷へ奉移、武士警固之由、右之儀に付、中園宰相、竹淵刑部大輔、鈛大納言、同中將、鷲津左京大夫、阿野宰相、右何も閉門也云云、五の宮（御年七〇東山）松木大納言之息女、新大納言之腹、此王子御位可被爲立旨、京都より注進之、【紳書】此立太子（〇東山）の御時、勅使關東へ參向有しに、其人に親しき關東の御家人詣て物語せしに、今度立太子の御事にて御下向の由、路次の御疲勞察入候、さて此度の御使こそうたてしき御事なり、抑天下の大體と申事を、何れも御存知なき故に、關東を始天下にて、朝廷へ歸し參らする樣をこそ知し召れね、某承り傳ふるに、一の宮には御障子に取付給ひて御歎きわりしを、其御手を引放て引立參らせて、御出家を成させ申、今の太子を立させ給ふ由、驚き恐入てこそ候へ、天子の第一の宮にてわたらせ給ふを、かくあらけなく引立參らせ、御心にも染まぬ御出家成させ奉りて苦しからぬ御事に侍らば、今一階押のぼせて、かゝる振舞致しても苦しかるまじき歟と存ずれば、さて淺ましき世には成下り候と涙にむせびて申されし程に、勅使も兎角の返答に及ばざりしとぞ、

諸王初見

○

【日本書紀二十天武四】四年三月庚申、諸王四位栗隈王、爲兵政官長、八年十二月戊申、由嘉禾、親王諸王諸臣、及百官人等、給祿各有差、十二年十二月丙寅、遣諸王五位伊勢王（〇略）等、巡行天下、限分諸國之境堺、

【光臺一覽】王とは、皇子にても皇孫にても、親王宣下なく、姓も不給は皆王と稱へ申候、叙位任官

有之候へば、官位の品に依て公卿王之字之品極り申也、白川殿之王ハ格別事也、

女王初見

【歷代皇紀】宇多天皇　元慶八年四月十三日爲源氏、（歳十八）任侍從、號王侍從、

○按ズルニ、宇多天皇當時孫王タリシヲ以テ王侍從ト云ヒシナリ、

【日本書紀二十天武九】二年二月癸未、天皇初娶鏡王女額田姬王、生十市皇女、

【日本書紀三十持統】五年正月癸酉朔、賜（〇略）中内親王、女王、内命婦等位、

【續日本紀一文武】三年正月甲申、淨廣參坂合部女王卒、

【榮花物語二樣々の悦】なことや、このごろの齋宮にては、式部卿の宮（〇平爲）の、女御（〇子婉）の御おとうとのなかのみや（〇子恭）ぞおはします、

【榮花物語十二玉村菊】あるがなかのおとみや（〇子婷）は、三條の入道一品宮（〇平爲）の御子にぞたてまつらせ給ひし、十ばかりにやおはしますらん、こたみの齋宮にぬさせ給ひぬ、

諸王制度

○按ズルニ、コヽニ云ヘル宮ハ即チ女王ナリ、

【榮花物語一月宴】朱雀院は、御子たちおはしまさざりけり、たゞ王女御（〇醍醐皇子保明女熙子）ときこえける御はらにえもいはずうつくしき女みこ（〇子昌）一所ぞおはしましける、

【源氏物語五若紫】内にても里にても、ひるはつくづくとながめくらして、くるればわう命婦をせめありきたまふ、

○按ズルニ、わう命婦トハ、皇族ニシテ命婦タルヲ云フ、

【令義解四繼嗣】凡皇兄弟皇子皆爲親王、（〇中略）以外並爲諸王、自親王五世、雖得王名不在皇親之限、

【六典二吏部】親王之子承嫡者爲嗣王、皇太子諸子並爲郡王、親王之子承恩澤者、亦封郡王、諸子封郡公、其嗣王郡王及特封王子孫承襲者、降授國公、

【續日本紀三文武】慶雲三年二月庚寅、准令五世之王、雖有王名不在皇親之限、今五世之王、雖有王名已

絕皇親之籍、遂入諸臣之例、顧念親王之恩、不勝絕籍之痛、自今以後五世之王、在皇親之限、其承嫡者、相承爲王、自餘如令、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年九月己卯、詔、皇親二世准五位、三世以下准六位、

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇略中五世王嫡子已上、娶孫王生男女者、入皇親之限、自餘依慶雲三年格、

〔日本紀略桓武〕延曆十二年九月丙戌、詔曰云云、見任大臣良家子孫、許娶三世已下、但藤原氏者、累代相承、攝政不絕、以此論之、不可同等、殊可聽娶二世已下者云云、

〔享祿本類聚三代格十七〕勅、依令五世之王、雖得王名、不在皇親之限、爰逮慶雲、昇居親限、如聞頑闇之輩、苟規微祿、携養庸流、名爲己胤、遂附屬籍、以汚宗室、非徒速禍於一己、固亦延黷於七廟、朕所以丁寧過於再三、曾不改悟、彌長奸濫、靜言其弊、深合懲清、宜停後格、一依令條、俾夫玉石殊貫、蘭芝不雜、主者施行、

延曆十七年閏五月廿三日

〔續日本紀二文武〕大寶二年五月辛未、勅、若五世王、自有辭訟、須受理者、特給座席、而與所分、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月己亥、五世王朝服、依格始著淺紫、

〔續日本紀八元正〕養老四年五月辛酉、制、皇親服制者、以王孫准五位、疎親准六位焉、

〔續日本紀二十稱德〕神護景雲元年四月辛巳、始授諸王四世者正六位上、五世者從六位下、其朝服用纁色、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年正月辛未、御大極殿受朝、文武百官及陸奥蝦夷各依儀拜賀、是日勳六等已上、身有七位、而帶職事者、始著當階之色、列於六位之上、六位諸王著纁者次之、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、〇略中豐前爲性簡慥、言語夸浪、

接物之道、爲人所避、尋常直於侍從局、品藻人物以爲己任、談啖消日、放縱不拘、諸王五世以下、帶五位者、法不聽著紫、豐前爲五世五位、著紫、爲有司所糺、然後著緋、

〔類聚符宣抄四〕右大臣宣、奉勅、自今以後、孫王諸王同色者、用下階孫王爲上、唯異色者如常例、

弘仁三年正月五日

〔續日本紀三文武〕大寶三年十二月甲子、始皇親五世王五位已上子、年滿二十一已上者、錄其歷名申送式部省、

〔類聚國史百七職官〕元慶五年五月十日丁巳、制、令正親司進四世已上諸王歷名帳於太政官、每有闕補隨令改正、一如式兵二省補任帳、下季祿符之日、即備於勘會、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應押署諸王計帳事

右得宮內省解偁、正親司解偁、撿案內、去承和元年造王親籍于今四十餘年、今省仰諸王年足、省符至者、勘會籍帳、早速申送者、須隨符到、勘會合不、而彼年以來、諸王籍帳無在司家、望請押署計帳、一通留司、然則勘據有便、假濫無聞者、省依解狀、謹請官裁者、大納言正三位兼行陸奥出羽按察使源朝臣多宣、奉勅依請、□下知左右京職、依件令行、若有依人愁與改判者、同待押署、然後判之、

貞觀十七年七月八日

〔延喜式三十九正親〕凡諸王計帳者、令造二通、司加押署、東京職判畢、一通留司、待年足符、即勘會申省、

〔延喜式三十九正親〕凡六位已下諸王死去者、喪家申司、司即申省、

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年三月十六日己巳、勅諸王喚辭准諸臣之狀、宣告文武百官、先是式部省奏言、依令三位四位五位六位、於太政官寮已上司及中國已下、各有喚辭、或稱大夫、或稱姓、今覩流例、只爲諸臣施此制也、於諸王則不論四位五位、總稱某王、商量事理、尊卑失序、望請稱六夫稱姓、一准諸臣、

待遇

以允貴名之禮從之、

〔日本書紀三十持統〕四年七月甲申、詔曰、凡朝堂座上、見親王者、如常、大臣與王、起立堂前、二王以上、下座而跪、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日、制、無位二世王、遇三位、下馬、七位已下、遇無位二世王、不下馬、

〔延喜式四十彈正〕一凡無位孫王逢三位已上、下馬、六位已下逢無位孫王、不下、

〔令義解二〕凡戶主、皆以家長爲之、戶內有課口者爲課戶、無課口者爲不課戶、〔不課謂皇親、謂四世以上、其五世王者、本陸五位、雖非皇親、理宜不課、六世王者、准本陸比五位、子、亦是不課、七世王者、雖絕陸比五位、孫、故輸調免之例、可得出仕、八世以下者、實陸已絕、免科賦役、一准白丁也、云云〕

〔政事要略五十九〕勅、〇中略夫王氏者、王號乃止於五世、賓蔭不過於六世、典制斯存、沿來浸久、今諸王等、以天河末流還少、液流若木下枝早虧榮拂、仍抗章表、殊祈優恤、凡所稱引抑亦可採、朕情在推惠、事尙德音、是以推校古今、聽其所請、宜七世以下計數、至于五世、課役蠲除、其旣賜姓者、不論先後、一依王蔭計、世容之、亦同此例、豈非糺合枝幹、式雍帝載之義乎、主者明之、稱朕意焉、

天長九年十二月十五日〇又見三代格、三代實錄、本類聚

〔三代實錄七清和〕貞觀五年十月廿七日丙戌、攝津國河邊郡人、九世散位正六位上川原公清宗、正七位上川原公清貞、從八位下川原公清方、十一世大膳大進正六位上爲奈眞人菅雄等五人之戶、並蠲課役、清永等、宣化天皇皇子、火焰之後、計其世數未可徵課役也、

〔三代實錄三十陽成〕元慶四年十月廿七日丁未、免攝津國河邊郡人九世從七位下川原公福貞、無位川原公福繼、有馬郡人無位川原公千被、河邊郡人十世從八位下川原公夏吉、大初位下川原公有利等五戶課役、福貞等自言、宣化天皇第二皇子、火焰親王、是川原公、爲奈眞人等之祖、謹檢天長九年十二月十五日詔書偁、〇中略爲奈眞人菅雄、川原公清永等、賴詔旨、貞觀五年閏六月十九日被免課役、福貞等未蒙恩澤、望請同被蠲除、許之、

○按ズルニ、本文ニ據ルニ、皇親ハ十一世ニ及ビ賜姓ノ後モ猶課徭ヲ蠲免セラルヽナリ、

叙位

〔續日本紀一文武〕三年六月丙午、淨廣參日向王卒、遣使弔賻、丁未、命直冠已下一百五十九人、就日向王第會喪、

〔令義解七公式〕凡應叙親王四品諸王五位、

〔日本後紀五桓武〕延曆十五年十二月丙寅、詔曰、皇親之蔭、事具令條、而皇室之胤、枝族已衆、欲加榮班、難可周及、是以進仕無階、白首不調、眷言於此、實合矜愍、宜其四世五世王、及五世王嫡子年滿廿一者、叙正六位上、但庶子者降一階叙、自今而後、永以爲例、

〔日本書紀三十持統〕五年正月癸酉朔、賜親王、諸臣、內親王、女王、內命婦等位、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年二月丙申、授從四位下海上王、智奴王、〇中略並從三位、正四位下山形王正四位上、

〔續日本紀三十桓武〕延曆四年五月癸丑、先是皇后宮赤雀見、是日詔曰、〇中略宜天下有位〇中略賜爵一級、

〔日本書紀二十天武〕八年三月己丑、吉備大宰石川王病之薨於吉備、天皇聞之大哀、則降大恩云々、贈諸王二位、

任官

〔官職秘抄上〕神祇官　伯　以孫王、若三四世王氏任之、　太政官〇中略　左右內大臣〇中略　一世源氏、二世孫王〇中略任之、

〔官職秘抄下〕諸道官、〇中略　大學頭、〇中略諸王或任之、諸王任例往代事也、已絕畢、〇中略諸王任例、實世、是行、高棟、未給姓以前也、

〔日本書紀二十天武〕九四年三月庚申、諸王四位栗隈王爲兵政官長、

【續日本紀七元正】靈龜二年四月壬申、以從四位下大野王爲彈正尹、

【續日本紀八元正】養老二年三月乙巳、以正三位長屋王〇中爲大納言、

【續日本紀九聖武】神龜元年二月甲午、以右大臣正二位長屋王爲左大臣、

【三代實錄四十九光孝】仁和二年五月十八日丙申、授無位在世王從四位下、于時在世爲伊勢齋內親王家別當也、

【職原抄上】神祇官　伯一人　昔者諸氏混任、或又大中臣氏任之、中古以來花山院御子、彈正尹清仁親王後胤相續、他人不任之、彼流四五品之時給源姓、雖任中少將等、任伯之日、復于王氏是近例也、

【帝王編年記十七花山】皇子清仁親王　此親王子、康資王神祇伯、昔者諸氏混任、或又中臣氏任、中古以來、彼親王流相續、他人不任之、

【三代實錄一清和】天安二年十一月十一日戊辰、無位坂子女王重子女王、並授從四位下、是寢御帳之女王也、凡天皇即位之日、擇王氏女有容儀者二人、充寢御帳之職、因而賜爵、他皆效此、

【一代要記一孝謙】小宅女王天平勝寶元年九月六日、以從三位三原女、小宅女王爲齋王、

○按ズルニ、女王ノ齋宮ト爲リ給ヒシ例甚ダ多シ、神祇部伊勢齋宮篇參看スベシ、

【令義解四祿】凡食封者、〇中略正一位三百戶、從一位二百六十戶、正二位二百戶、從二位一百七十戶、正三位一百三十戶、從三位一百戶、

【續日本紀三文武】慶雲三年二月庚寅、詔曰、〇中略案令諸王諸臣位封、自正一位三百戶、差降止從三位一百戶、冠位已高、食封何薄、宜正一位六百戶、差降止從四位八十戶、

【令義解四祿】凡皇親年十三以上、皆給時服料、春絁二匹、絲二絇、布四端、鍬十口、秋絁二匹、綿二屯、布六端、鐵四廷、其給乳母王者、謂二世王、其親王者不見令條、可有別式、若皇親任官、及絁四匹、絲八絇、布十二端、

食封　時服

【續日本紀十六聖武】天平十七年五月壬午、制、无位皇親給春秋服者、自今已後、上日不滿一百四十、不在給例、計上日七十、給春夏服、秋冬亦如之、但給乳母王、不在此限、又據格、承嫡王者、直得王名、不在給服之限、

【三代實錄十清和】貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、〇中略先是諸王自二世至四世、賜夏冬衣服、不限人數、隨年足符、出多少賜之、或至五六百人、是時載簿進官者四百餘人、豐前上疏曰、諸王給服人數不定、徒費帑藏、何無紀極、望請以當時所在爲定數、隨闕補之、不聽輒過從之、

【延喜式十八式部】凡皇親時服者、與季祿共給之、

【延喜式三十九正親】凡諸王年滿十二、每年十二月、京職移宮內省、省以京職移即付司、令勘會名簿、訖更送省、明年正月待官符到、始預賜時服之例、

【延喜式三十九正親】凡諸王給春夏時服者、二世王、絹六匹、絲十二絇、調布十八端、鍬三十口、四世王以上、並如令、正月廿日錄送省、秋冬准此、但以綿代絲、以二延代鍬、五口、鐵皆向大藏受之、不得遣人代請、

凡諸王有出家、停給時服、其女王節祿亦停、

凡賜時服王、定四百廿九人、待其死闕、依次補之、但改姓爲臣之闕、不補其代、隨即減定額數、

【續日本紀二十淳仁】天平寶字三年六月丙辰、參議從三位永上眞人鹽燒奏、臣見三世王已下給春秋祿者、是矜王親、而今計上日、不異臣姓、伏乞依令優給、勿求上日、

【令集解二十祿】令集解二十三延曆六年格云、六位諸王、任六位官者、依王祿、自今以後、永爲恒例、

【令集解二十祿】令集解二十三延曆二十年十二月十三日官符云、應職事諸王上日不滿預王祿事、右被右大臣宣偁、計日入祿、上日不足一無預祿是緣得官、還失其祿、事乖弘恕、準例諸王給祿、不勘上日、而今任官之後、計日入祿、上日不足一無預祿是緣得官、還失其祿、事乖弘恕、理須改易、自今以後職事諸王、上日不滿、宜給王祿、但不直本司、經二季以上、量情可責、宜解見任、

【享祿本類聚三代格六太政官符】

應職事諸王不直本司解却見任事

季祿

右造式所起請俾太政官去延曆二十年十二月十三日符云、職事諸王上日不滿、應預王祿、但不直本司、經二一季已上、量情可責、宜解見任者、案職制律云、以官當徒者、六位以下、以一官當徒一年、仍解見任者、今撿此律、六位以下諸王、不上卅五日以上、自須官當解任、而官符二季以上、乃可解任、此乖法意、加以解官之罪、於事不輕、而無奉勅字、若爲處分者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣宣、奉勅宣、改先符、經百二十日不直者、解却見任、永爲恒例、

弘仁十年十二月廿一日

〔三代實錄十七清和〕貞觀十二年二月二十日壬寅、公卿奏請減諸王季祿、兼立給祿定額曰、○略中伏見故從四位上豐前王等意見表、曰利國之政、節用爲先、今府帑稍空、貢賦少入、當停諸王之祿、存救弊之計者、臣等商量上表之旨、頗有可取、但專停之、則似疎皇親、全給之、則可闕國用、取捨之方、宜勤折中、又王氏蕃昌、萬倍曩日、計其祿賜、所費難支、伏望當時預祿者、四百二十九人爲定員、後生年足者、隨闕補之、但自願賜姓屬籍者、不以爲闕、重以去年炎旱、農民失望、聖上撤服御常膳、群下減食、封位祿而至于王祿、依舊不悛、求諸通論、政涉踳駮、事須准之、位祿同從減折、然則適時之要、理无二途、濟世之權、事從一揆、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、廿五日丁未、勅減諸王季祿四分之一、

女王賜祿

〔延喜式三十九正親〕凡給季祿、男女王、同世之中、有同名者、速令申換、載帳進之、但新名下注本名、

〔內裏式上〕八日〇正月賜女王祿、式十一月同

其日近衛次將、令所司鋪設於殿庭、安福殿前張幄二宇、積祿於版位南、紫宸殿南廂西戶外、建三尺畫障子、辨備御饌、謂菜子雜餠等、殿南廂西第三間安酒器、幷皇后御座饌及女御尙侍已下散事已上饌座、並謂着菜子等、其御座以西二許丈、設皇后御座、裝束之儀同御帳、但不立御帳、御座以東設女御以上座、用褥床子、其色隨人貴賤、立臺盤置銀筋匙、但饌各用私物、御座以東二許丈南北相對、立孫王尙侍典侍等床子、以下同褥代、又立臺盤、置白銅筋匙、及着菜床子、以下同東廂南北相對、立散事床子、以上同鋪褥代、又立臺子等、東第一間安酒器、事具別記、祿東頭少北進北面、立內侍床子、又西去八許尺、立女史床子、床子前立空床

子一脚、又以西一許丈、立掃部女孺床子二脚、前又立班祿臺一脚、用長床子、掃部座西南四許尺、立闈司床子、闈司西北去八許尺、立來著床子六脚、祿以西五許尺、更南折一許丈、立別當以下令史已上床子、自此以北樹板障子、辨備已畢、御紫宸殿、正親司引女王等、自月華門參入、女王先入就座、即唱名賜祿、下入就座、定執簿一々唱名、即稱唯受祿退出、其腸內外命婦謀或七日夕、或此日、或殿上、或庭、唯臨時勅裁之、

〔儀式八〕正月八日賜女王祿、儀十一月新嘗會亦同

其日內侍、於縫殿院點撿女王、○中略佑一人執簿、名薄唱曰、某親王之後、于時一祖之胤、皆下座稱唯、進就賜祿座、座定執簿一々唱名、即稱唯受祿退出、

〔延喜式三十九正親〕凡正月八日給祿女王、所司設座於殿庭、立幄二宇於安福殿前、積祿於版位南、亦供奉殿上裝束、天皇御紫宸殿、內侍率女官就座、本司官人、引女王、自月華門參入、女王先就幄下座、以世次爲序、次官人共趨就前庭座、佑一人執簿唱曰、某親王之後、即一祖之胤皆下座共稱唯、就庭中座、座定執簿一々喚名、女王即稱唯、進受祿退出、餘亦如之、其祿法、人別絹二疋、綿六屯、新嘗會准此、十一月

凡賜祿女王、定二百六十二人、其隨闕補代、代及改姓不爲闕、事並同上條、

凡給女王二節祿、見參簿、當日早旦奏之、

〔貴嶺問答〕嚴札之旨、謹承候了、二世以下四世以上、謂之女王、五世者自入命婦宮人之例、近年彼顯子之外無女王、仍祿事停止歟、但可尋先例事也、

〔中右記〕嘉承二年十一月十八日、今夕有王祿、左宰相中將忠教、右中辨顯隆勤之、是雖無節會、先例有王祿云々、

〔皇胤紹運錄〕

孫王爲親王

三條院

小一條院　諱敦明、長和五、正、廿九立坊、寬仁元、八、九辭、之、即授二院號一、

- 敦貞親王　三品式部卿、中務卿、爲二祖帝(三條)一子一、
- 敦元親王　爲二祖帝(三條)一子一、
- 儇子內親王　配二權中納言信家一、三條院爲レ子、
- 嘉子內親王　齋宮、寬德二、三、十ト定、

〔小右記〕寬仁三年三月五日、早朝宰相來云、故三條院女親王(皇后宮腹一被レ叙二三品一、當時院一〇小一條男女者左大臣女腹、女者前太政大臣女腹高松、)爲二親王一之宣旨下也、爲二故三條院王子一、今被レ下爲二親王一之宣旨云々、故花山院御子二人爲二故冷泉院王子一爲二親王一、依二彼例一所レ被レ行云々、已不二相合一之例也、所以者口冷泉院御口之時爲二彼王子一、而三條院崩已及二三箇年一、令二更爲一彼王子一如何、一時議奏、就二中高松腹生年產給一、以二崩後產給女王一、入二彼三條院王子一爲二親王一、天下如レ有言乎、

〔勘仲記〕弘安十年十月四日、諸卿著座、〇中略頭辨於二軾宣一下云、中納言源朝臣、〇惟康爲二親王一、令レ叙二二品一ヨ、上卿召二大辨一被レ仰レ之、〇中略次頭辨又宣下云、二品惟康親王宜レ令レ聽二帶劍一ヨ、〇中略抑孫王親王宣下、先例頗稀、近則菩提院宮澄覺法親王云々、

〇按ズルニ、惟康親王ハ、後嵯峨天皇ノ皇子、宗尊親王ノ御子ナリ、當時征夷大將軍タルニヨリ、特旨ヲ以テ親王宣下アリシナリ、

〔皇胤紹運錄〕

後深草院

- 守邦親王　久明親王一　品、式部卿、征夷大將軍

二品征夷大將軍、左大將、中納言、中將、元弘三、五、廿二出家、關東滅亡故也、

〔皇胤紹運錄〕

順德院

- 忠成王
  - 彥仁王
    - 忠房親王　文保三、(元應元)二、十八、无品親王宣下、彈正尹、
    - 守子內親王

諸王賜姓

〔光臺一覽〕親王之事

皇子は童形といへ共親王宣下、生ながらを宮樣と稱し候、御元服の時は、當代の后腹は三品、外之腹は四品也、又伏見、有栖川、京極、閑院之御子は、皇孫と申者にて、直の王子とは違有、故に天子或は院方の御猶子になり給ひ、親王と申給ふ也、

〔光臺一覽〕總別親王の御子は、現在皇孫と申者なれ共、二代目は天子か院の御猶子に御成不被レ成候得者、親王宣下無之候、〇中略又親王家御子數多有之時は、御門跡方の御附弟と成給へ共、御得度已後、法親王宣下有事なれば、いづれも御猶子と云ものに不被レ爲レ成して不叶事也、況や俗親王として、天子の御連枝と格の立御家を知り給はんをや、臣下の列に落給へば、今の清華の格が上也、源經基朝臣、平高望等の格見つべし、されにても皇孫臣下に落給へば、源氏を給ふ通例也、今の清華之內、久我廣幡其緣也、右への事也、

〇按ズルニ、靈元天皇以後ノ法親王ハ、何レモ御養子ニシテ、御猶子ハ甚ダ稀ナリ、又皇孫ニ姓ヲ賜フ事、必ズシモ源氏ニ限ラザルナリ、

〔續日本紀〕(十二聖武)天平八年十一月丙戌、從三位葛城王、從四位上佐爲王等上表曰、臣葛城等言、去天平五年、故知太政官事一品舍人親王、大將軍一品新田部親王宣レ勅曰、聞道諸王等願レ賜二臣連姓一、供二奉朝

延、是故召王等令問其狀者、臣葛城等本懷此情、無由上達、幸遇恩勅、昧死以聞、昔者輕堺原大宮御宇天皇〇孝元曾孫建內宿禰盡事君之忠、致人臣之節、創爲八氏之祖、永遺萬代之基、自此以來賜姓命氏、或眞人、或朝臣、始姓王家、流終臣氏、飛鳥淨御原大宮御大八洲天皇〇天武德覆四海、威震八荒、欽明文思、經天緯地、太上天皇〇元明內脩四德、外撫萬民、化及翼鱗、澤被草木、後太上天皇〇元正無改先軌、守而不違、率土清淨、民以寧一、于時也葛城等親母、贈從一位縣犬養橘宿禰、上歷淨御原朝廷、下逮藤原大宮、事君致命、移孝爲忠、夙夜忘勞、累代竭力、和銅元年十一月二十一日、供奉擧國大嘗二十五日御宴、天皇〇元明譽忠誠之至、賜浮杯之橘勅曰、橘者果子之長、人之所好、柯凌霜雪而繁茂、葉經寒暑而不凋、與珠玉共競光交金銀以逾美、是以汝姓者、賜橘宿禰也、而今无繼嗣者、恐失明詔、伏惟皇帝陛下〇聖武光宅天下、充塞八埏、化被海路之所通、德蓋陸道之所極、方船之貢府无空時、河圖之靈吏不絕記、四民安業、萬姓謳衢、臣葛城幸蒙遭時之恩、濫接九卿之末、進以可否、志在盡忠、身隆絳闕、妻子康家、夫王賜姓定氏、由來遠矣、是以臣葛城等願賜橘宿禰之姓、載先帝之厚命、流橘氏之殊名、萬歲無窮、千葉相傳、

壬辰、詔曰、省從三位葛城王等表、具知意趣、王等情深謙讓、志在顯親、辭皇族之高名、請外家之橘姓、尋思所執、誠得時宜、一依表令賜橘宿禰、千秋萬歲、相繼無窮、

〔新撰姓氏錄左京皇別〕橘朝臣

甘南備眞人同祖、敏達天皇皇子、難波皇子男、贈從二位栗隈王男、治部卿從四位下美努王、美努王娶二從四位下縣犬養宿禰東人女、贈從一位縣犬養橘宿禰三千代大夫人、生左大臣諸兄、〇略中和銅元年十一月己卯大嘗會、二十五日癸未曲宴、賜橘宿禰姓於大夫人、天平八年十二月丙子、詔參議從三位行左大辨葛城王、賜橘宿禰諸兄、

〔續日本紀十稱德〕天平勝寶四年八月乙丑、從三位智努王等、賜文室眞人姓、

○按ズルニ、智努王ハ、天武天皇ノ皇子長親王ノ御子ニシテ、即チ文屋淨三是ナリ、

〔續日本紀二淳仁十四〕天平寶字七年十月丙戌、參議禮部卿從三位藤原朝臣弟貞薨、弟貞者平城朝左大臣正二位長屋王子也、〇略中勝寶八歲、安宿黃文謀反、山背王陰上其變、高野天皇嘉之、賜姓藤原、名曰弟貞、

〔類聚國史七十九政理〕延曆十一年七月乙卯、勅、頃年京職輒賜諸王姓、即著籍帳、以成常、自今以後、六世以下之王、情願賜姓、注所願姓、先以申請、然後行之、

〔日本後紀十一桓武〕延曆廿三年正月己亥、制、延曆十一年七月三日格、六世已下王、情願改姓者、注所願之姓、先申官待報、然後改之、不得輒行者、頃年之間、未有申請、既違格旨、自今以後、除承嫡之外、猶不改者、宜抑止計帳、不得疎口、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年三月甲午、三品明日香親王薨焉、〇略中先太上天皇〇峨在祚時、親王上表、自請除親王號、同之諸臣、不見許、更新所生男女賜朝臣姓、感其懇誠、乃聽之、孫王賜姓、從此競效之、

〔皇胤紹運錄〕

桓武天皇

葛原親王

平高棟天長二、閏七、賜二平姓一

〔續日本後紀一仁明〕天長十年五月甲寅、六世長岡岡於王等男女廿七人、賜姓清原眞人、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年七月己卯、右京人、六世御津井王、是雄王、眞雄王、國雄王、本吉王、淨道王、稻雄王、多積王、安富王、伊賀雄王、三輪女王、坂子女王、七世新男王、春男王、三守王、並雄王等十六人、賜姓有澤眞人、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年七月甲申、右京人、六世眞桑王等十三人、賜御高眞人姓、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年九月丙子、近江國言、除王姓、從百姓、戶五烟、口一百一人、戶主槻村井上大

岡大魚動神等五人、並山村王之孫也、其祖父山村王、以去養老五年、編附此部、自爾以來、子孫蕃息或七八世、分爲數烟、依格六世以下、除承嫡者之外、可科課役、望請承嫡之戶、遷附京戶、自除與姓、科課於是下所司、撿皇親籍、無山村王之名、仍從百姓之例、但不與眞人之姓、

【執次詰所本御系譜】閑院宮

諸王爲人臣嗣

直仁親王

藤原輔平 靈司關白左大臣

寬保三年十月四日爲櫻町院御猶子

二年九月十九日移于鷹司家

【近代帝王系圖】伏見宮

女王婚嫁

貞清親王

女子 紀伊大納言光貞卿室、號安宮、

明曆三年九月廿七日入輿

顯子 大樹家綱公御臺所

明曆三年七月十日入輿

【百一錄】延寶四年八月五日、大樹公之御臺所伏見殿御姉御薨逝、御年序三十、依內癰也、音樂七日遏密云云、

【近代帝王系圖】伏見宮

貞致親王

理子 紀伊中納言吉宗卿室

元祿四年生、號眞宮、寶永三年三月十一日赴東武、十一月一日嫁十六歲

【百一錄】元祿九年十月廿四日、伏見殿姬宮、可爲勢州一身田門徒簾中云々、同若君爲仙院御養子爲常修院宮御弟子、可爲新大納言局母代云云、

【近代帝王系圖】京極宮

智仁親王

女子 西本願寺眞如室

慶安元年八月十七日薨、號珠光院、

文仁親王 號京極、靈元院皇子

女子 專修寺圓猷室

寶永七年十一月四日生、號美目宮、享保十二年二月廿三日高田一身田聘納 同十四年十二月十六日婚禮

【近代帝王系圖】有栖川宮

幸仁親王

女子 東本願寺光性室

元祿四年九月廿四日生、號淑宮、同十五年閏八月一日光性大僧正室治定 十二月四日入

輿十二歲
職仁親王

女子 德川岩千代室
延享二年九月廿四日生、號長宮、寶曆二年十月廿一日嫁
董子 近衛右大臣經熙公室
寶曆九年三月十一日生、號孝宮、安永四年正月廿五日移于仙洞、同五年十月廿六日入輿
治定、號恭宮、十一月廿四日從仙洞嫁十九歲
音仁親王

女子 爲職仁親王子、佛光寺(奧祐)室、
延享三年五月二日生、號兼宮、明和四年十二月一日嫁廿二歲
織仁親王

女子
安永九年七月十三日生、號富貴宮、寬政三年二月藝州入輿治定　同四年九月二日赴于關東、
東尾州家　同五年二月十五日、從尾州嫁于藝州、十四歲
女子 大膳大夫齊房室
天明二年七月十三日生、號同宮、同五年五月長州內約、寬政九年十月五日赴于關東、十一月三日嫁十六歲

喬子 大樹家慶公御臺所
寬政七年六月十四日生、號樂宮、文化元年九月三日下向于關東　同六年十二月一日婚禮十五歲
女子 贈從一位德川齊昭卿室
文化元年九月廿五日生、號登美宮、
〔近代帝王系圖〕閑院宮
直仁親王

女子 西本願寺光啓室
享保五年七月十三日生、號始宮、元文五年九月廿二日嫁、
倫子 大樹家治公御臺所
元文三年正月廿日生、號五十宮、寬延元年閏十月廿一日來春東行治定　同二年三月五日發輿　寶曆四年十二月十日婚禮
〔續日本紀十四聖武〕天平十四年十月癸未、禁從四位下鹽燒王、幷女孺四人、下平城獄、　戊子、鹽燒王配流伊豆國三嶋、
〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年三月己酉、茅原王坐以刀殺人、賜姓龍田眞人、流多褹嶋、男女六人復命相隨、茅原王者、三品忍壁親王之孫、從四位下山前王之男、天性凶惡、喜遊酒肆、時與御使連麻呂博飲、忽發怒刺殺、屠其股肉、便置胸上而膾之、及他罪狀明白、有司奏請其罪、帝以宗室之故、不忍致法、仍除王名、配流、
〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年七月乙未、故從四位上守部王之男、笠王、何鹿王、爲奈王、正三位三原王之

除王名

雜載

男、山口王、長津王、船王之男、葦田王、及孫他田王、津守王、豐浦王、宮子王、去天平寶字八年賜姓三長眞人、配丹後國、從四位下三嶋王之女、河邊王、葛王、配伊豆國、

〔續日本紀三十光仁二〕寶龜三年二月癸酉、先是從五位上掃守王男、小月干賜姓勝間田流信濃國、至是復屬籍、

〔續日本紀三十光仁二〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐舒小家内親王除名、

〔續日本紀十聖武一〕天平五年閏三月戊子、諸王飢乏者二百十三人、召入於殿前、各賜米鹽、詔責其懶惰、令治生業、

〔類聚國史七十賞宴八〕弘仁十三年七月丙申、以新錢一百貫、班給諸王貧者、

〔園太曆〕康永三年正月六日、及晩叙位聞書到來、續左、〇略　中

從五位下爲寶王天曆（村上）後〇中略

康永三年正月五日

〔園太曆〕貞和二年正月二日、傳聞今日叙位執筆、中院大納言、其外日野大納言、右衞門督、四條宰相、左大辨、右大辨等參陣云々、清書事、右衞門督奉行云々、執筆左大辨也、七日、午剋聞書到來、〇略　中

從五位下宗友王天曆（村上）後〇中略

貞和二年正月六日

〔玉勝間五〕中ごろまでは諸王おほかりし事

園太曆永三年の除目に、從五位下爲寶王天曆後貞和二年の除目に、從五位下宗友王天曆後同三年の除目に、從五位下資方王寛和後延文四年の除目に、從五位下資能王寛和後などあり、このほどまでは諸王もなほおほかりしと見えたり、

皇親妃

○按ズルニ、玉勝間ニ云フ所ノ諸王ハ、其人アルニアラズシテ、年爵ノ爲ニ假ニ其名ヲ設ケシモノナラン、

〔古事談四勇七〕天德四年五月十日夜、强盜入武藏權守源滿仲之宅、爰滿仲射留類人倉橋弘重、弘重指申中務卿親王第二男、及宮内丞中臣良村、土佐權守蕃基之男等所爲、撿非違使右衞門志錦文明參内奏聞、中務卿親王家人申云、件孫王今曉入親王家、其同類紀近輔、中臣良村等在此家、仍以事由告親王、親王令申云、男親繁、日來重煩痢病、在此家内、不堪起居、待平安時可進者、依宣旨使官人等搜求、同類輩親王家内、遂不捕獲、於成子内親王家内〇皇女　宇多　捕獲紀近輔、近輔申云、親繁王爲首入滿仲家事實也、贓物悉可在彼親繁王許ト云、勅云依不進、男忽科親王罪、猶伺親繁之出外可召捕者、

〔薩戒記〕享保六年四月二日己酉、飛鳥井中納言示送云、今度御百首、伏見宮幷玉河宮等就端作有被尋問事、伏見宮者親王也、然而已入道給、其儀可同法親王歟、然者可被書沙門某歟、於玉川殿者諸王也、可爲某王歟者、予答云、伏見宮者、只法名二字許可令書給、如入道關白之類也、玉川宮者可爲某王也云云、

○按ズルニ、伏見宮ハ崇光天皇ノ皇子榮仁親王ニシテ、玉河宮ハ長慶太上天皇ノ御子ナリ、

○

〔日本書紀十七繼體〕男大迹天皇、〇繼體　譽田天皇五世孫、彦主人王子也、母曰振媛、振媛活目天皇〇垂仁　七世孫也、天皇父聞振媛顏容妹妙甚有徽色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、納以爲妃、遂產天皇、

〔神皇正統記敏達〕二年癸巳の年、天皇の御弟、豐日皇子〇用明　の妃、御子を誕生す、皃戸皇子にてぞ坐します、

〔日本書紀二十皇極〕二年十一月丙子朔、〇略　中　山背大兄〇用明皇孫厩戸子　仍取馬骨投置内寢、遂率其妃幷子弟

等得聞逃出、隱膽駒山、○略中終與子弟妃妾、一時自經俱死也、

〔日本書紀三十持統〕朱鳥元年十月庚午、賜死皇子大津於譯語田舍、時年二十四、妃皇女山邊、○皇女天智被髮徒跣、奔赴殉焉、見者皆歔欷、

〔續日本紀十聖武〕天平元年二月癸酉、令王○長屋王自盡、其室二品吉備內親王○略中等同亦縊、

〔文德實錄五〕仁壽三年五月乙巳、無品齊子內親王薨、親王嵯峨太上天皇第十二女也、母正五位下文室眞人久賀麻呂之女、從五位上文子也、親王適三品太宰帥葛井親王、○桓武皇子內外咸皆恥其非成禮、

〔明月記〕建曆三年四月十七日、今夜通光卿娘、參六條宮、雅成親王後鳥羽皇子十九日、傳聞竹園古事有三箇夜儀、廿一日、今夜初參院、三位中將通方卿暫相談、一夜供奉、宗行、雅清、通時、家兼、師季、顯任、定衡、有敎、資俊、顯平、仲能、資賴、棟基、泰光、長資、十五人云々、清信、守通、雅具等不伴云々、雜人等今夜云、以此女房名號可稱女御乎、可稱御息所乎云々、末代人心曾不知物由、不異猿猴歟、天無二日、尾籠之至也、成長云、聞世繼有式部卿宮女御、是若親王妻歟、戴冠奉公者、年餘三十所存如此、末代之極歟、世繼之外不見及歟、可悲々々、若是重明爲平娘事歟、奇異々々、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年二月五日癸卯、酉剋故岡屋禪定殿下兼經公御息女、御年二十爲最明寺禪家○北條時賴御猶子、御下著、則入御山內亭、是可令備御息所○宗尊親王妻給云云、

〔榮花物語一月宴〕九條殿のささきの御はらからの中のきみは、ゑげあきらのゑきぶきやうのみやのきたのかたにてぞおはしける、

〔榮花物語一月宴〕かゝる程に后のみやも御門○村上をかぎりなきものに思ひ聞えさせ給ければ、そのけしきにゑたがひて、よろづの殿上人上達部、なびきつかうまつりてもてはやし奉り給程に、やう〳〵十二三ばかりにおはしませば、おほんげんぶくのことおぼしいそがせ給、おほんむすめもたゝへるかんたちへは、いみじうけしきばみ聞え給に、宮の大夫と聞ゆる源氏のさ大しやう、○高明えもいはずかしづき給ひとりむすめを、さやうにとほのめかし聞え給ければ、みかどもみやも、おほんけしきさやうにおぼしければ、よろこびてやがて其夜參り給、例の宮たちは、我さとにおはしそむる事こそ常の事なれ、これは女御更衣のやうに、やがて內におはしますに參らせ給べきさだめあれば、例の女御更衣の參はさることなり、これはいとめづらかにさなかはりいまめかしうて、おほん元服の夜やがて參り給、帝きさきの御よめあつかひの程、いとおかしくなんみえさせ給けり、

〔大鏡三左大臣師尹〕今一所の女君は、○略中れんせいぬんの四のみこ○敦道帥宮と申御うへ○妻にて、二三年計おはせしほどに、○略下

〔台記〕康仁二年六月十八日癸卯、雅仁親王夫人生男、

〔康富記〕文安元年四月廿六日乙巳、今夜有准后宣下事、當今（後花園）并二宮之御母儀、伏見入道親王北政所、令蒙此宣下給、○中略御名字從三位源幸子也、故源宰相經有卿息女也、仍爲經子而被改之爲幸子云々、

〔百一錄〕延寶四年四月六日、平明伏見宮之御臺所好君御方薨御、女院之女二宮之御息女、急病也、八音遏密、

〔百一錄〕元祿十年十一月十六日、仙洞○靈元宮綾宮御方○准后腹○緋子可爲伏見殿簾中之由有言入事也、十一年四月廿九日、綾宮御方伏見殿御翠簾入、仙洞姬宮廿有餘歟、五月二日、綾宮御方、今夕伏見殿亭へ渡御、堂上北面等數輩供奉、

〔故實拾要〕姬君御入輿

是姬宮ノ親王攝家へ御入輿アル時、攝家ハ其姬宮ノ御所へ、御入輿以前ニ伺候有テ、御所ニ一宿有テ、翌朝退出シ給フ也、之ヲ御簾入（ミスダレイリ）ト云也、御簾入有テ以後ニ、攝家ノ方へ御入輿アル事也、攝家ハ臣下タルニ由テ也、御入輿ノ時ハ、必攝家ノ方ヨリ先有御簾入事也、亦親王家へ御入輿

ノ時ハ御簾入ナシ、是親王タルニ由ヲ也、御入輿ト云ハ、俗ニ云婚姻ノ事也、

〔續史愚抄桃園〕寛延二年二月七日丙戌、太宰帥典仁親王、於仙洞櫻町殿入于無品成子内親王御門院皇女、方簾中、九日戊子、無品成子内親王、號鷹宮、廿一歳、中御門院皇女母源内侍局、自櫻町殿御所移徙太宰帥典仁親王閑院第、嫁娶屋從公卿皇太后宮大夫宗長已下五人、六條前中納言有起爲入數、前駈殿上人右中將實親朝臣已下九人、

古事類苑

帝王部二十六

外戚上

名稱　一五一七
授官位　同
賜封戸　一五二三
聽著直衣　一五二九
聽入臺盤所　一五三〇
姓名特典　一五三一
吉事恩遇　一五三二
疾病恩遇　一五三六
歿後恩遇　一五四二
贈官位　一五四九
歿後賜封　一五五五
冢墓　一五五七
犯罪處分　一五六三
車駕幸私第　同

祭外家神　一五六五
輔政　一五六八

古事類苑

帝王部二十六

外戚上

天皇ノ外戚ハ、上古ニ在リテ固リ之ヲ特待セル跡ナキニアラズト雖モ、未ダ其制度ノ見ルベキモノアラズ、其之アルハ蓋シ近江朝廷ノ頃ナルベシ、然レドモ當時ノ制ノ今ニ存セザルヲ以テ亦之ヲ知ルニ由ナシ、大寶ノ制ヨリ以後、其制ト例ト昭々トシテ攷フベシ、凡ソ天皇ノ外戚タルモノハ、毎ニ其官位ヲ進メ、三宮ニ準ジテ封戸ヲ給ヒ、直衣ヲ著スルヲ聽シ、臺盤所ニ入ルヲ得シムルノミナラズ、其病ムニ及ビテハ度者ヲ賜ヒ、諸寺ニ布施シ、神祇ニ奉幣シ、或ハ天下ニ大赦シ、賑給ノ令ヲ發シ、以テ之ヲ救濟スルコトアリ、其犯罪アル、皇太后ノ四等以上ノ親、皇后ノ三等以上ノ親モ皆六議ノ恩典ニ霑ヘリ、是レ其生前ニ於ケル待遇ナリトス、其沒スルヤ天皇爲ニ錫紵ヲ服シ、或ハ帛衣ヲ除キ、廢朝ノ事ヲ行ヒ、或ハ賻物葬儀ヲ賜ヒ、贈位贈官ノ使ヲ發シ給フ等ノ事アリ、而シテ其尤モ貴顯ナルモノニ至リテハ、警固固關シ、爲ニ節會ヲ停廢シ、其墓ハ山陵ニ準ジテ墓戸ヲ置キ、荷前ヲ進メ、天下事アル時ニハ必ズ之ニ告グルヲ以テ例トセリ、是レ其死後ニ於テ享クル所ノ待遇ナリトス、

外戚ガ其生前死後ニ於テ享クル所ノ待遇ハ、大要此ノ如シ、是ヨリ少カ其故事ニ就テ陳ブル所アラントス、茲ニ我國家ノ治亂盛衰ノ跡ヲ歷覽スルニ、外戚ニ關係スルモノ實ニ尠シトセズ、神武天皇ヨリ十一代ニシテ垂仁天皇ノ朝ニ至ル、此時始テ外甥狹穗彦ノ反アリ、後

マタ二十二代ニシテ崇峻天皇ノ時、馬子ノ變アリ、馬子ハ武内宿禰ノ子、蘇我石川宿禰ヨリ出ヅ、石川四世ノ孫ヲ稻目ト云フ、二女ヲ俱ニ欽明天皇ニ納レテ、用明推古崇峻三天皇ノ外祖トナル、即チ馬子ノ父ナリ、馬子ノ子蝦夷、孫入鹿、相繼ギテ大臣ト爲リ、父祖ノ威烈ニ藉リ、專恣ヲ極メ、擅ニ封民ヲ役シテ大墓ヲ築キ、祖廟ヲ建テ、八佾ヲ舞ハシメ、其墓ヲ陵ト云ヒ、其家ヲ宮門ト呼ビ、其子ヲ王子ト稱シテ、密ニ不軌ヲ圖リシカバ、天誅踵ヲ回サズシテ、竟ニ中大兄皇子（天智）ノ討伐ニ遇ヒ、一門悉ク亡滅ニ歸セリ、而シテ其密議ニ參シ、大憝ヲ殪シ、國家ヲ安ンゼシハ藤原鎌足ノ功ナリ、是ヲ以テ其子不比等、文武天皇ノ朝ニ當リ、荐リニ榮達シテ、天下ノ樞機ヲ掌リ、一門漸ク盛ナリ、其病デ臥スヤ、詔シテ度者ヲ賜ヒ、諸寺ニ布施シ、天下ニ大赦シ、其薨ズルニ及テハ、太政大臣正一位ヲ贈リ、食封資人並ニ生時ノ如クセシム、外戚ノ爲ニ赦令ヲ發シ、贈位贈官及ビ賜封ノ擧アル、蓋シ之ヲ以テ嚆矢トス、時ニ聖武天皇ハ皇太子ニシテ、不比等ノ外孫ナリ、卽位ニ至リ、遂ニ不比等ノ女安宿媛ヲ立テ、皇后トス、古來皇后ハ多クハ之ヲ皇胤ニ擇ブヲ以テ例トシ、大寶ノ令ニハ、妃モ猶之ヲ内親王ニ取リシガ、是ニ至リテ始テ臣下ノ女ヲ採リ、皇后ニ列スル例ヲ開ケリ、是時ニ當リテ、不比等ノ子、武智麻呂、房前、宇合、麻呂等、何レモ顯要ニ列シタルノミナラズ、皇后ノ異父兄、橘諸兄ノ如キモ亦大ニ登用セラレ、大臣ノ位ニ昇リ、外戚ノ權甚ダ重シ、是ヨリ藤原氏累世外戚タルノ故事ヲ馴致セリ、孝謙天皇、藤原皇后ノ出ヲ以テ、聖武天皇ノ後ヲ繼ギ給フニ及ビテ、詔シテ外祖ノ名ヲ諱ミ、且ツ外家ノ姓ヲ避ケシム、外戚ノ威益熾ナリ、淳仁天皇ノ朝ニ至リ、終ニ不比等ヲ近江十二郡ニ追封シテ淡海公ト稱シ、其室ヲ以テ太夫人ト爲セリ、此時惠美押勝ノ亂アリ、押勝ハ武智麻呂ノ子ナリ、

稱德光仁二天皇ノ際ニ當リテ、宇合ノ子百川、輔弼ノ功アリ、女旅子ヲ桓武天皇ニ納レテ、淳

和天皇ノ外祖父トナル、桓武天皇其父ノ故ヲ以テ、長子緒繼ヲ殿上ニ召シテ加冠セシメ給フ、外戚殿上ニ於テ元服スルコト、是ヲ以テ權輿トス、嵯峨天皇ノ后橘氏ハ、諸兄ノ孫清友ノ女ナリ、弟氏公右大臣ト爲リ、橘氏復大ニ興リ、仁明天皇ニ至リ、其氏神モ官祠ニ列セラル、天皇房前ノ玄孫冬嗣ノ女順子ヲ納レテ女御ト爲シ給フ、順子文德天皇ヲ生ム、文德天皇立チテ冬嗣ノ子良房、又女明子ヲ納レテ其外舅トナリ、威權日ニ重シ、天皇ノ峻嚴ナル猶之ヲ憚リ、長ヲ舍テ幼ヲ立テ給フニ至ル、是ヲ清和天皇トス、良房、文德天皇ノ遺詔ヲ奉ジテ萬機ヲ攝セリ、攝政ノ稱是ニ昉マル、卽位ノ元年、始テ十陵四墓ノ制ヲ定ム、四墓ノ列ニ在ルモノハ、藤氏ノ祖ト外祖父母、及ビ外祖父ノ父母トノミ、後增減アリト雖モ、要スルニ外家一門ノ外ヲ出デズ、良房其姪基經ヲ養ヒテ子トス、又外舅ノ大臣ヲ以テ陽成天皇ノ朝ニ攝政トナリ、後ニ至リテ始テ關白トナル、後世攝關ノ職、必ズ之ヲ外祖外舅ノ大臣ニ取ルノ例ハ、良房父子ヲ以テ其先蹤ト爲ス、基經、天皇ノ失德アルヲ以テ之ヲ廢シテ、光孝天皇ヲ迎ヘ立ツ、是實ニ人臣ヲ以テ廢立ヲ擅行スル始ナリ、是ヨリ大權全ク相門ニ歸シ、威權王家ヲ震ス、光孝天皇ガ基經ヲ臥内ニ引キテ皇太子ノ事ヲ託シ、宇多天皇ガ阿衡ノ事ヲ以テ自ラ責ヲ引キ給ヒシガ如キ、以テ其一端ヲ窺フニ足ルベシ、宇多天皇ハ英主ナリ、一旦其權ヲ收メント欲シ、菅原道眞ヲ擧ゲテ政ヲ輔ケシメ給ヒシカド、其效ナキノミナラズ、積重ノ威、愈激シテ愈盛ナリ、基經ノ子時平、亦醍醐天皇ノ朝ニ驕ル、天皇ハ高藤ノ女ノ產ム所ニシテ、高藤ハ良房ノ弟良門ノ子ナリ、久シク世ニ沈淪セシガ、是ニ至リテ復タ盛ナリ、是ヲ勤修寺家ノ始祖トス、當時數世ノ間、皇后ヲ立テ給ハザリシハ、蓋シ鑑ミル所アリシ故ナルベシ、

朱雀天皇幼冲ヲ以テ立チ給フニ至リテ、時平ノ弟忠平マタ之ガ攝政トナリ、嫡子實賴亦冷泉天皇ノ朝ニ關白タリ、是ヨリ先キ村上天皇ノ中宮ハ實賴ノ弟師輔ノ女ナリ、天皇及ビ爲

平守平二親王ヲ生メリ、村上天皇殊ニ爲平親王ヲ愛シ、冷泉天皇ノ太子ニ立テントシ給ヒシカド、外家ノ援ナキヲ以テ成ラズ、村上天皇崩ジ給フニ及ビテ、實頼遺詔ト稱シテ守平親王ヲ立テ、左大臣源高明ヲ貶竄シ、弟師尹ヲ以テ之ニ代ヘタリ、高明、爲平親王ヲ以テ婿トス、故ニ廢立ノ意アリト云フヲ以テ讒ヲ蒙リシモノニシテ、醍醐天皇ノ朝ニ、菅原道眞ガ宇多天皇ノ皇子齊世親王ノ外舅タルヲ以テ、流謫セラレシト同一轍ナリ、亦以テ當時外戚ノ狀態ヲ見ルベシ、圓融天皇ノ時、外祖九條師輔ノ子伊尹、伯父實頼ニ繼ギテ攝政トナル、凡ソ攝關ハ常置ノ職ニアラザレドモ、伊尹之ニ任ジテヨリ子弟相續ギ、永ク絶エザルニ至レリ、兼通兄伊尹ニ嗣ギテ關白トナリ、弟兼家ト互ニ女ヲ宮闈ニ納レント爭ヒ、從弟賴忠ヲ引キテ援トス、賴忠亦兼家ト爭フ、兼家花山天皇ヲ賺シテ、其位ヲ遜レシメ、一條三條二天皇ノ外祖トナリ、驕奢日ニ盛ニシテ、紘ヲ放チテ幼主ヲ抱キ、親王ヲ罵ル等ノ事アリ、其長子道隆、次子道兼、相繼ギテ關白トナリシガ、三子道長ニ至リテ殆ド其極ニ達セリ、初メ道隆ノ女定子立チテ一條天皇ノ皇后トナリ、敦康親王ヲ生ミシガ、道長又其女彰子ヲ納レテ中宮トシ、敦成親王ヲ生メリ、二后竝立スルコトヲ以テ始トス、後相沿ヒテ流例トナリ、名分大ニ紊レタリ、

三條天皇位ヲ嗣ギ給フニ及ビテ、一條天皇、敦康親王ヲ以テ皇太子ニ立テ給ハントス、中宮彰子モ亦其父道長ニ勸メテ之ヲ立テシメントス、而ルニ天皇、道長ヲ憚リ、終ニ敦成親王ヲ立テヽ皇太子トシ給フ、道長又外孫ノ早ク登祚シ給ハンコトヲ欲シ、三條天皇ニ逼リテ讓位セシム、敦成親王乃チ立チタマフ、是ヲ後一條天皇トス、時ニ皇太子ハ三條天皇ノ皇子敦明親王ナリ、道長又己ノ女ノ出ニアラザルヲ以テ其位ヲ去ラシメ、敦良親王ヲ立テヽ後一條天皇ノ皇太弟トセリ、亦道長ノ外孫ナリ、是時ニ當リテ道長三天皇ノ外祖ト爲リ、位人臣ヲ極メ、其富天下ニ冠タリ、諸子亦朝ニ列シテ、高キハ攝關大臣ニ至リ、卑キモ納言參議ヲ失ハズ、百事己ノ意ノ如ク、一事モ缺ケザルヲ以テ自ラ十五夜ノ月ニ比シ、此世ヲ以テ我世トス爲スニ至ル、實ニ攝關ヲ置キテヨリ以來、未ダ富貴滿盈ナルコト、道長ノ如キモノハアラザルナリ、道長ノ子賴通亦先人ノ餘風ヲ承ケテ、驕傲父祖ニ讓ラズ、身ハ三代ノ執柄トナリテ、權ヲ專ニスルコト凡ソ五十餘年ナリ、而シテ敦康親王ノ女嫄子ヲ養ヒ、名ケテ眞ノ所生トス爲シ、是ヲ後朱雀天皇ノ中宮ト爲ス、亦外戚ノ權ヲ貪ルニ過ギズ、而シテ藤原氏ニハ此轍ヲ踏ムモノ殊ニ多シ、

後三條天皇ハ、藤原氏ノ出ニアラザルヲ以テ、儲位ニ升リ給フモ頗ル難カリシガ、登極ニ至リ甚ク藤氏ノ權ヲ制シ給ヒシニ由リ、外家ノ勢力頓ニ挫折シテ、復昔日ノ如クナラズ、白河天皇ノ中宮ハ、賴通ノ子ナル師實ノ女ニシテ、實ハ源顯房ノ女ナリ、堀河天皇ノ朝、顯房外祖ヲ以テ榮達シ、兄俊房ト共ニ左右ノ大臣ト爲リ、大將ヲ兼ヂ、子族亦納言衞府辨官等ノ顯要ニ列シタリ、藤氏ニアラズシテ兄弟左右ノ大臣タルハ、此ヨリ前ニ絶エテ無キ所ナリ、亦以テ世變ヲ觀ルベシ、且ツ當時ハ天下ノ政、皆院中ヨリ出ヅルヲ以テ、藤原氏益勢力ナシ、然レドモ外戚タランコトニ汲々タルハ猶從前ニ異ナラズ、

堀河鳥羽崇德ノ三天皇ノ朝ヲ歷テ、近衞天皇ニ至ル、時ニ賴通ノ玄孫賴長、父忠實ノ寵ヲ恃ミテ、兄忠通ト善カラズ、互ニ女ヲ後宮ニ納レント欲シ、父子相陷レ、兄弟交軋リ、以テ保元ノ亂ヲ釀シ、更ニ平治ノ變ヲ歷テ、平清盛ヲシテ殊勳ヲ樹テシム、是ニ於テ藤氏ハ從前ノ威權ヲ擧ゲテ之ヲ平氏ニ屬セリ、清盛モ亦藤氏ノ所爲ニ傚ヒ、女ヲ納レテ高倉天皇ノ中宮トシ、竟ニ天皇ニ逼リテ外孫ナル皇子ニ讓位セシム、安德天皇是ナリ、清盛愈威權ヲ弄シ、跋扈跳梁至ラザル所ナケレドモ、多クハ功績ニ矜リシモノニテ、專ラ外戚ノ親ヲ怙ミ

シニアラズ、是ヨリ後外戚ノ王室ニ於ル、大ニ前日ト其觀ヲ異ニセリ、

源頼朝府ヲ鎌倉ニ開クニ及ビテ、亦藤氏ノ顯ニ倣ヒ、其女ヲ後宮ニ納レント欲シテ成ラザリシ以來、足利幕府ニ至ル迄、遂ニ將軍ノ女ヲ入ルヽノ事ナシ、當時ハ武家天下ノ政權ヲ掌握セシカバ、皇家ノ外戚モ、其力ニ頼ルニアラザレバ、全ク其勢ナシ、是ヲ以テ鎌倉幕府ノ頃ニハ、西園寺氏ハ將家ノ親ヲ以テ、累世帝戚トナリ、室町將軍ノ時ニハ、日野氏裏松氏等ハ、幕府ノ姻ニ依リテ、盛ニ其家門ヲ興セリ、豐臣氏ノ時ニ及ビテ、近衞氏ノ女關白秀吉ノ養子トシハ、少カ其類ヲ異ニスト雖モ、蓋シ亦其力ニ頼ルナリ、後水尾天皇ノ朝、征夷大將軍德川秀忠、其女ヲ納レテ中宮トス、鎌倉幕府ヨリ以來、將軍ノ女ニシテ后位ニ居ルモノ前後絶エテアルコトナシ、明正天皇ハ德川氏所生ノ皇女ナリ、孝謙天皇以後女主ヲ立ツルノ例久シク絶エタリシガ、是ニ至リテ復女帝アリ、論者或ハ以テ外戚專橫ノ致ス所トス、然レドモ德川氏ハ之ヲ以テ權威ヲ加ヘントスルニハアラズシテ、之ヲ以テ榮トセントスルニ過ギザリシナラン、此時代ニ在リテハ、復外戚ノ爲ニ社寺ニ奉幣布施シ、或ハ度者ヲ賜ヒ、赦令ヲ行フガ如キ事ナシ、而シテ其沒スルニ當リテハ、忌服廢朝、贈位贈官等ノ事、猶舊典ニ據リテ之ヲ行ヘリト雖モ、復固關警固ノ事ナキニ至レリ、時世ノ然ラシムル所ナリ、

要スルニ我皇室ノ外戚ニ於ケル、之ヲ世界萬國ニ求ムルニ、終ニ其比ヲ見ザル所ニシテ、外戚ハ必ズ藤原氏外戚タルニアラザレバ、執政タルヲ得ザルノ姿ナリシカバ、天照大神ノ御子孫ハ、長ク瑞穗國ニ君臨シ給ヒ、天兒屋命ノ後裔ハ、長ク執政ノ臣ト爲リテ、萬世替ルコトナキハ蓋シ二神ノ幽契ニ起レリト云フ說アルニ至レリ、而シテ藤原氏ハ冬嗣ヨリ以後房前ノ子孫常ニ上流ニ居リ、道長以後其嫡長タル人常ニ攝關タリシガ、鎌倉幕府ノ時、分レテ

名稱

五派ト爲リ、之ヲ五攝家ト稱シ、互ニ外戚タリト雖モ、其勢益微ナリ、足利幕府ノ時、攝家ノ輩、將軍ノ偏諱ヲ受クルニ至リテハ、益言フニ足ラズ、

〔伊呂波字類抄六〕外戚シヤク

〔空穗物語初秋〕なかたゞ、ないしやくにも外しやくにも、女といふものなんともしく侍る、〇中略もしはゝかたの外ぢやくこそ、かのとしかげの朝臣のきむはつかうまつらめ、

〔承久軍物語六〕十月十日、〇承久三年とさのくにゝせんかう、〇土御門あるべきにさだめられけり、〇中略げしやくのつちみかどの大納言さだみち卿參りて、なく〳〵御車をよす、

〔下學集下臆藝〕外戚ゲシヤク

〔愚管抄三〕九條の右丞相、〇中略我子孫を帝の外戚とはなさんと誓ひて、觀音の化身の、叡山の慈惠大師と師檀のちぎりふかくして、橫河のみねに楞嚴三昧院といふ寺を立、

〔增鏡七煙の末々〕院の宮たちの御中には、御このかみにてものし給へど、御げさくのよわきはいまもむかしもかゝるこそ、いと〳〵ほしきわざなりけれ、

〔運步色葉集二〕外戚グワイセキ

〔下學集下臆藝〕外戚グワイセキ

〔令義解六儀制〕親戚謂親者內親也、戚者外戚也、

〔安齋隨筆後編一〕內戚外戚　父方の親類を內戚と云、母方の親類を外戚と云、親族に內外を稱する皆是なり、

授官位

〔續日本紀八元正〕養老五年正月壬子、授從三位縣犬養橘宿禰三千代〇藤原不比等妻正三位、

〇按ズルニ、天皇ノ外戚ニシテ、官祿ヲ授ケラレタルモノ、其例甚多ク、悉ク載スルニ勝ヘズ、故ニ今史ニ明文アルカ、若クハ其特ニ著明ナルモノヽミヲ取レリ、

〔續日本紀四桓武〕延曆九年二月甲午、詔授正五位下百濟王玄鏡從四位下、從五位上百濟王等者朕之外戚也、今所以擢一兩人加授爵位上、正六位上百濟王鏡仁從五位下、是日詔曰、百濟王等者朕之外戚也、

〔類聚國史三十一帝王〕弘仁五年四月乙巳、幸左近衞大將正四位下藤原朝臣冬嗣閑院、供張之宜、甚有雅致、天皇染翰、群臣獻詩、時人以爲佳會、授冬嗣從三位、无位藤原美都子從五位下、賜五位以上衣被、

〔類聚國史六十六人〕天長十年正月丁未、出雲守正四位下紀朝臣咋麻呂卒、爲人無才、以田原天皇〇文德外戚特至四位、終以天命、〇、時年七十九、

〔文德實錄九〕天安元年二月丁亥、右大臣正二位藤原朝臣良房爲太政大臣、〇中宣制曰、天皇我詔旨止萬勅御命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、不、右大臣正二位藤原良房朝臣波朕〇之外舅〇那利、又稚親王止大坐時利助導支供奉禮留所利、毛安今毛又忠貞留心乎持天食國乃天下乃政乎相安奈那比申賜比助奉留事毛漸久玖那利奴古人有言利、德止之無不酬止奈聞食須、而今所在乃官波掛畏支先帝乃治賜留所那利、朕未有所酬、是以殊爾太政大臣官爾上賜比治賜、〇中略天皇御命乎衆聞食止宣、

〔三代實錄三十陽成〕元慶四年十二月四日癸未、天皇御紫宸殿、喚公卿及百官於殿庭、策拜右大臣正二位藤原朝臣基經爲太政大臣、公卿百僚拜舞而罷、策命曰、天皇我詔旨止萬勅御命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、右大臣正二位藤原基經朝臣波朕之親舅奈利、忠貞心乎持氏御世御世與利天下政乎相安奈々比助奉母久奈奴利又朕未及初載之時與利輔導崇護供奉禮留所母安因弦掛畏太上天皇乃〇詔命乎持天攝政乃職爾事與佐治賜倍利朕我食國乎平久安久天照之治聞食須故波此大臣之力奈利、而所帶官波攝政乃職爾波不相當止頃年參加利大坐都、今掛畏太上天皇乃詔旨爾毛、職波貴天官波賤天也波久年乎歷倍岐、太政官乃其人波止最此卿乎可謂止勅御命母安利支、掛畏岐御命乃任仁上給治

給牟止去春夏間與利仰給大坐、而大臣乃懇爾加志許末利辭讓申仁依天今仁未天延來禮利、今畏岐本御意早行倍岐物奈止仰給不御命母安利、故是以太政大臣官爾上給比治給久止勅但攝政之職波今母彌益々爾勤奉仕禮止勅御命乎衆聞食止宣、

〔三代實錄四十陽成〕元慶七年正月十五日壬午、從四位下行越前權守藤原朝臣弘經卒、弘經者贈太政大臣正一位長良朝臣子、太政大臣昭宣公〇基經藤原之弟也、〇略中弘經天皇之外舅也、故天皇特愍、十二月晦日〇元慶六年授從四位下、就床下賜告身、七年正月遷爲越前權守、後四日卒、年四十五、

〔今昔物語二十二〕高藤內大臣語第七

此ノ高藤ノ君、止事无ク御ケル人ニテ、成上リ給テ大納言マデ成給ヒヌ、彼ノ姬君〇胤子ヲバ宇多院ノ位ニ御シケル時ニ、女御ニ奉リ給ヒツ、其ノ後幾ク程ヲ不經ズシテ、醍醐ノ天皇ヲバ產奉リ給ヘル也、〇中略祖父ノ大領〇宮道彌益ハ四位ニ叙シテ、修理ノ大夫ニナム被成タリケル、醍醐ノ天皇位ニ即セ給ヒニケレバ、祖父ノ高藤ノ大納言ハ內大臣ニ成給ヒニケリ、其後彌益ガ家ヲバ寺ニ成シテ、今ノ勤修寺此也、向ノ東ノ山邊ニ其妻堂ヲ起タリ、其名ヲバ大宅寺ト云フ、此レ彌益ガ家ノ當ヲバ、哀レニ睦シク思食ケルニヤ有ケム、

〔權記〕正曆二年九月七日、任大臣事、諸司裝束南殿廂、從額間云々、時刻卿相參陣、大內記爲時朝臣持宣命、令覽於中納言顯光卿〇略中

天皇我詔旨止萬勅御命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、太政大臣乃官波攝政正二位藤原道隆朝臣乃可任なり、而謙讓心神之天內大臣乃官をも辭申天支、此般猶令昇進めハ彼心爾違ぬべし、右大臣從一位藤原爲光朝臣、數代爾歷仕へ天朝乃重臣ぞあり、仍殊爾太政大臣乃官仁上給比詔賜布、〇中略正二位行權大納言藤原道兼朝臣波朕乃親舅なり、朝恩を可蒙幾人なる仁依天那牟殊爾內大臣乃官爾任賜、中略久止勅布天皇我御命乎衆聞食ぜと宣、

正暦二年九月七日

〔權記〕長徳四年十月廿九日甲寅、依召參陣、〇一條母后東三條院詮子　仰云、年來御坐左大臣〇藤原道長土御門家、亦月來御此一條、依有先例、欲給爵賞於大臣室家之由可奏、又給三位階如何、其由同加用意可洩申者、依不知御名諱、彼殿案内、丞相命云、名倫子、元從五位上、〇略抑此事先日承仰已了、而今爲仰下、丙々令申事由之處、仰旨如此、若有難澁御氣色歟、有事次見氣色可示了、〔更不具記〕即參内、中院御消息、仰〇一條云、尤可然事也、早可仰下者也、即奏只今上卿不參、右大將藤原朝臣〇道綱候、院使可仰歟、仰云、有便之事也、依請、〇略中即奉勅命、先參院、奏御返事旨、〔大臣室（倫子）、可從三位之趣也、叙之〕

〔日本紀畧十一條〕寛弘三年三月四日丙午、天皇先於東三條殿命花宴、〇略中左大臣〇藤原道長妻倫子並子息家司等各增爵、

〔日本紀畧十一條〕寛弘五年十月十六日癸卯、天皇賀鳳輦行幸中宮彰子御所上東門第、依第二皇子〇後一條誕生也、有音樂、即以皇子爲親王、御名敦成、左大臣〇藤原道長以下於南殿拜舞、宴遊之後給祿有差、又叙位、子刻還御、〔其中左大臣子息二人、頼通教通〕家司二人叙位、

〔御堂關白記〕寛弘五年十月十六日癸卯、道方朝臣召右大臣、〇藤原顯光候前、御書叙位、以道方被仰云、可賜一階、如何奏聞云、官位共高、仕公間非無其恐、不賜爲慶、又仰云、可然、家司一人賜賞、可奏、其人者、以季隆奏也、叙位了右府著座、正二位藤原朝臣齊信、從二位源朝臣俊賢、藤原朝臣賴通、從四位下敎通從四位下季隆、以道方奏云、實成朝臣上達部亮、被給一階、仰云書落也、早可入者、右大臣承也、書加從三位實成、源倫子從一位、慶賀人々奏聞其由、余並内府同奏、是依子慶也、

〔續世繼（七）六條殿〇源顯房〕はよのおぼえあに〇源俊房よりもまさり給て、大納言の大將、中宮〇白河后賢子のおほんおやにておはせしに、大臣あきて侍りけるを、白川のみかどおぼしわづらはせ給て、ひごろすぎけるに、匡房の中納言におほせられあはせければ、ほりかはの大納言〇後房をなさせ給へとうちいだして申ければ、みかどおぼしめしよりて、このたびならずば法師にならんといふなり、又上らうどもも有て、われこそなるべけれなどいへば、それもすてがたきなりとおぼせられければ、大納言大臣になり侍ることは、かならずしも一二といふこと侍らず、なるべき人をえりてなされ侍るなり、又國のつかさへたる人いかゞなど〇道眞申けるは、はかせはべちのことに侍り、又さいがくたかく侍らんあにを、大臣になさせ給はんに、出家するおとうともよに侍らじと申ければ、堀川殿はなり給へりけるとぞ、六條のおとゞはそのゝちにぞなり給し、中宮の御おやほりかはのみかどの御おぼえにていとめでたくおはしき、

〔中右記〕寛治七年十一月十五日己巳、今夜有大將召、仰藏人頭左中將宗通朝臣、奉仰令内豎召權大納言源朝臣雅實卿、〔于時在右府（顯房）六條〕則被參仗座、〔被候奥座〕宗通朝臣仰云、可成賜右近衛大將日時撰申者、則奉此旨退出、〇略中

今夜召仰後、大納言還家書定文、件定文宮内大輔俊信書之云々、

抑今夜五節帳代試也、先被相尋例之處、或有除目下名、或有臨時叙位者、仍所被仰下也、彼大納言年少卅五、是雖有右府讓、超越數輩之上、蔭被補顯要之大任、甚有恐事也、但國母之人、先例又如此、是一之道理也、可然云々、咸里之貴誠矣斯言、〇略中

廿日甲午、依可任大將事有除目、今日禁中御物忌也、仍殿下内府令參籠給也、未時許大納言參内、〔螺鈿劍、有文帶、紫淡緒、前駈八人、右兵衛督以下、右府子族五人皆扈從、暫徘徊陣腋儀如官奏、東面但依御物忌、北第一間只一間也垂御簾、御物忌付廂御簾、又大臣圓座外、加敷殿下御料圓座、須臾出御、御直執柄殿下令候御、召藏人頭宗通朝臣被仰可召大臣由、宗通朝臣出仗座召之、内大臣參上、著御前座、即召人、藏人兵部大輔通輔參候、依仰持參紙筆等、

右近衛大將正二位源朝臣雅實（兼將曹良定、件良貞申文、頭中將依仰持參御前也、事了大臣取除目、退歸於殿上、召清書上卿（權中納言基定卿）給之、上卿著陣行清書并下名事等云々、此間大將參弓場殿、付頭中將奏慶賀、次拜舞、（至後再拜之時、隨身等追前、後聞右府命云、後拜ト云ハ先一拜、次之拜時、隨身可追前也、而至于左右左舞踏後二拜追前、是隨身等失也者、左少辨重資諷諫云々、）拜間、官人發歌笛聲、次府生等ニ御酒給ヒ被奏、（件謂前ニ、次將以下賜饗祿ヒ奏云々、）勅許之後、渡南庭參中宮御方、令歸之後、大將下南庭、被拜嚴親右相府云々、右府有牽出物、馬一疋者、（中略）

人々被談云、新大將此年之間、被拜任事誠大運也、祖父故土御門右府（師房）五十餘任大將、嚴親右府卅餘任此職、至此納言者、已卅餘也、隨及子孫彌以早速也、就中時口二三の人子、姪爲大將之事、誠未曾有也、右相府奇不可思議歟、

十二月廿七日庚午、依任大將事有除目、未時許內府令蒙勅授帶劒宣旨給、頭辨仰下上卿左兵衛督、內府則於弓場殿令奏慶賀由、拜舞之後令著仗座給、（去廿五日、難可有勅授宣旨依□後日引及今日也、）左大臣（縁細劒、紫、淡參內、藤大納言、中宮大夫、師）中納言中將、殿上人親五六輩扈從、前駈十餘人許、此中四位一人（義綱朝臣）頭中將宗通朝臣、此間出御使往反院、（略）

左大臣、左右大將、源氏同時相置例、未有此事、今年春日御社頻恠異、興福寺大衆亂逆、若是此徵歟、加之大納言五人之中、三人已源氏、六衛府督五人已源氏、七辨之中四人也、他門誠希有之例也、爲藤氏甚有懼之故歟、

【續世繼（三男）也】保延五年にや侍りけん、つちのとのひつじの年五月十八日、よになくけうらなる玉のをのこ宮（近衛）うまれさせ給ぬれバ、院（鳥羽）のうちさらなり、世の中もうごくまでよろこびあへるさまいはんかたなし、（略）八月十七日春宮にたゝせ給、昭陽舍に御ゑつらひありてわたらせ給、大夫には堀川の大納言（顯頼）なり給、御母（鳥羽后得子）のをぢにおはして、ことにえらばせ給へる

なり、

【吾妻鏡】二十八　寛喜三年二月廿一日、京都飛脚參著、去十二日、中宮（將軍家（藤原頼經）御姉、後堀河后竴子）御平產、皇子（四條）降誕之由申之云々、四月十七日、京都使者參著、依中宮御入內賞、去八日將軍家令叙正四位下御之由申之、

【續日本紀（三文武）】慶雲四年四月壬午、詔曰、天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣（乃不比等）仕奉狀者、今（爾未）不在、掛母畏支天皇御世御世仕奉而、今（母）又朕卿（止）爲而、以明淨心而朕（乎）助奉事（乃）重（支）勞（支）事（乎）所念坐爾依而、多利麻比氐夜夜彌賜（閇婆）忌忍事（爾）似事（乎志奈母）常勞（彌）所念坐（久止）宣、又難波大宮御宇掛母畏支天皇命（乃孝德）汝父藤原大臣（乃鎌足）仕奉（賀流）狀（乎婆）、建內宿禰命（乃）仕奉（賀流）事（止）同事（叙止）勅而、治賜慈賜利、是以令文所載（多流乎）跡止爲而、隨令長遠（久）始今而次次被賜將往物（叙止）、食封五千戶賜（久止）勅命聞宣、辭而不受、減三千戶賜二千戶、一千戶傳于子孫、

【公卿補任（文德）】攝政從一位藤良房　天安二年十一月七日宣旨爲攝政、准三宮、食封賜內舍人左右近衛爲隨身、帶仗資人卅人、依爲帝外祖被抽賞也、

【濫觴抄下】准三宮

清和十四年辛卯（貞觀十三）三月十日丙戌、勅攝政太政大臣准三宮、賜年官封戶三千、內舍人、左右近衛兵衛六人、隨身兵仗資人四十人、

【三代實錄（十九清和）】貞觀十三年四月十日丙戌、勅、功多者賞厚、先王之通規、德茂者位尊、往哲之彝訓、是故蒼精既著、增高於曲阜之基、朱火以光、加映於博陸之地、爰及本朝亦有舊典、皆迹存於鉛槧、事絢於縗蒸、太政大臣外祖父藤原朝臣、風槩沉遠、器度淹凝、摘縢之寄攸歸、據計之任是重、朕自在襁褓、賴其保生、義爲君臣、恩過父母、蓋有不世之功、須受非常之寵、而鳴謙在心、卑損無已、所以顯著之績、春秋繁茂、降崇之典、歲月寂寞、今朕已得成人、大臣頹齡漸暮、若遂掊多之美、不崇加異之章、則恐當時後代、將歸

謗於朕躬、夫太政大臣法當食邑三千戸、及隨身兵仗、國有成式、又准三宮給年官、先帝之恩寵也、至于封邑固讓二千、唯享千戸、隨身等事皆辭不受、朕以祿法所當、古賢不辭、既能有其功、居其位、何不食其祿、增其威、然則所辭封邑等事、乖元老崇班之義、非國家褒飾之心、故今不敢踰法、唯盡其所當、宜其封戸全食三千、以内舍人二人左右近衛左右兵衛各六人爲其隨身之兵、又給帶仗資人三十人、年官准三宮事、亦當奉遵先帝之遺詔、又大臣所保官爵、皆是先朝之寵章也、於朕之時、無一加益、仍欲增一位之餘階、而深忌亢極、固自遜辭、朕不敢違、全其冲挹、斯亦屈己之志、成人之美也、普告遐邇、令知朕意、

十四日庚寅、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表曰、臣伏奉今月十日勅旨、賜臣以食邑如舊、命年官准三宮、帶刀資人隨身兵仗等事、荷恩不力、啣膽無間、臣聞太政大臣者、上理陰陽、下經邦國、一人有慶、師範猶施、四海無波、儀形自用而先帝不棄、臣庸瑣、委以此崇班、純陽未免履氷、臘月逾添流汗、自愧形影、深執撝謙、唯許減封三分有一、又隨身兵仗等事、雖舊貫不敢當其仁、年官則恩是新情、臣未堪爲其首、故臣並固辭、以視不虚受、今陛下更憲章先帝、重宣慰鴻私、忠誠不移、先後惟一、臣欲推賢以避路、何私陛下公選之官、將扶老以干城、何分陛下宿衛之士、況比年調和不偶、水旱重仍、倉廩少禮節之資、城池失金湯之險、故去十一年六月二十六日聖主下勅曰、服御常膳並宜減撤、同年七月二日公卿上奏曰、五位已上封祿亦暫減折、其議未復、其事猶存、豈君臣偏好卑謙、蓋内外共待豐稔、若以斯時全食、彼邑、欺恥格於先帝、而取嫌猜於當時也、且尸素者天奪其鑒、充盈者鬼瞰其家、温飽有餘、何以忘止足、年齡已暮、暫欲養遊魂、臣所以不奉遵公私兼濟而已、不任懇欵屏營之至、謹修表狀、陳讓以聞、不許、〇又見都氏文集、菅家文草、

〔三代實錄四十陽成〕元慶六年二月甲戌朔、勅曰、舅氏太政大臣藤原朝臣、〇經基朕自在提抱、賴其保護、思隆非常之渥寵、以答莫大之元功、其職封職田資人等、累經以聞、自遜辭、朕不敢違之、聽其所請、又舊儀所賜隨身内舍人二人、左右近衛各六人、然而隨其固辭、不更加給、依前日之分配、減

定内舍人二人左右近衛各四人、但任人賜爵等並准三宮、一如先帝策命忠仁公故事、

〔公卿補任醍醐〕左大臣從二位藤時平　延喜二年正月廿八日、賜別封二千戸、

〔公卿補任朱雀〕攝政左大臣正二位藤忠平　延長九年五月廿日、賜内舍人隨身、左右衛四人任人爵人並准三宮、〇中略承平二年二月廿九日、宣旨聽乘牛車出入上東門、十一月廿六日、叙從一位、

〔日本紀略二朱雀〕天慶二年正月廿八日、太政大臣〇藤原忠平任人賜爵並准三宮、一如貞觀故事、

〔公卿補任圓融〕關白太政大臣從一位藤兼通　貞元二年十月十一日、依病辭關白幷太政大臣上表、即有勅許、十一月四日、依請停關白、讓于左大臣、〇藤原頼忠同日詔、任人爵人准三宮、

〔本朝文粹二勅奨〕充華山法皇外祖母惠子女王封戸年官年爵勅、　慶保胤

勅漢武即位、臧兒遇封、誠是眇代之恒規、抑亦前史之令典也、朕外祖母王氏、〇藤原伊尹妻禮法在心、閨闈垂範、朕當幼日、早別先妣〇懐子祖母視朕亦猶子、朕報祖母未如親、往年厭世歸道、出家爲尼、何以塵俗之風、妄訪勸念之月、授邑土三百戸、幷年爵内外官三分等、聊爲湯沐資、兼與役從之輩、主者施行、

永觀二年十二月十三日

〔日本紀略一條〕寛和二年六月廿八日乙丑、勅賜攝政右大臣〇藤原兼家内舍人二人左右近衛各四人爲隨身、

〔本朝文粹表四〕爲入道前太政大臣〇藤原兼家辭職幷封戸准三宮第三表　江匡衡

臣某言、頻獻表奏、未蒙照臨、仰前疏而增戰栗、濡禿筆而惱虞松、臣某中謝臣伏惟察能授官、上聖爲之布德、揣分受職、往賢由其全身、若授受乖其宜、則如養魚鼈於層雲之巓、棲鳥雀於重淵之底者也、臣齡先懸車而身已病、器非負鼎而力早衰、騏驥之病也、駑馬先之、況駑馬之病乎、孟賁之衰也、庸夫蔑之、況庸夫之衰乎、凡登高秩者、必飾謙挹之詞、至大年者、即述歸老之志、今臣所請、異於彼焉、夫事無兩全、物難俱有、連枝或臨艾服、今凋枯、臣之餘六旬者、可謂家老、末葉多列槐庭、今榮顯、臣之居三公者、是摠國卿、